

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(34)

町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

志 布 志 城 跡

(内城跡・松尾城跡・高城跡・新城跡)

平成15・16年度確認調査

2005年1月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会



内城跡より志布志湾を望む



志布志城跡全景



内城跡遠景



内城跡より3城跡を望む



内城跡 3T (本丸・曲輪 3 上段) 礎石建物跡



内城跡4T (本丸・曲輪3上段) 階段状石積



内城跡19T (中野久尾・曲輪5下段) 虎口



内城跡空堀（空堀2・土居d付近）



高城跡1T（二の丸）空堀



内城跡 出土遺物



松尾城跡 出土遺物



高城跡 出土遺物



新城跡 出土遺物

序 文

わがまち志布志には多くの文化財が存在し、埋蔵文化財についても多数の遺跡があることで知られております。本町を流れる二大河川である前川・安楽川の流域を中心として、200か所以上の「周知の遺跡」が存在し、特に縄文時代の遺跡が多いことから「縄文銀座」と俗称されるほどです。一方で、志布志は古くより港町として栄え、交易の拠点、交通の要衝として繁栄し、「志布志千軒町」と呼ばれるほどに繁栄いたしました。

このように志布志は、縄文遺跡のみならず中世・近世の文化財にも恵まれ、現在も寺院跡や武家屋敷のたたずまいが往時を偲ばせます。これらの文化財は、私たちが過去から受け継いだ貴重な遺産であり、また、未来へと伝えていかねばならない歴史の足跡であると確信しております。

この度、町内遺跡発掘調査等事業として、中世山城である志布志城跡の埋蔵文化財発掘調査を実施することが出来ました。志布志城は4城から構成される大規模な山城であり、中世の志布志を象徴する重要な史跡であります。主要な城である内城跡が鹿児島県指定史跡に列せられていることなどからも、その歴史的価値は万人の認めることと思われれます。中世・近世の史跡を整備し、志布志の「まち」を活性化する「歴史の街づくり構想」においても、志布志城跡の史跡公園整備が盛り込まれ、まさに、志布志のシンボルとしてふさわしい史跡であります。

本町では、町内に存在する重要遺跡の確認調査を目的に国と県の補助を受け国庫補助事業として、町内遺跡発掘調査等事業を平成12年度から実施してきましたが、平成14年度まで3か年の成果については、平成15年度に報告書を刊行することが出来ました。これに続き、志布志城跡の調査報告書として本書をまとめ、発刊するはこびとなりました。この報告書が、われらのふるさとの歴史を解明する一助となることを願うとともに、文化財の保護、学術研究、学校教育と様々な場で広く活用されることを願います。

発刊にあたり、事業の推進、発掘調査及び整理作業については、各分野の専門家の方々をはじめ、各方面の皆様から御指導と御協力をいただきました。心からの感謝を申し上げます。

平成17年1月

志布志町教育委員会

例 言

- 1 この報告書は、平成15年(2003)度から平成16年(2004)度に国県の補助を得て実施した、町内遺跡発掘調査等事業の報告書である。
- 2 埋蔵文化財の発掘調査は、志布志町教育委員会が調査主体となり実施した。
- 3 調査における実測および測量、写真撮影は作業員の補助のもと大窪が行った。
- 4 調査の実施にあたっては、文化庁記念物課及び鹿児島県教育庁文化財課の指導・教示を受けた。また、調査の進捗を志布志城史跡公園保存整備事業基本計画策定検討委員会及び、同埋蔵文化財専門部会に報告し、指導を仰いだ。
- 5 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
- 6 遺物番号については、通し番号とし、挿図、図版とも一致している。
- 7 確認調査のために設定したトレンチ(試掘溝)は、山城ごとに通し番号をふり、1 T、2 T、3 T…と表記した。なお、トレンチの規模は原則として、南北×東西mで示した。
- 8 出土遺物は志布志町教育委員会で一括保管し、必要に応じて公開展示する。
- 9 本書の執筆及び編集は大窪が担当した。
- 10 「第八章 志布志城の縄張」として、三木靖氏(鹿児島国際大学生涯教育センター長)の玉稿を賜った。これは氏の「日向国志布志城の縄張」より内城の縄張に関する部分を抄録したものである。なお、全文は『志布志城跡関係資料集 I』(平成17年3月刊行予定)に収録される。
- 11 調査及び報告書作成にあたり、以下の方々に御教示を賜った。御芳名を記して感謝申し上げる次第である。(五十音順・敬称略)

青崎 和憲(県教育庁文化財課)	上田 耕(知覧町教育委員会)
大橋 康二(佐賀県立九州文化陶磁館)	上村 俊雄(鹿児島国際大学教授)
倉元 良文(県教育庁文化財課・平成15年度)	黒田 裕司(熊本県三加和町教育委員会)
坂井 秀弥(文化庁記念物課)	新東 晃一(県立埋蔵文化財センター)
重久 淳一(隼人町教育委員会)	千田 嘉博(国立歴史民俗博物館)
堂込 秀人(鹿児島県教育庁文化財課)	中村 和美(県立埋蔵文化財センター)
永山 又男(志布志町文化財保護審議会会長)	橋口 亘(坊津町教育委員会)
服部 英雄(九州大学大学院教授)	本田 道輝(鹿児島大学教授)
三木 靖(鹿児島国際大学生涯学習センター長)	
- 12 発掘調査にあたり、別府大学学部生の上原直樹(平成15年度)、川俣唱子(平成16年度)の協力を得た。
- 13 内城跡の航空写真撮影については、ふじた航空写真に撮影を委託した。
- 14 内城跡のグリッド設定については、株式会社ありあけ測量設計に作業を委託した。
- 15 内城跡3、4、8、19Tの実測の一部を、株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。

巻頭写真

序文

例言

目次

第I章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	4
第II章 志布志城の概要	6
第1節 志布志城の概要	6
第2節 志布志城の位置と環境	8
第3節 基本層序	9
第III章 内城跡の調査	12
第1節 本丸周辺の調査	12
第2節 矢倉場の調査	18
第3節 中野久尾の調査	22
第4節 大野久尾の調査	26
第5節 空堀の調査	31
第6節 遺物	32
第7節 まとめ	38
第IV章 松尾城跡の調査	44
第1節 調査の概要	44
第2節 遺物	47
第3節 まとめ	50
第V章 高城跡の調査	53
第1節 調査の概要	53
第2節 遺物	57
第3節 まとめ	57
第VI章 新城跡の調査	61
第1節 調査の概要	61
第2節 遺物	65
第3節 まとめ	66
第VII章 総括	67
第VIII章 志布志城の縄張	70

写真図版

報告書抄録

あとがき

挿 図 目 次

第1図 布志城跡周辺史跡図	8	第25図 内城跡空堀断面図	29
第2図 内城跡全域図	10	第26図 内城跡 出土遺物実測図(1)	32
第3図 内城跡縄張図	11	第27図 内城跡 出土遺物実測図(2)	33
第4図 本丸周辺トレンチ位置図	12	第28図 内城跡 出土遺物実測図(3)	35
第5図 内城跡2 T断面図	13	第29図 内城跡 出土遺物実測図(4)	37
第6図 内城跡3 T遺構検出平断面図	14	第30図 松尾城跡トレンチ位置図	42
第7図 内城跡4 平断面図	15	第31図 松尾城縄張図	43
第8図 内城跡5 T平断面図	16	第32図 松尾城跡1・2 T断面図	45
第9図 内城跡6 T平断面図	17	第33図 松尾城跡3～5 T断面図	46
第10図 内城跡7 T平面図	17	第34図 松尾城跡 出土遺物実測図(1)	48
第11図 内城跡8 T遺構検出図	18	第35図 松尾城跡 出土遺物実測図(2)	49
第12図 矢倉場トレンチ位置図	18	第36図 高城跡トレンチ位置図	52
第13図 内城跡9～12 T位置図	21	第37図 高城跡1 T断面図	53
第14図 内城跡9・12 T断面図	20	第38図 高城跡1・2 T平断面図	54
第15図 内城跡14・15 T断面図	21	第39図 高城跡3・4 T断面図	55
第16図 内城跡16 T平断面図	22	第40図 高城跡5 T断面図	56
第17図 中野久尾トレンチ位置図	23	第41図 高城跡出土遺物実測図	58
第18図 内城跡17 T断面図	23	第42図 新城跡トレンチ位置図	60
第19図 内城跡18 T断面図	24	第43図 新城跡1 T断面図	62
第20図 内城跡19 T平断面図	25	第44図 新城跡2 T断面図	63
第21図 内城跡20 T断面図	25	第45図 新城跡3～5 T断面図	64
第22図 大野久尾トレンチ位置図	26	第46図 新城跡出土遺物実測図	65
第23図 内城跡21・22 T断面図	27	第47図 内城跡縄張図(1/2500)	79
第24図 内城跡23・24 T断面図	27	第48図 『志布志記』の志布志城	80

表 目 次

第1表 志布志城史跡公園整備に向けての経過	2
第2表 志布志城跡埋蔵文化財調査の経緯	3
第3表 志布志城関連年表	7
第4表 内城跡 出土遺物一覧(1)	40
第5表 内城跡 出土遺物一覧(2)	41
第6表 松尾城跡 出土遺物一覧	51
第7表 高城跡 出土遺物一覧	59
第8表 新城跡 出土遺物一覧	66

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯

志布志町は、内城・松尾城・高城・新城の 4 城で構成される、中世山城「志布志城」を史跡公園として保存整備し、活用を図ることを計画している。史跡公園としての整備を前提とし、志布志城跡の実態と現状を調査すべく、「周知の遺跡」である「志布志城(内城)跡」、「志布志城(松尾城)跡」、「志布志城(高城)跡」、「志布志城(新城)跡」の 4 城跡に対して、確認調査を実施することとなった。この調査範囲には、県指定史跡である志布志城(内城)跡の指定地も含まれた。なお、史跡公園整備に向けての経過については、第 1 表を参照されたい。

志布志城跡の確認調査は、町内遺跡発掘調査等事業(国庫補助事業)として、2 か年に渡って実施された。その期間は、平成15年 7 月16日から平成16年 3 月19日、平成16年 6 月1日から10月25日までである。尚、町内遺跡発掘調査等事業は平成12年度より継続実施されているが、平成12～14年に実施された宝満寺跡を中心とする調査については、平成14年度に「志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(32)」として報告書を刊行している。

確認調査は、志布志町教育委員会が主体となり、文化庁文化財部記念物課、県文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導並びに助言を得て実施した。

第 2 節 調査の組織

【平成15年度】

調査主体	志布志町教育委員会
調査責任者	” 教 育 長 一木弘文
調査調整	” 生涯教育課長 山裾幸良
調査事務	” 課長補佐 兼 文化財係長 米元史郎
	” 主 査 小村美義
	” 主 事 大窪祥晃
	” 主 事 持留幸仁(平成16年1月1日より)
調査担当者	” 主 事 大窪祥晃

【平成16年度】

調査主体	志布志町教育委員会
調査責任者	” 教 育 長 一木弘文
調査調整	” 生涯教育課長 山裾幸良
調査事務	” 生涯教育課長補佐 (歴史の街づくり担当) 米元史郎
	” 文化財係長 外岩戸敏幸(平成16年4月1日より)
	” 主 査 小村美義
	” 主 事 大窪祥晃
	” 主 事 持留幸仁
調査担当者	” 主 事 大窪祥晃

西暦.月.日	内 容
1990. 2	まちづくり委員会 設立
1991. 3	『「歴史のまちづくり」の提言 水と緑の千軒まち』刊行
1992. 3	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)『志布志新城跡』刊行
1993. 3	『志布志町「歴史の街づくり」基本構想』刊行
3.24	志布志城(内城)跡、県指定史跡に指定
2003. 3	『志布志城跡史跡公園保存整備事業 基本構想』刊行
9.26	文化庁記念物課 坂井秀弥氏との協議(於 国分市)
10.28	第1回志布志城跡史跡公園保存整備事業基本計画策定検討委員会 埋蔵文化財専門部会(以下、埋蔵文化財専門部会) 開催
11.18	第1回志布志城跡史跡公園保存整備事業基本計画策定検討委員会 (以下、検討委員会) 開催
11.23	志布志城(内城)跡、現地説明会 開催 講演会 鹿児島国際大学短期大学部部長 三木靖氏
2004. 1.21	志布志城跡シンポジウム 開催
3.11	第2回埋蔵文化財専門部会 開催
7.23	第2回検討委員会 開催
8. 8	志布志湾岸プロジェクト 親子内城跡見学
8.20	第3回埋蔵文化財専門部会 開催
9.12	ふるさと創年市民大学 山城検地
10. 1	第3回検討委員会 開催
11.29	第4回埋蔵文化財専門部会 開催
12. 3	第4回検討委員会 開催
2005. 1.30	ウォーキングin志布志麓 開催

第1表 志布志城跡史跡公園整備に向けての経過

西暦.月.日	内 容
1987.3.16~27	志布志中学校体育館改築に伴う新城跡 確認調査(1次調査)
1988.7.13~8.9	志布志中学校体育館改築に伴う新城跡 確認調査(2次調査)
1989.8.29~9.2	急傾斜地崩壊対策事業に伴う新城跡 確認調査
1992.9.18~22	治山事業に伴う高城跡 確認調査
2000.3	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)『志布志新城跡』刊行
2.14~3.21	地域防災総合治山事業に伴う高城跡 緊急確認調査
9.16~10.16	急傾斜対策事業に伴う松尾城跡 緊急確認調査
2001.10.13~19	急傾斜対策事業に伴う松尾城跡 緊急確認調査
2002.2.14~22	急傾斜対策事業に伴う高城跡 緊急確認調査
7.2~3	文化庁記念物課 坂井秀弥氏 視察・協議
7.15	県立埋蔵文化財センター 新東晃一氏 協議
	県文化財課 倉元良文氏 協議
12.15~03.1.14	志布志城跡史跡整備に先立つ高城跡 緊急確認調査
2003.7.16~04.3.19	町内遺跡発掘調査等事業に伴う志布志城跡 確認調査
9.26	文化庁記念物課 坂井秀弥氏 協議(於 国分市)
	隼人町教育委員会 重久淳一氏他 来跡
9.28	知覧町教育委員会 上田 耕氏 指導
10.18	鹿児島大学 北村良介氏 来跡
11.12	県文化財課 倉元良文氏・堂込秀人氏 指導
12.18~19	熊本県三加和町教育委員会 黒田裕司氏 指導
2004.2.13	佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏 遺物指導
2.17	知覧町教育委員会 上田 耕氏 指導
2.17~18	国立歴史民俗博物館 千田嘉博氏 指導
	九州大学大学院 服部英雄氏 指導
6.1~10.25	町内遺跡発掘調査等事業に伴う内城跡 確認調査
9.14	坊津町教育委員会 橋口 亘氏 遺物指導
9.17	文化庁記念物課 坂井秀弥氏 指導
10.26	県立埋蔵文化財センター 中村和美氏 遺物指導
12.10	佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏 遺物指導
2005.1	志布志町埋蔵文化財確認調査報告書(34)『志布志城跡』刊行

第2表 志布志城跡埋蔵文化財調査の経緯

第3節 調査の経過

平成15年度及び16年度の調査の経過は以下のとおりである。尚、2か年の調査終了後にトレンチ番号を整理したため、調査の着手順とトレンチ番号は一致しない。

1 平成15年度の調査

確認調査は、平成15年7月16日より平成16年3月19日まで実施した(実働108日)。トレンチ数は内城跡7、松尾城跡5、高城跡5、新城跡5で計22、総面積は約475㎡である。

7月16日に高城跡(本丸)に高城跡3 Tを設定し、調査を開始した。

22日には新城跡に移動し、志布志中学校校庭に残存する土塁に新城跡1 Tを設定して調査を実施し、シラス等を用いた盛土塁であることを確認した。25日に中学校テニスコート裏に残存する土塁を中心に、4 Tを設定して調査を実施し、同様にシラス等を用いた盛土塁であることを確認した。

8月4日には高城跡(二の丸)に移り、ふたつの土塁状の高まりが残存する部分に高城跡1 Tを設定し、調査を実施した。調査の結果、シラスを掘り込んだ堀を検出した。堀は幅約2m、地表面からの深さが約2.5mであった。堀底と中間部に硬化面が確認され、複数の時期において道等に利用されたことが考えられる。

25日には松尾城跡に移り、二の丸に松尾城跡1 Tを設定して曲輪面の調査を実施した。9月3日には三の丸の2 Tに移り、曲輪面を対象として建物跡の検出を目指した調査を実施した。

10月17日には内城跡に移り、内城の本丸と言われる曲輪3上段において主要な建物跡を検出するための調査を開始した。曲輪を南北に縦断するように内城跡1～3 Tを設定し、調査を進めるとともに、曲輪3下段に6 T、曲輪2上段に7 Tを設定し、調査を実施した。

11月に入り、3 Tで礎石と考えられる石が検出された。その後、関連する柱穴を検出し、礎石を持つ建物跡を確認した。23日には講演会と現地説明会を実施し、建物跡の検出状況等を公開した。

12月に入り、建物跡周辺の調査を継続しつつ、曲輪3上段に4・5 Tを設定し、調査を実施した。当初、12月で調査を終了する予定であったが、9月に文化庁への経過報告を行った際に協議を行い、内城跡以外の3城跡について調査期間を延長して追加調査を実施することとなった。

平成16年1月7日より調査を再開し、松尾城跡の追加調査として三の丸の上段に3 T、下段に4・5 Tを設定し、追加調査を実施した。19日には高城跡二の丸に高城跡2 Tを設定し、追加調査を実施した結果、T字状に交差する堀跡を検出した。並行して20日より新城跡の土塁について追加調査を行うため、中学校テニスコート裏に新城跡5 Tを設定した。調査によって、シラスを用いた盛土塁が確認され、4 Tの調査結果を補強する結果となった。25日より、高城跡本丸において、曲輪の段差部分を調査する4 T、自然地形が残る緩斜面を確認する5 Tによる追加調査を実施した。

2月3日には新城跡で1 Tを延長したほか、2・3 Tの調査を実施した。

2月19日より埋め戻しを開始し、高城跡、新城跡、松尾城跡と、順次埋め戻した。内城跡については3月11日に埋蔵文化財専門部会を開催した後、15日より埋め戻しを実施した。内城跡の埋め戻しでは、特に遺構面の保全に努め、柱穴を埋め戻した上に寒冷紗を敷き、土嚢を配して柱穴の位置を明確にするなど、今後の全面調査に備えた埋め戻しを実施した。19日、全ての

トレンチの埋め戻しを終了し、発掘用具等を撤収して調査を終了した。

2 平成16年度の調査

確認調査は、平成16年6月1日より平成16年10月25日まで実施した(実働66日)。トレンチ数は内城跡19、総面積は約271㎡である。

6月1日、空堀2の土居d付近にトレンチを設定し、重機にて掘り下げを開始した。曲輪5下段に20Tを設定し、土塁の調査を行った。3日には中野久尾の曲輪5上段に20Tと対になる17Tを設定し、調査を行った。4日には曲輪5下段の虎口を調査するため、19Tを設定。調査の状況に応じて拡張を行った。7日には大野久尾の曲輪6上段の土塁を調査するため、21Tを設定した。また、曲輪6下段の土塁に22Tを設定した。16日には、大野久尾の土塁を調査するため曲輪6下段の南西の曲輪に、23Tを設定した。

25日には、矢倉場と言われている曲輪1に調査の主体を移し、9Tを設定して曲輪面を調査するとともに、櫓台aとされる部分の調査のため、16Tを設定して土塁の調査を行った。28日には曲輪1の虎口を確認するため、14Tを設定し調査の状況に応じて拡張した。

7月に入り、曲輪1に設定した各トレンチを補完する目的で、9Tの周辺に10Tを設定し、9Tと14Tの間に12Tを設定した。虎口についても状況をさらに確認するため、15Tを設定した。21日までは曲輪1のトレンチについて、おおむねの調査を終了したが、上下段に分かれている曲輪1の状況を確認するため、9Tをさらに掘り下げるとともに、10Tを拡張する11Tを設定した。また、9Tと12Tの間に13Tを設定して状況の確認に努めた。

8月に入り、2日には本丸周辺の曲輪2下段にL字状に8Tを設定して調査を実施した。白色シラス層を掘り込んだ柱穴が多数検出され、他の曲輪にみられない状況を示した。8月末から9月にかけて数回の台風に見舞われ、調査の実施による土塁の崩壊や土壌の流出を懸念した。特に、空堀を調査したトレンチは大雨によってシラスがえぐられるとともに、雑木や木葉が流れ込み、台風一過後の処理に難渋した。

9月中旬頃までは度重なる大雨の処理に悩まされ、調査が停滞したが、大野久尾の23Tを補完する目的で24Tを設定したほか、23Tの拡張も実施した。

9月末日までにトレンチの調査をほぼ完了し、10月4日より埋め戻し作業を開始した。14日までに空堀のトレンチを除いて埋め戻しが終了し、作業用具等を搬出した。空堀のトレンチについては、重機による埋め戻しと原状復旧を行った。埋め戻し作業は台風23号の接近直前に行われたため、台風が過ぎた後の25日に被害状況及び空堀の状況を確認した後、重機を撤収し、これをもって調査の完了とした。

第Ⅱ章 志布志城の概要

第1節 志布志城の歴史的背景

志布志湾に面した前川河口付近のシラス台地の先端部に、内城・松尾城・高城・新城の4つの中世山城が存在している。この4城を総称して「志布志城」と呼称されている。

志布志城の正確な築城年は不明だが、南北朝期に松尾城と内城が築かれたと考えられ、その後、高城と新城が築かれたとされている。また、長い戦乱の年月を経過するうちに、規模の拡張が行われたとされ、特に内城では中野久尾、大野久尾が造成され、大規模な拡張が行われた。

志布志は、万寿3年(1026)平季基によって開かれた大荘園島津荘の水門として、物流の要衝の位置を確立した。平安末期の文治5年(1189)頃、救仁院氏によって治められ、現在の志布志町と松山町及び有明町の西側を救仁院と称していた。

南北朝期になり、建武3年(1336)に「救仁院志布志城」の肝付兼重が重久氏に敗れている。この時点で「志布志城」の存在が確認されるが、ここで言う志布志城は築城時期が最も早い松尾城を指すと考えられる。その後、正平3年(1348)に楡井頼仲が松尾城に入っている。

延文2年(1357)、楡井頼仲は志布志城と抛城とである大崎胡麻崎城を北朝方に攻略され、自刃した。その後をうけ、南朝方の島津氏久の養子分である新納実久が志布志に入った。対して北朝方の日向守護畠山直顕が志布志内城に入り、松尾城の新納実久を攻めたとされ、この時点で内城と松尾城が存在している。

戦いの結果、島津氏久の救援を受けた新納実久が志布志内城を占拠した。これにより、志布志は奥州島津氏の領有するところとなった。異説もあるが、氏久が内城に入ったのは貞治4年(1365)頃と推定されている。

長祿2年(1458)以降、日向南部で伊東氏等の合戦が相次ぎ、志布志城は前線の拠点として利用された。天文5年(1536)、志布志城の新納氏は、櫛間城(宮崎県串間市)にいた豊州島津家島津忠朝に攻められ、同7年(1538)には、島津忠朝・北郷忠相・肝付兼統に三方より攻められて降伏し、志布志城には豊州島津氏の島津忠朝が入った。

永祿元年(1558)以降、肝付氏が毎年のように志布志を攻め、同5年(1562)、肝付兼統が攻め落として志布志に入った。その肝付氏も天正4年(1576)には伊東氏に敗れて勢力を失うと、同5年(1577)より志布志城は島津氏が領有するところとなり、志布志地頭が置かれた。島津氏の勢力が強まったことにより、山城としての意義が低下し廃城となったとされている。

年 代	内 容
文治 5 年(1189)	安樂平九郎為成に代わり、救仁院平八成直が救仁院地頭弁済使となる
建久 2 年(1191)	救仁院平八成直、地頭弁済使職を解任される
建久 8 年(1197)	建久図田帳に 島津荘寄郡救仁院90町 地頭右兵衛忠久 とある
文永 8 年(1271)	この頃、救仁院地頭方沙汰人は図師馬入道道西
正和 5 年(1316)	救仁院地頭沙弥蓮正、宝満寺に志布志の地を寄進
元弘元年(1331)	日向方惣地頭北条守時、救仁院・救仁郷の地頭代官救仁郷資清、宝満寺に土地屋敷を寄進
建武元年(1334)	この頃、救仁郷・救仁院地方は千種忠顕の所領か？
建武 3 年(1336)	重久篤兼、志布志城の肝付兼重を攻め落とす
興国元年(1340)	楡井頼仲、大慈寺を創建
正平 3 年(1348)	楡井頼仲、松尾城(白雉城)で挙兵
正平 6 年(1351)	畠山直顕、楡井頼仲の松尾城を攻め落とす 直顕、田浦条と岩広名を大慈寺に寄進
正平12年(1357)	楡井頼仲、挙兵するも松尾城陥落し、頼仲は自刃する 新納実久、松尾城に入る。内城の畠山直顕、実久を攻めるが、島津氏久が実久を助け、直顕は櫛間に退く
正平13年(1358)	菊池武光、志布志に進行し大慈寺に禁札を出す
正平16年(1361)	島津氏久、大慈寺に岩広名半分を寄進。氏久、志布志に帰る
正平20年(1365)	この頃、氏久は志布志に居を定める
天授 3 年(1377)	氏久、内城より出陣し、都城に今川了俊を破る
応永 8 年(1401)	櫛間の本田忠親、志布志城を攻め、熊田原兄弟討死(犬之馬場合戦)
応永11年(1404)	島津元久、日向、大隅の守護職となる
応永16年(1409)	島津元久、薩摩の守護職となる(以降、島津氏が三州の守護職を歴任)
文明 6 年(1474)	この頃、志布志に新納是久及び忠明、肝付に肝付兼忠、救仁郷に肝主税助、櫛間に伊作久逸及び又四郎
天文 4 年(1535)	新納氏は志布志に居城し、梅北・財部・市成・垂水・牛根等を領有
天文 5 年(1536)	豊州島津氏忠朝、志布志城を攻める
天文 7 年(1538)	新納氏敗れ、新納忠茂は佐土原へ去る。島津忠朝が志布志城に入る
永禄元年(1558)	肝付兼統、肝付竹友に志布志を攻めさせ、島津方伊藤源四郎と向川原にて戦う
永禄 3 年(1560)	豊州島津氏、志布志城を去り、肝付良兼が入城
永禄 7 年(1564)	肝付兼統、重臣とともに志布志城に入る 肝付竹友、地頭として志布志に入る
天正元年(1573)	末吉の北郷時久と肝付氏が国合原にて戦い、肝付竹友戦死
天正 4 年(1576)	志布志地頭肝付兼石、南郷で戦死 肝付兼護の所領は高山のみとなり志布志などは島津所領になる
天正 5 年(1577)	志布志に島津氏の初代地頭鎌田政近が入る
天正15年(1587)	豊臣秀吉の日向国城割により松尾城は廃城の対象に(破壊されず)
元和元年(1615)	一国一城令発布 この頃には廃城か

第3表 志布志城関連年表 (年号は北朝のものを用了)

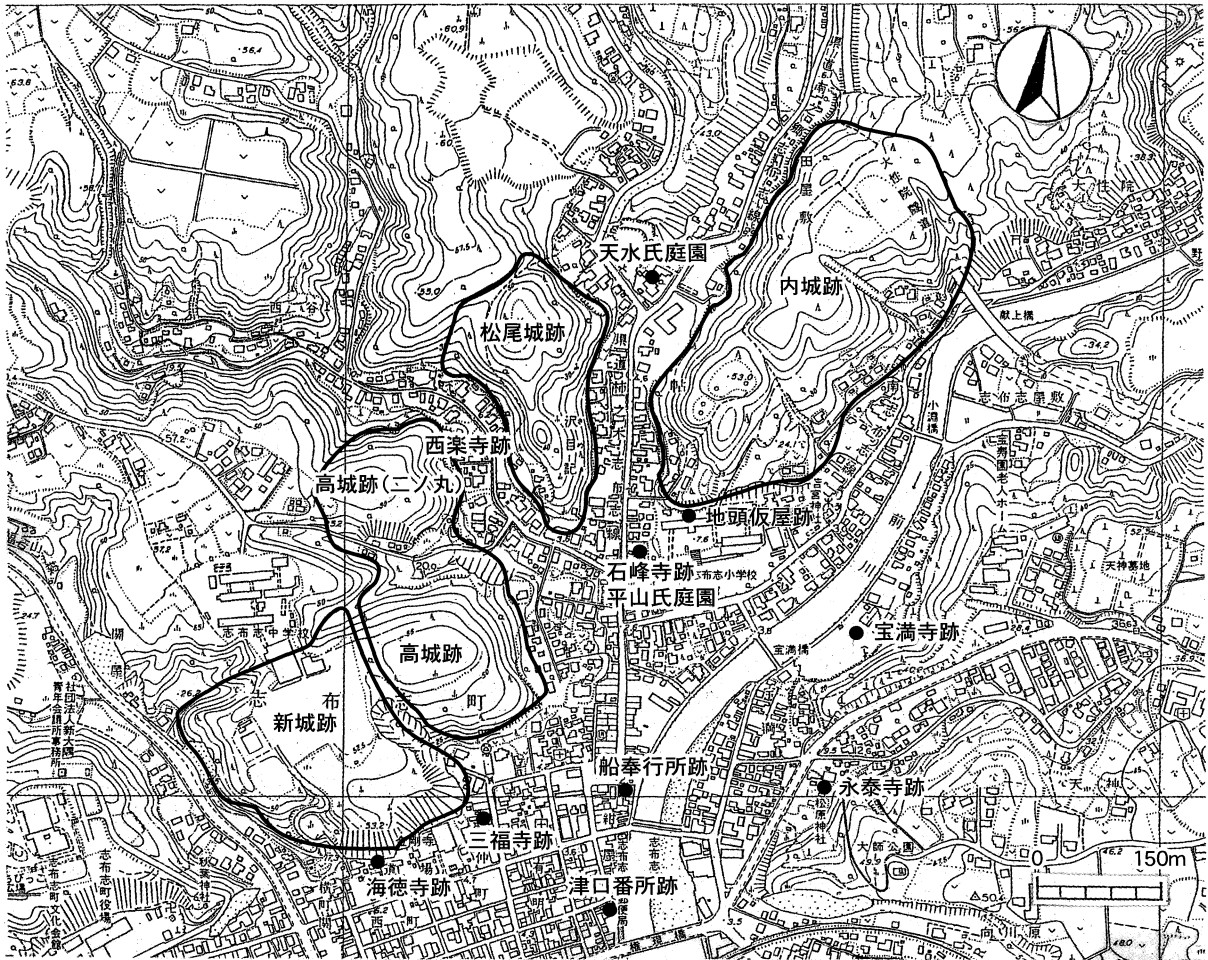
第2節 志布志城の位置と周辺

志布志城は前川の河口付近、シラス台地の先端部に存在する。前川の西に北東から南西に延びた細長い丘陵の先端部に内城が存在する。内城の西側に松尾城、高城二の丸が続き、その南に高城と新城が存在する。4城は海岸段丘であるシラス台地の端部に存在し、アカホヤ火山灰土層あるいはシラス火山灰土層までを造成して曲輪面等を得ている。

内城と松尾城の間にある沢日記馬場と称された通りをはじめとし、中近世には山城の周辺に武家屋敷が立ち並び、麓を形成していた。現在の志布志小学校の場所に領主の居館が存在し、近世には地頭仮屋が建てられたと伝えられる。麓地区を中心として、数多く存在した寺院のほとんどは明治の廃仏毀釈によって廃寺となったが、県指定史跡である宝満寺跡には庭園や住職墓地が残り、石峰寺の庭園も平山氏庭園として県指定がなされ、往時の姿を伝えている。

沢日記馬場や松尾城と高城二の丸との間の西谷馬場には湧水群が存在し、御前の水、蔵王田の水等の名前が民話伝承とともに伝えられ、一部は現在も生活用水として利用されている。

志布志城の東を通り志布志湾に流れ込む前川には船着場があり、藩政時代には船奉行所や津口番所が置かれていた。津口番所跡は町指定史跡となり、現在も石垣が残っている。



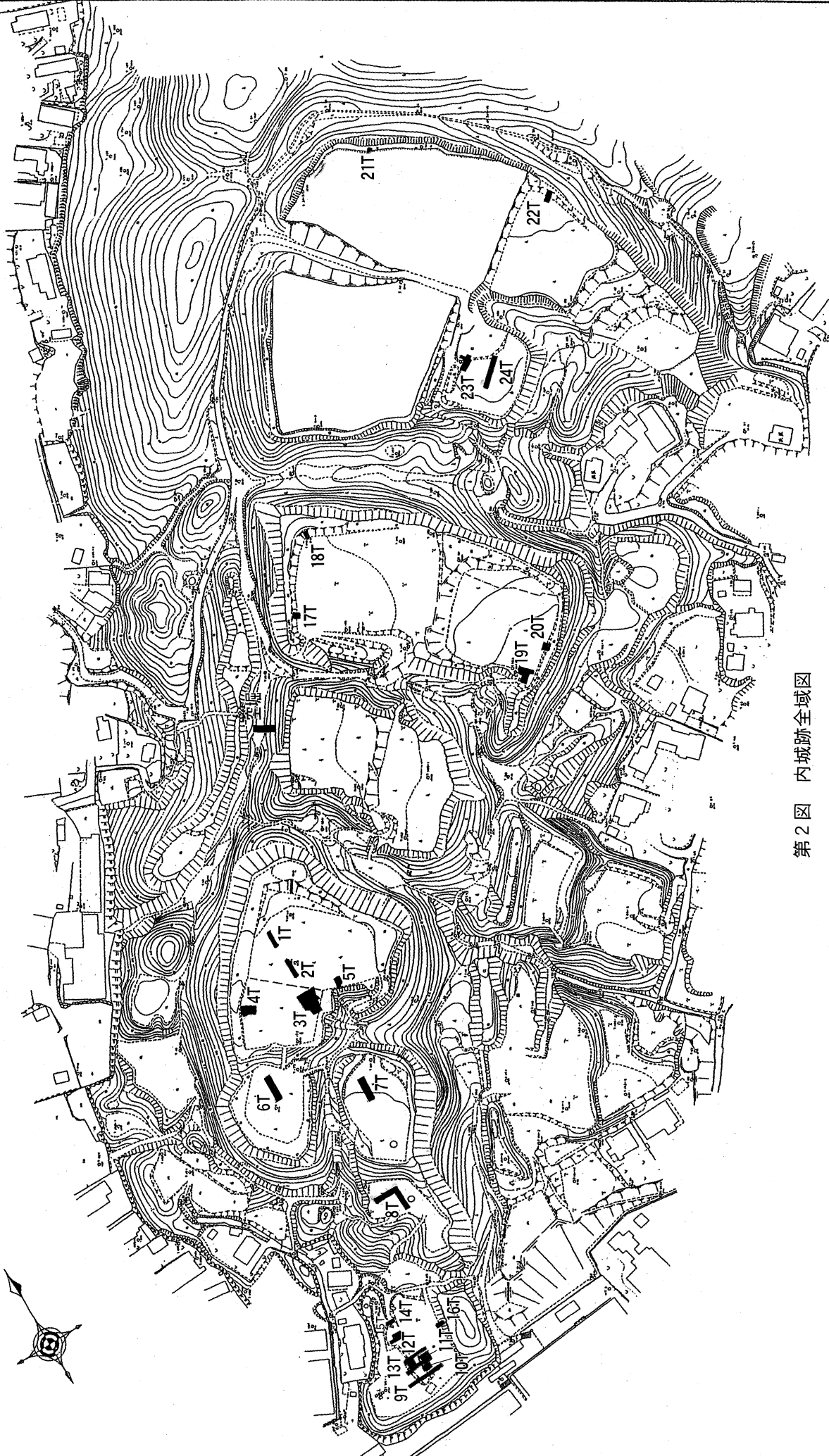
第1図 志布志城跡周辺史跡図

第3節 基本層序

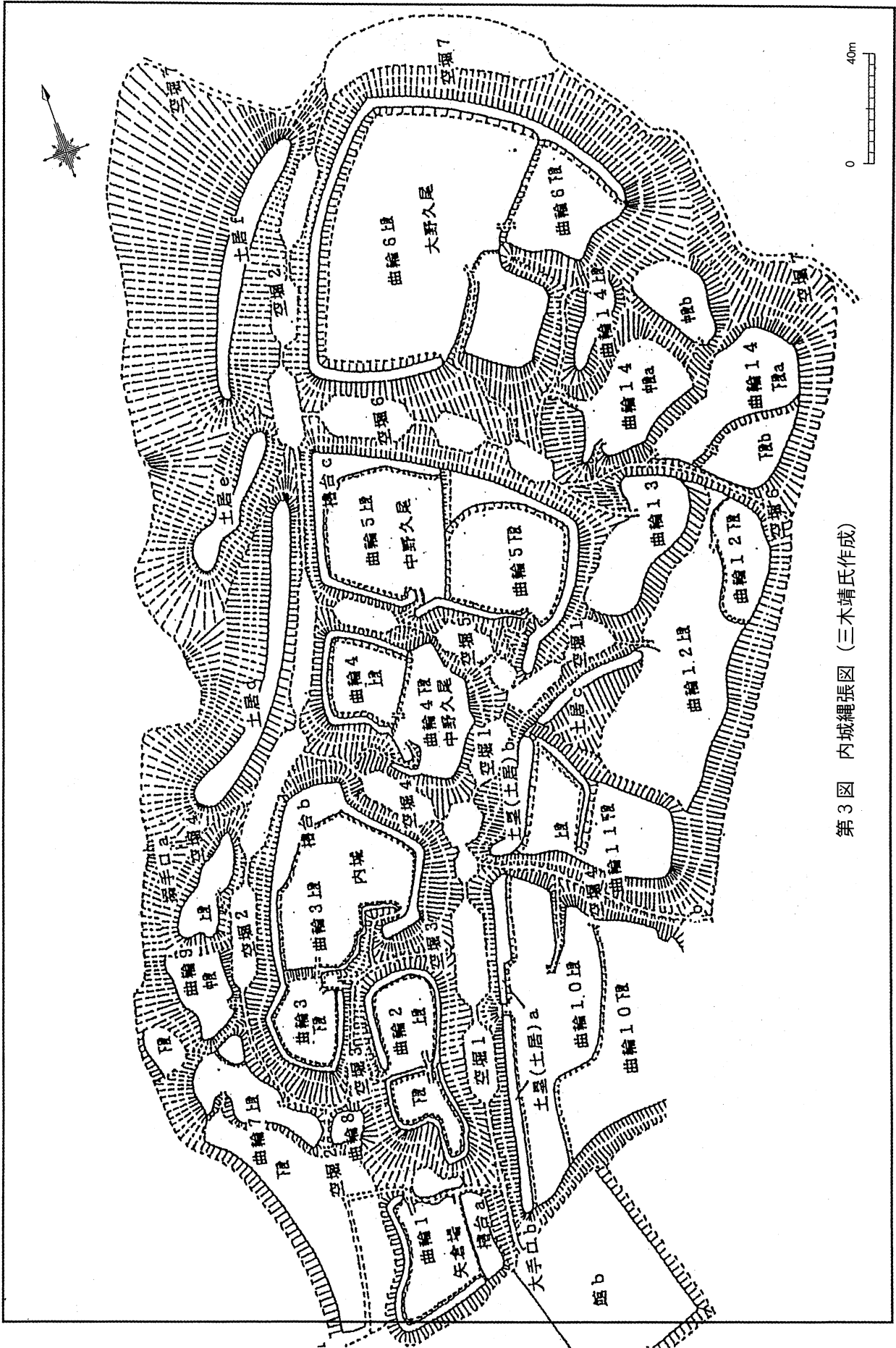
志布志城は山城であるため、築城時には大規模な造成が行われたと考えられる。曲輪部分では自然地形を削平して平坦面をもとめたため、一部の自然堆積層は見られず、土塁等では自然堆積とは異なった人為的な盛土による層が確認される。4城を通じてモデルとなる基本層序を想定し、この基本層序に該当する層についてはローマ数字で示し、築城及び山城の使用時期に関連する土層についてはアラビア数字を用いて特徴を示した。

- I層：表土。旧耕作土と考えられる茶色軟質土を主体とし、大正火山灰を包含する。場所によっては、大正火山灰に伴う軽石が薄い層状の堆積を示し、色調・土質により細分される。
- II層：暗茶褐色土。場所によっては明度が下がり黒色を呈する。また、堆積状況が良好な地点では、ゴマシオ状と表現される細粒火山灰を包含する場合がある。これは霧島を起源とする火山灰に比定され、「御池」と通称される。
- III層：暗黄色火山灰土。「アカホヤ」と通称される鬼界カルデラを起源とする火山灰の二次堆積層。上方には「池田」と通称される池田カルデラの噴火に起源する降下軽石が浮遊して点在している。
- IV層：黄橙色火山灰土。アカホヤ火山灰。堆積状況が良好な場所では、やや硬質である。堆積状況が良くない場所では、硬化したブロック状に確認される場合がある。志布志城跡では、土塁の盛土等に用いられていることが確認されている。
- V層：黒色土。縄文時代早期の層に相当する。場所によっては上方が青みがかかるほか、淡色を呈する場合もある。また、最下部では下層の影響を受け、やや明度が増す。
- VI層：乳白色火山灰土。薩摩火山灰土。「サツマ」と通称される層である。
- VII層：茶褐色粘質土。「チョコ層」と通称される層である。粘質を持ち、やや硬質。下方では明度が下がり暗茶色を呈し、場所によっては数層に細分される。
- VIII層：黄褐色火山灰土。「ヌレシラス」と通称される層である。
- IX層：白色火山灰土。VIII層と同起源であるが白色を呈し砂質。一般に「シラス」と呼ばれている層である。志布志城跡では、土塁等の盛土に多く使用されており、その場合には白色系の砂質土として表現した。

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX



第2图 内城迹全域图



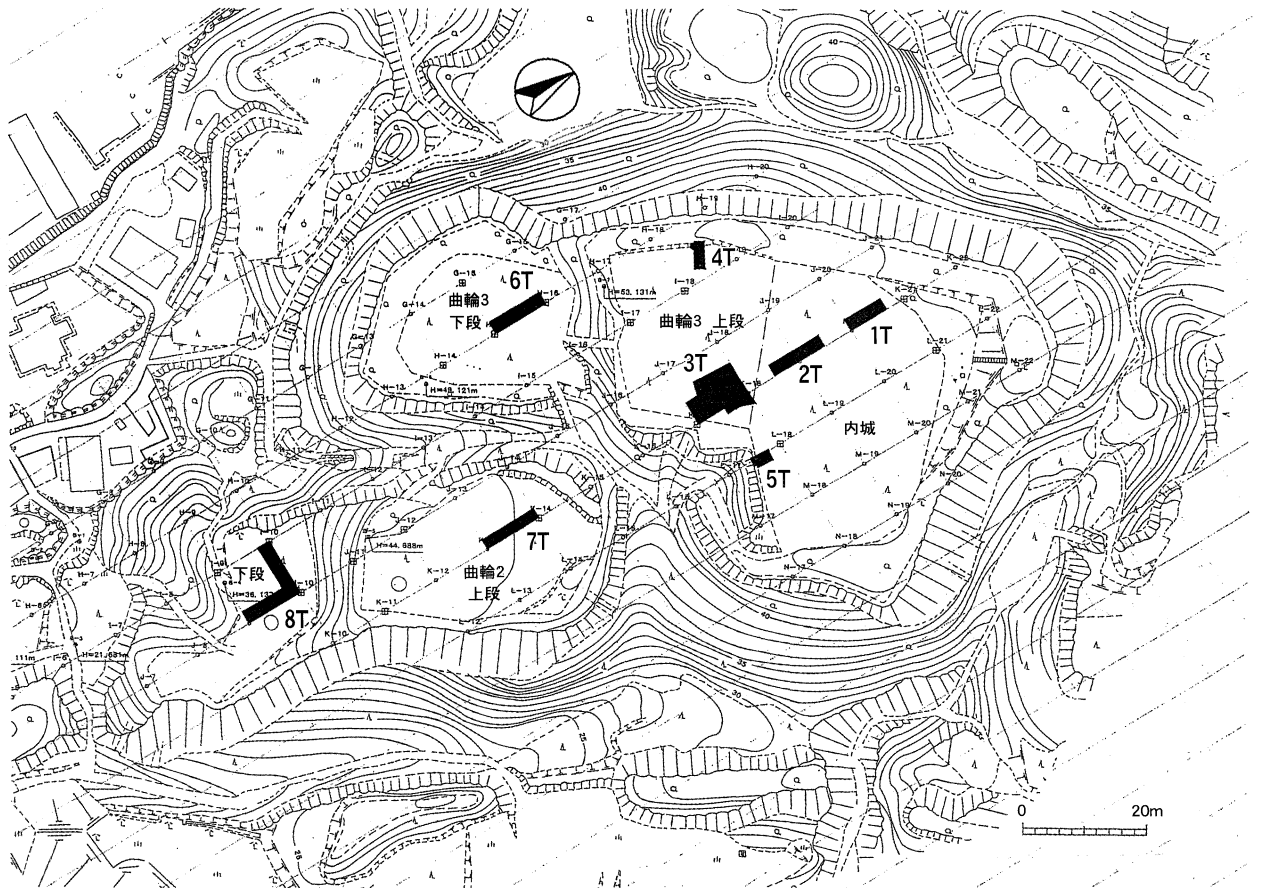
第3図 内城縄張図 (三木靖氏作成)

第三章 内城跡の調査

志布志城の中心的な存在である内城跡の調査は平成15・16年度の2か年に渡り実施した。本丸周辺に8か所、矢倉場に8か所、空堀に1か所、中野久尾に4か所、大野久尾に4か所のトレンチ(試掘溝)を設定して実施した。以下、調査地点ごとの調査概要と遺構について述べ、遺物については内城跡出土遺物として、一括して述べる。曲輪については、第3図の縄張図の呼称を用いる。

第1節 本丸周辺の調査

本丸周辺の調査は、本丸と呼ばれ内城跡の中心的な曲輪と考えられている曲輪3の上下段を中心に、曲輪2上下段に1～8Tを設定した。1～3T及び6～8Tは遺構面の調査を目的とし、4・5Tは土塁の調査を目的とした。出土遺物については、青磁及び白磁が全体的に15～16世紀で良くまとまったほか、備前焼を中心とした国産陶器も16世紀代と考えられる。トレンチによっては、古銭、金属製品の小片、鉄滓等も確認された。



第4図 本丸周辺トレンチ位置図

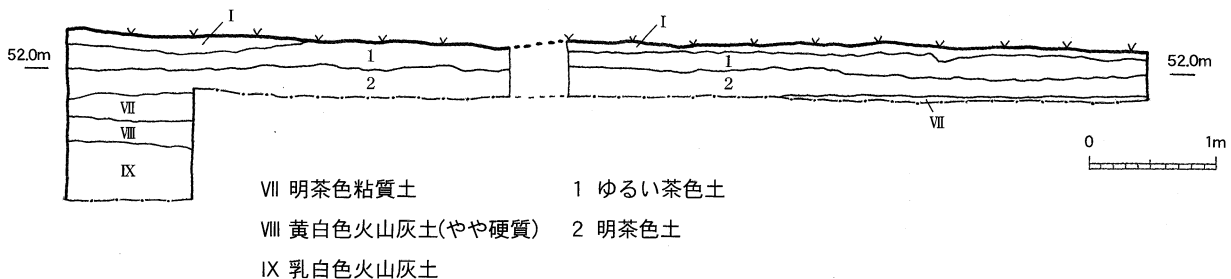
【1 T】(第4図参照)

本丸上段と通称される曲輪3上段、標高約52.4mの地点に約8×2mで設定した。1～3 Tは曲輪を南北に横断するように直線的に設定した。表土より約40cmを掘り下げたところ、造成面と思われる白色シラス層に到達したが、明確な遺構等は確認されなかった。曲輪3上段は、内城の中心的な曲輪であり建物跡の検出が予想されたが、遺構から建物跡等を想定することはできなかった。

【2 T】(第5図参照)

曲輪3上段の1 Tの延長上で、標高約52.2mの地点に約10×2mで設定した。表土より約50cm掘り下げた明茶褐色粘質土層までが削平されており、山城の造成面ととらえられる。1 Tと同様に遺構の検出は少なく、建物跡等を想定することはできなかった。

立地に大差がない1 Tと異なり白色シラス層を検出しなかったため、北端部分で下層確認を行った結果、白色シラス層の上層と思われる黄白色シラス層を確認した。これにより、曲輪3上段の本来の地形は北から南にかけて大きく傾斜しており、それをほぼ均一に削平して平坦面を得ていることが推測された。

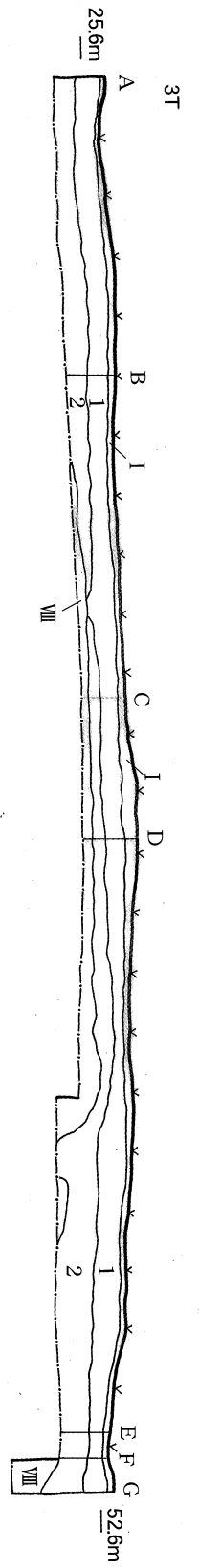


第5図 内城跡2 T断面図

【3 T】(第6図参照)

曲輪3上段の1・2 Tの延長上で、標高約52.8mの地点に約10×2mで設定した後、拡張した。黄色シラス面までを掘り下げたところ、南端部で礎石の可能性のある石を検出し、拡張して調査を実施した結果、複数の礎石を有する柱跡を確認した。これは柱穴に礎石を伴うもので、合計6基が確認された。北東方向に約2.5mの間隔で並ぶ3基を1列とし、東西方向に約2mの間隔で2列が検出された。これらと同一の建物を構成すると考えられる礎石を伴わない柱穴も含めると、建物跡はさらに西側に伸びる。礎石を有することからも、大型の建物であったことを推測させる。また、この建物跡以外にも複数の柱穴が確認され、内城の本丸と呼ばれる曲輪面が少なくとも2時期以上に渡って使用されたことを推測させる。

礎石を伴う柱穴を検出した面からは、中国製の青白磁、染付、陶器等が確認されたほか、銅ないし青銅製品の破片と思われる金属片が確認された。また、建物跡の北側で1点の洪武通寶が確認された。この洪武通寶は「治」を背字に持つ、いわゆる加治木銭である。

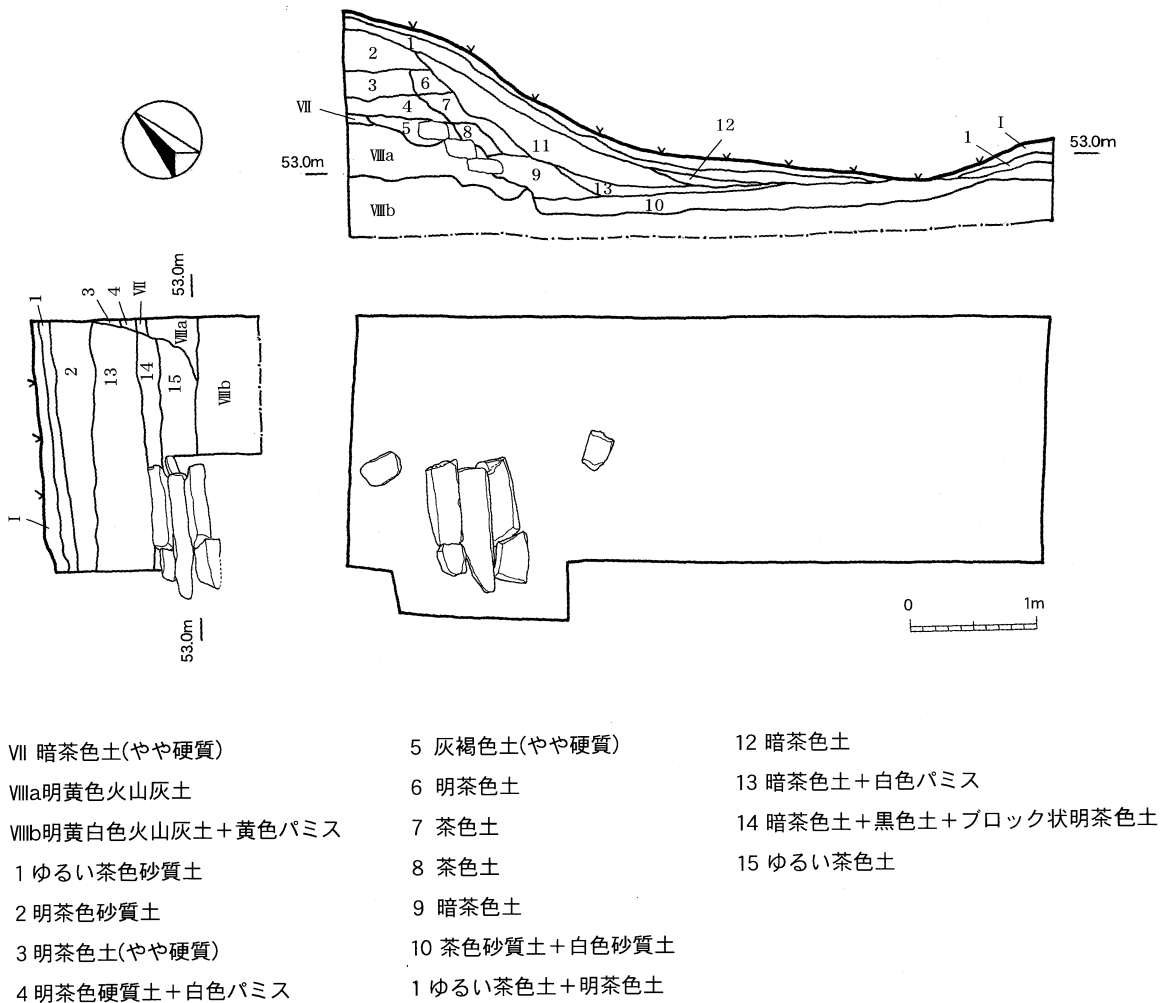


1 茶色土+灰白色パミス 2 茶色砂質土

第6図 内城跡3T遺構検出平断面図

【4 T】(第5図参照)

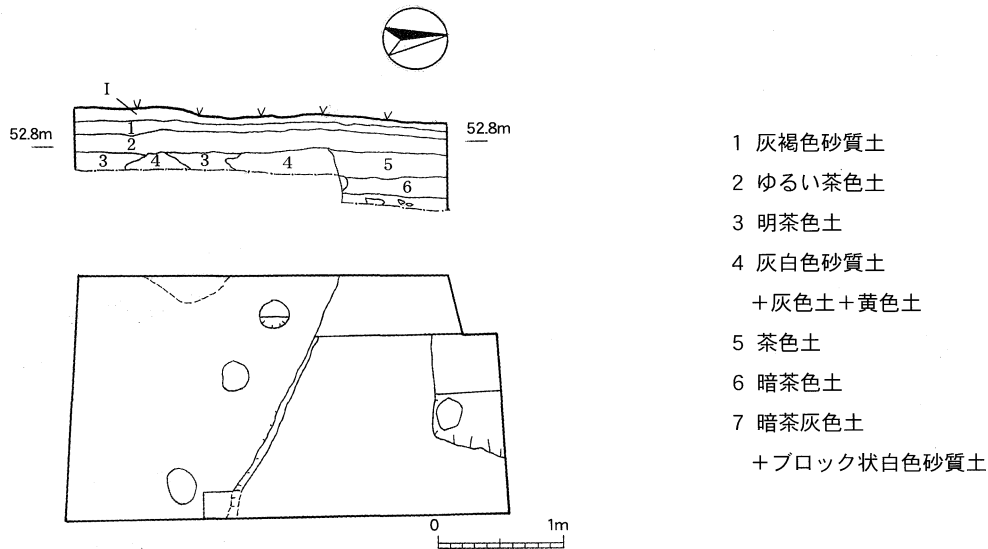
曲輪3上段西側の土塁に約2×5mで設定した。土塁中腹の西端部で標高約54.3m、土塁の裾部分で約52.8mである。土塁部分は近現代の造成等によって一部が破壊されているが、断面観察によって土塁の築造方法を確認することができた。土塁は黄色シラス層までを削り込んで造られた、切土塁である。シラスを削り込んだ築造面の傾斜に沿って、約70×30×15cmの板状の石が3点検出された。これらの石は土塁の土止め等を目的としたものとも考えられるが、人為的に階段状に積み重ねられていることなどから、土塁上に登るための足場と考えられる。残存する土塁は、本来の高さより低くなっていることを考慮すると、土塁の傾斜に対して石積みによる傾斜は緩やかであり、頂上部まで続く階段状の施設ではなく、数個の石による足がかり程度のもと考えられる。あるいは、土塁のこの部分のみを切り込むようにして、足場が設置されていた可能性がある。



第7図 内城跡4T断面図

【5 T】(第6図参照)

曲輪3上段の端部、虎口付近で標高約53mの地点に約3×2mで設定した。縄張図上では土塁の存在が想定されていたが、今回の調査においては土塁の痕跡は確認されなかった。白色シラス層を削り込んで平坦面を得ているが、南側の堀に向かい2か所で段状の造成がなされている。造成してから盛土塁を築く手法とも思われるが、詳細は不明である。今後の全面調査によって曲輪3上段東側全域の状況が把握されるまでは推測の域を出ない。



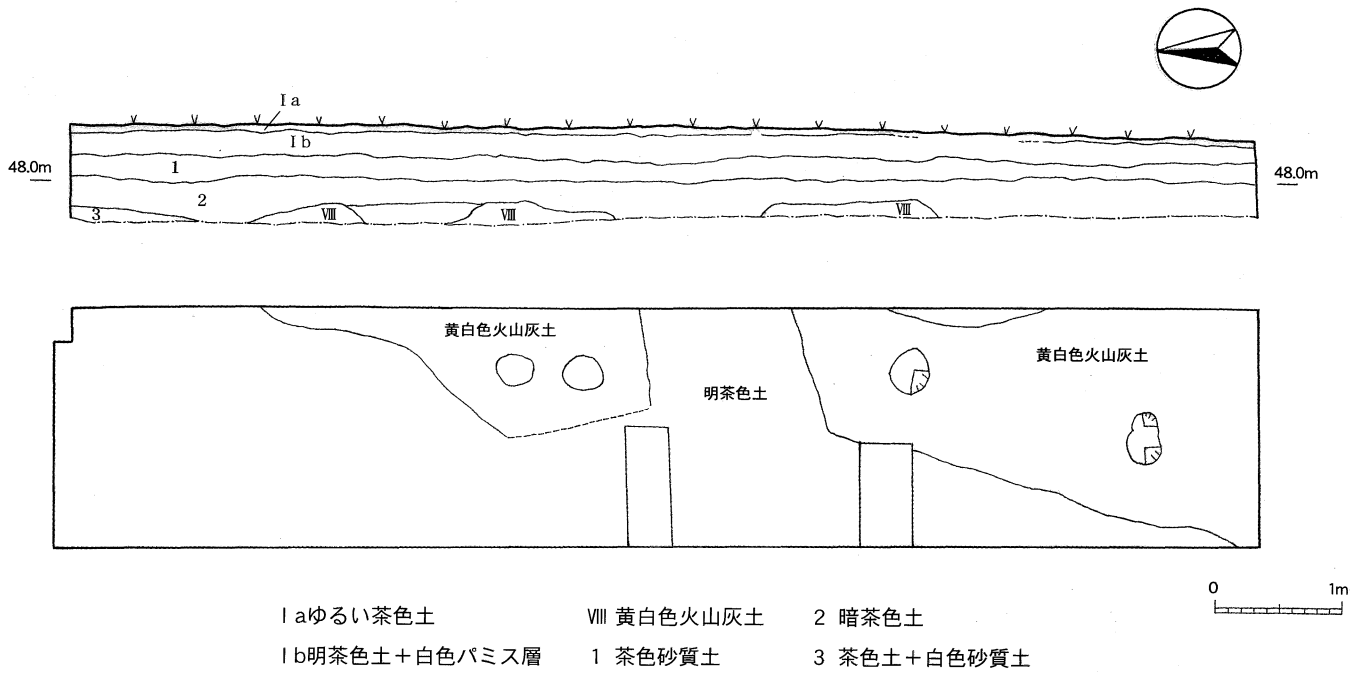
第8図 内城跡5 T 平断面図

【6 T】(第9図参照)

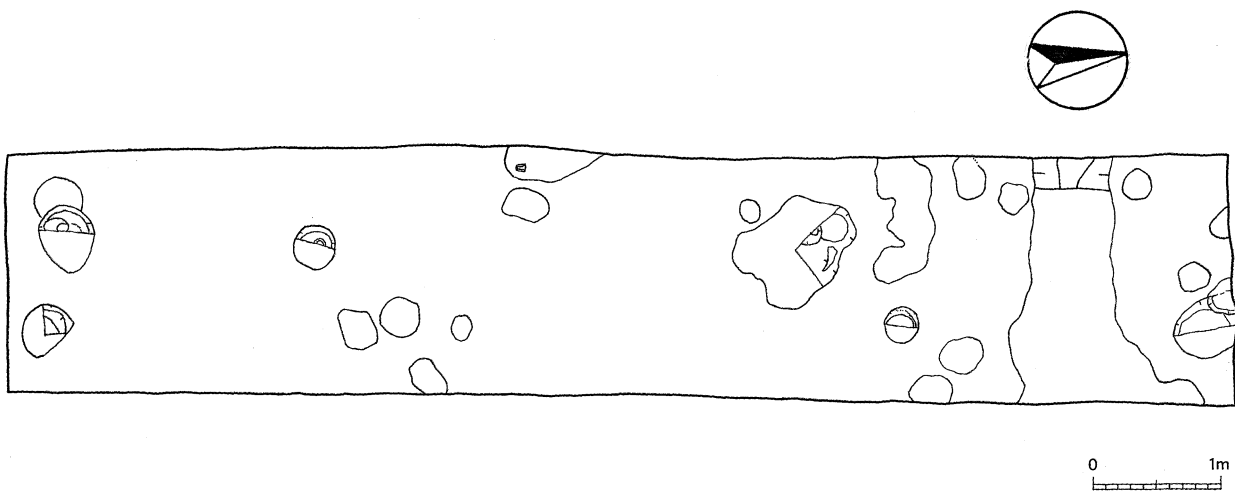
本丸下段と通称される曲輪3下段で、標高約48.2mの地点に約10×2mで設定した。黄色シラス面で幅広の溝状と思われる遺構と柱穴を検出し、その一部を半裁したほか、ミニトレンチを設定して調査を実施した。溝状の遺構はトレンチ外に広がり、規模や性格を詳細に把握することはできなかった。遺物として金属片を多数確認したが小片のうえ錆化が著しく、図化できないものも多く鉄器として明確な形状を特定するには至らなかった。また、少量の鉄滓も確認されたことから、曲輪3下段には製鉄あるいは鍛冶に関係する遺構が存在する可能性がある。

【7 T】(第10図参照)

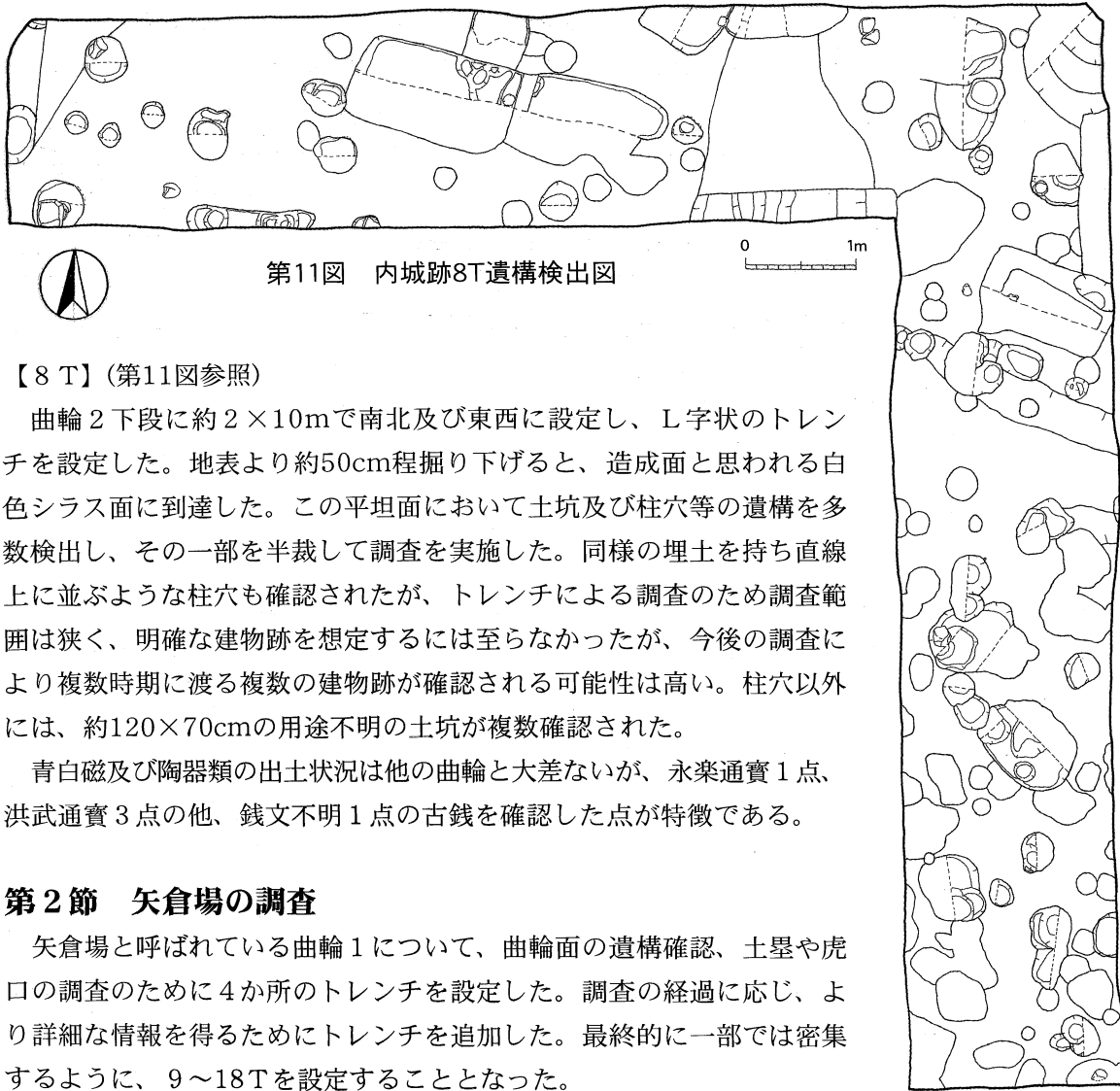
曲輪2上段の遺構面を確認するため、約10×2mで設定した。地表面より約60cm掘り下げた段階で、白色シラスを削平した造成面を確認した。白色シラス面で柱穴等と思われる遺構を検出し、その一部を半裁して調査を実施した。半裁した結果、不整形で樹痕等の可能性があるものもあったが、複数の柱穴を確認した。しかしながら、明確な建物跡は想定されなかった。青白磁、染付を中心とした陶磁器片を確認したが、この地点特有の特徴は見られなかった。



第9図 内城跡6 T平断面図



第10図 内城跡7 T平断面図



第11図 内城跡8T遺構検出図

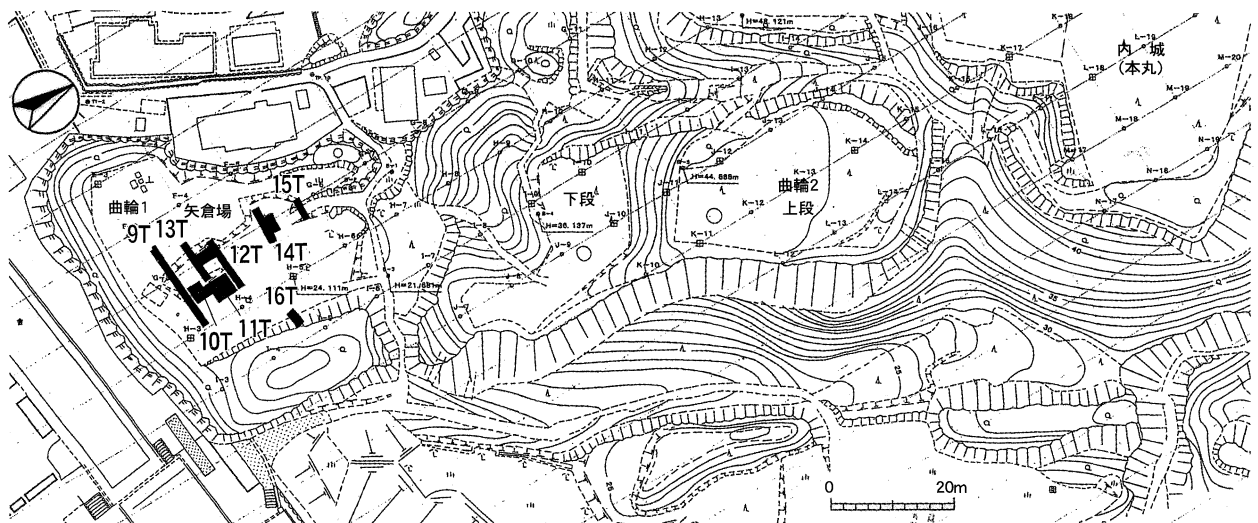
【8 T】(第11図参照)

曲輪2下段に約2×10mで南北及び東西に設定し、L字状のトレンチを設定した。地表より約50cm程掘り下げると、造成面と思われる白色シラス面に到達した。この平坦面において土坑及び柱穴等の遺構を多数検出し、その一部を半裁して調査を実施した。同様の埋土を持ち直線上に並ぶような柱穴も確認されたが、トレンチによる調査のため調査範囲は狭く、明確な建物跡を想定するには至らなかったが、今後の調査により複数時期に渡る複数の建物跡が確認される可能性は高い。柱穴以外には、約120×70cmの用途不明の土坑が複数確認された。

青白磁及び陶器類の出土状況は他の曲輪と大差ないが、永楽通寶1点、洪武通寶3点の他、銭文不明1点の古銭を確認した点が特徴である。

第2節 矢倉場の調査

矢倉場と呼ばれている曲輪1について、曲輪面の遺構確認、土塁や虎口の調査のために4か所のトレンチを設定した。調査の経過に応じ、より詳細な情報を得るためにトレンチを追加した。最終的に一部では密集するように、9～18Tを設定することとなった。



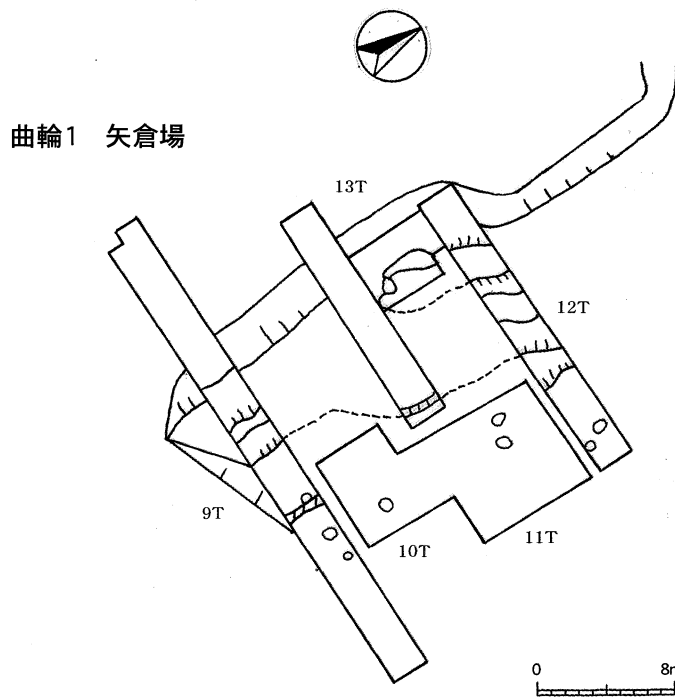
第12図 矢倉場トレンチ位置図

本丸周辺と類似する遺物を確認したが、特に縄文土器及び石器といった縄文時代の遺物が多量に確認された他、土師器が多く確認された。また、内城跡の麓にある小学校によって遊具施設等が設置されていた経緯や、新納氏の墓碑が建てられていることが関係しているのか、曲輪全体で近現代の陶磁器片が多数表採された。

【9 T】(第13・14図参照)

曲輪1の西端部に約1×14mで設定した。現状は緩やかな段差を伴って東から西に傾斜しており、トレンチ東端で標高約23.9m、西端で約21.6mである。トレンチ東側では、表土よりわずかに掘り下げた程度で白色シラス層を確認したが、西側ではシラス層が大きく削り込まれて段差が形成されている。白色シラス面を追いかけるように調査した結果、曲輪1は本来、東を上段、西を下段とした2段の構成であったことが推察された。上下段の高低差は約3.5mに及ぶ。この高低差はシラスをはじめとし、茶色土、灰色土等で埋められている。築城後に何らかの目的で段差を埋めたもので、曲輪の改変が行われたものと推測される。

埋土中からは青磁や土師器のほか、縄文土器や石器が確認された。土師器には中世以前のものも含まれている。曲輪西側に存在した自然地形を削平して高低差を埋めたと思われ、その際に山城以前の古代及び縄文の遺跡を破壊したと考えられる。

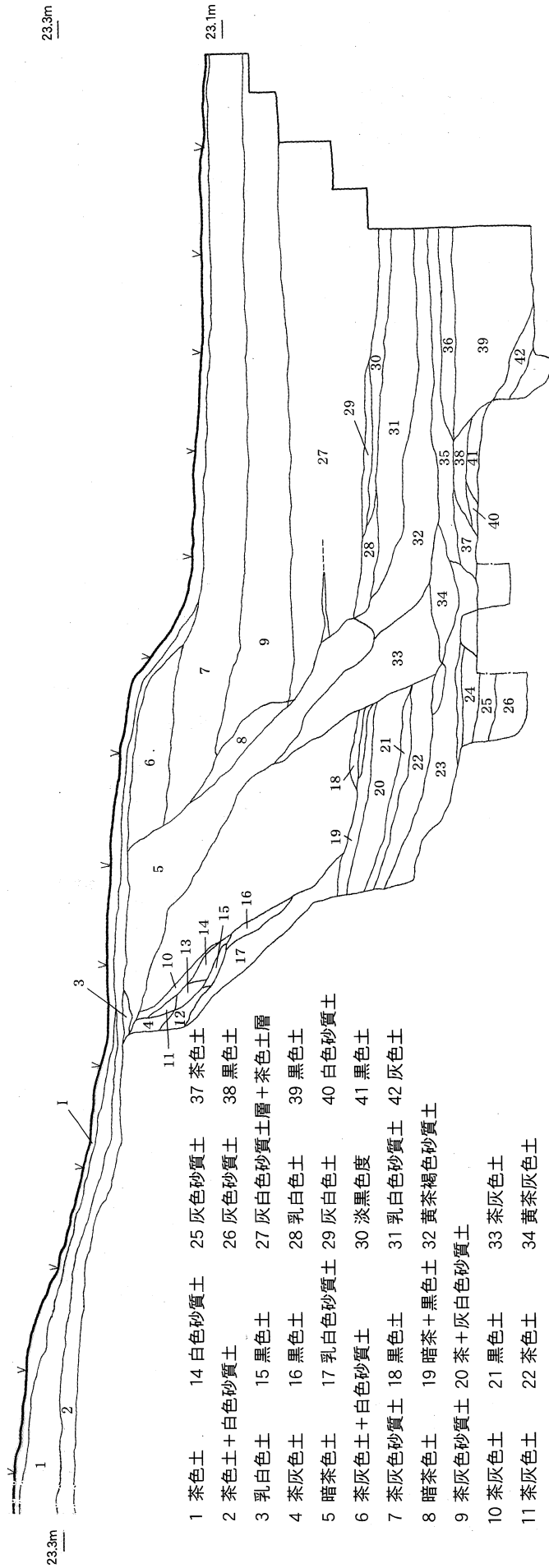


第13図 内城跡9~12T位置図

【10・11 T】(第13図参照)

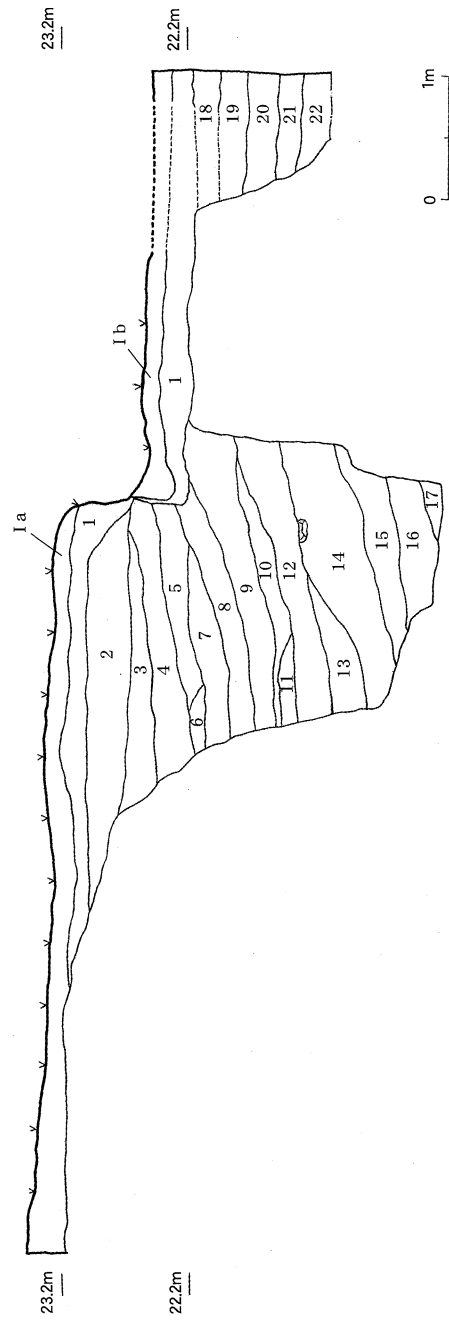
9 Tの成果を受け、曲輪の上段端部に柵列等が存在するかを確認するため、9 Tの横に約3×2mで10 Tを設定した。10 Tにおいては土塁や柵列等の痕跡は確認されず、さらに10 Tの北側に11 Tを約3.5×3.5mで設定したが、10 Tとほぼ同様の状況であることを確認するにとどまった。

9T



- 1 茶色土
- 2 茶色土+白色砂質土
- 3 乳白色土
- 4 茶灰色土
- 5 暗茶色土
- 6 茶灰色土+白色砂質土
- 7 茶灰色砂質土
- 8 暗茶色土
- 9 茶灰色砂質土
- 10 茶灰色土
- 11 茶灰色土
- 12 茶灰色土
- 13 白色砂質土
- 14 白色砂質土
- 15 黒色土
- 16 黒色土
- 17 乳白色砂質土
- 18 黒色土
- 19 暗茶+黒色土
- 20 茶+灰白色砂質土
- 21 黒色土
- 22 茶色土
- 23 暗茶色土
- 24 灰白色砂質土
- 25 灰白色砂質土
- 26 灰白色砂質土
- 27 灰白色砂質土層+茶色土層
- 28 乳白色土
- 29 灰白色土
- 30 淡黒色度
- 31 乳白色砂質土
- 32 黄茶褐色砂質土
- 33 茶灰色土
- 34 黄茶灰色土
- 35 茶灰色土+白色パミス
- 36 淡黒色土
- 37 茶色土
- 38 黒色土
- 39 黒色土
- 40 白色砂質土
- 41 黒色土
- 42 灰白色土

12T



- 1a ゆるい茶灰色土
- 1b 暗茶色土
- 1 茶灰色土
- 2 乳白色砂質土
- 3 白色砂質土
- 4 黄灰色砂質土
- 5 白色砂質土
- 6 フロック状白色砂質土
- 7 茶灰色砂質土
- 8 灰白色砂質土
- 9 茶灰色砂質土+パミス
- 10 灰白色土
- 11 フロック状白色砂質土
- 12 茶灰色砂質土
- 13 灰白色砂質土
- 14 白色砂質土
- 15 灰白色砂質土
- 16 灰白色砂質土+パミス
- 17 茶灰色土
- 18 灰白色砂質土
- 19 茶色砂質土
- 20 茶灰色土
- 21 灰白色砂質土+パミス
- 22 淡黒茶色土

第14図 内城跡9・12T断面図

【12T】(第13・14図参照)

曲輪1の中央部付近における状況を確認するため、約2×約10mで設定した。東端で標高約23.4m、西端で約22.5mである。9Tと同様に白色シラス層を削り込んで平坦面を得ているが、トレンチの中央付近では堀状に削り込まれている。造成面からの深さは約3mを測り、埋土はシラスを中心とした茶色土等で砂質を呈し、川砂のような印象を受ける。青磁、土師器、縄文土器等が混在して検出され、硬化面は確認されなかった。

トレンチ西端でもシラスは大きく削り込まれ、9Tに類似した埋土の状況を示す。9Tの深度と調査状況を考慮し安全のため、下段の曲輪面までは掘り下げなかったが、9Tと同様に上下の2段構成であることが推測され、曲輪中央部付近でも東西で上下段に分かれていたことと思われる。

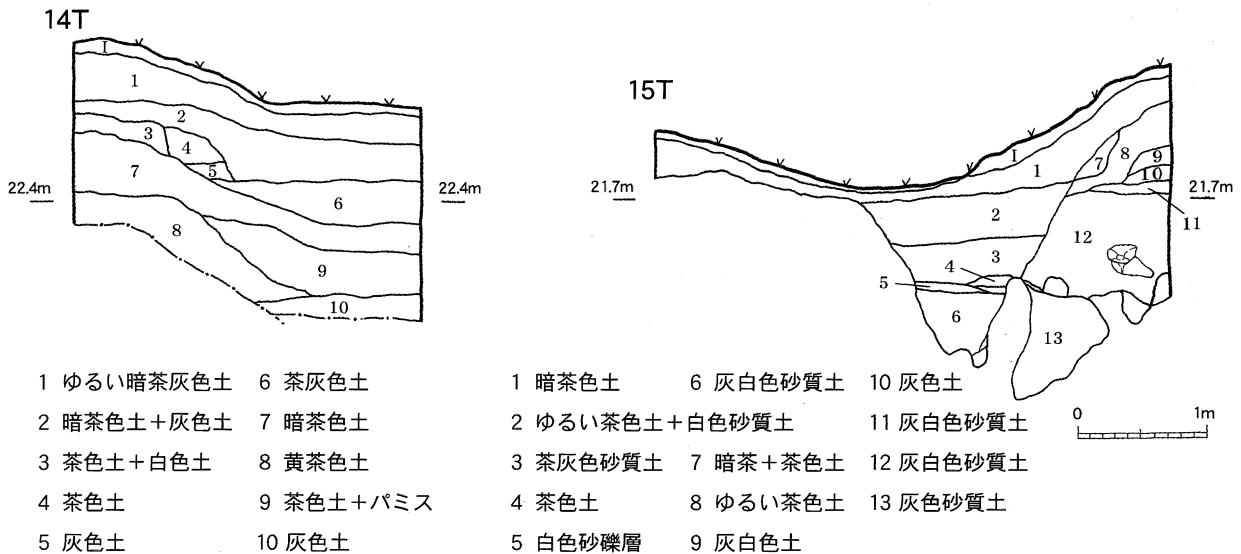
【13T】(第12・13図参照)

12Tで確認した堀状部分の延長を確認するため、9Tと12Tの間に約2×7mで設定した。白色シラスを段状に削り込んだ状況と埋土は、9T及び12Tに類似する。12T同様、下段の曲輪面までは掘り下げなかった。12Tで確認した堀状部分は13Tでは確認できず、12Tとの間を拡張して確認を行った結果、堀状部分の西壁は舌状に飛び出すような形状を呈していると思われる。

【14・15T】(第15図参照)

曲輪1の北側、矢倉場の虎口と通称されている通路を登りきった地点に、約3×3mで設定し、後に拡張した。他のトレンチと同様に、白色シラスを削り込んだ状況が確認されたが、虎口の状況を確認することはできなかった。そのため、さらに北側の坂道の途中に約2×4mで15Tを設定した。通路部分の標高約21.8mである。

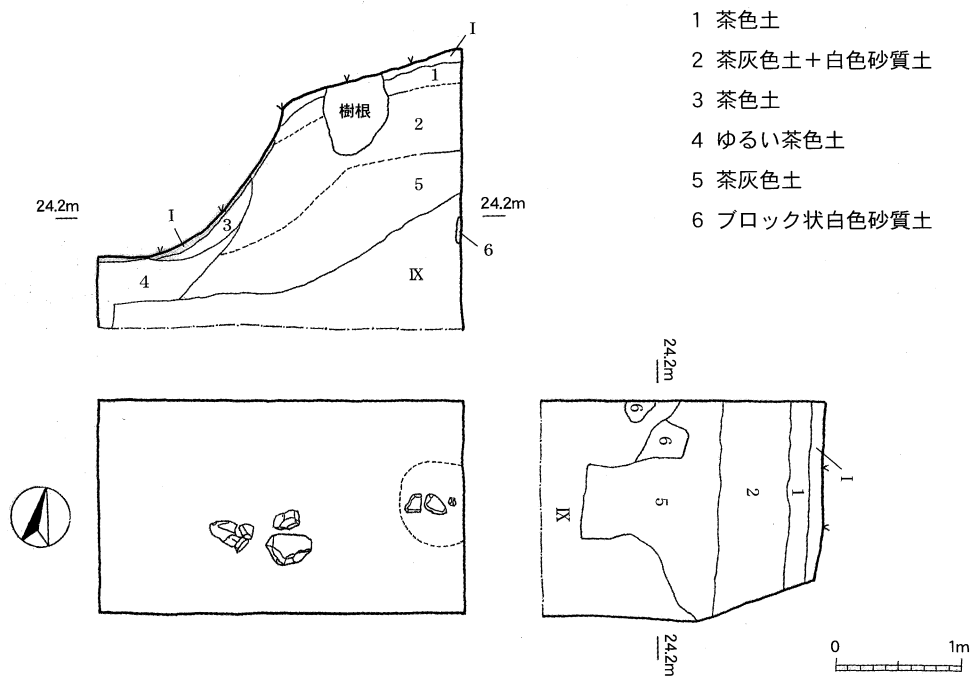
15Tでは、白色シラスを削り込んだ溝状部分を確認した。埋土は灰色を呈するシラスを中心とする。通路として使用された可能性が考慮されるが、底面は不整形で硬化面も確認されない。不整形な底面では縄文土器の細片が確認された。現状の地形的な問題があり、完全な形で検出することができなかったため、通路幅や底面の形状を詳細に確認することはできなかった。



第15図 内城跡14・15T平断面図

【16T】(第16図参照)

曲輪1の東側、縄張図では檜台aとされている土塁に、約2×3mで設定した。東端の土塁中腹で標高約25.5m、土塁の裾部分で23.9mである。白色シラス層を削り込んだ後、盛土を行っている。東壁断面において、白色シラスを掘り込んだ柱穴状の遺構を確認した。このことから、当初は建物等が存在した平坦面を削り込み、盛土を行って土塁を築いた可能性がある。柱穴の平面形は不整な円を示し、内部では数点の円礫を確認した。土塁付近の表土からも複数の礫を検出し、土塁中からも礫の存在を確認したが、土止め等の目的で使用したものか、後世の耕作によって集められたものかは不明である。



第16図 内城跡16T平面断面図

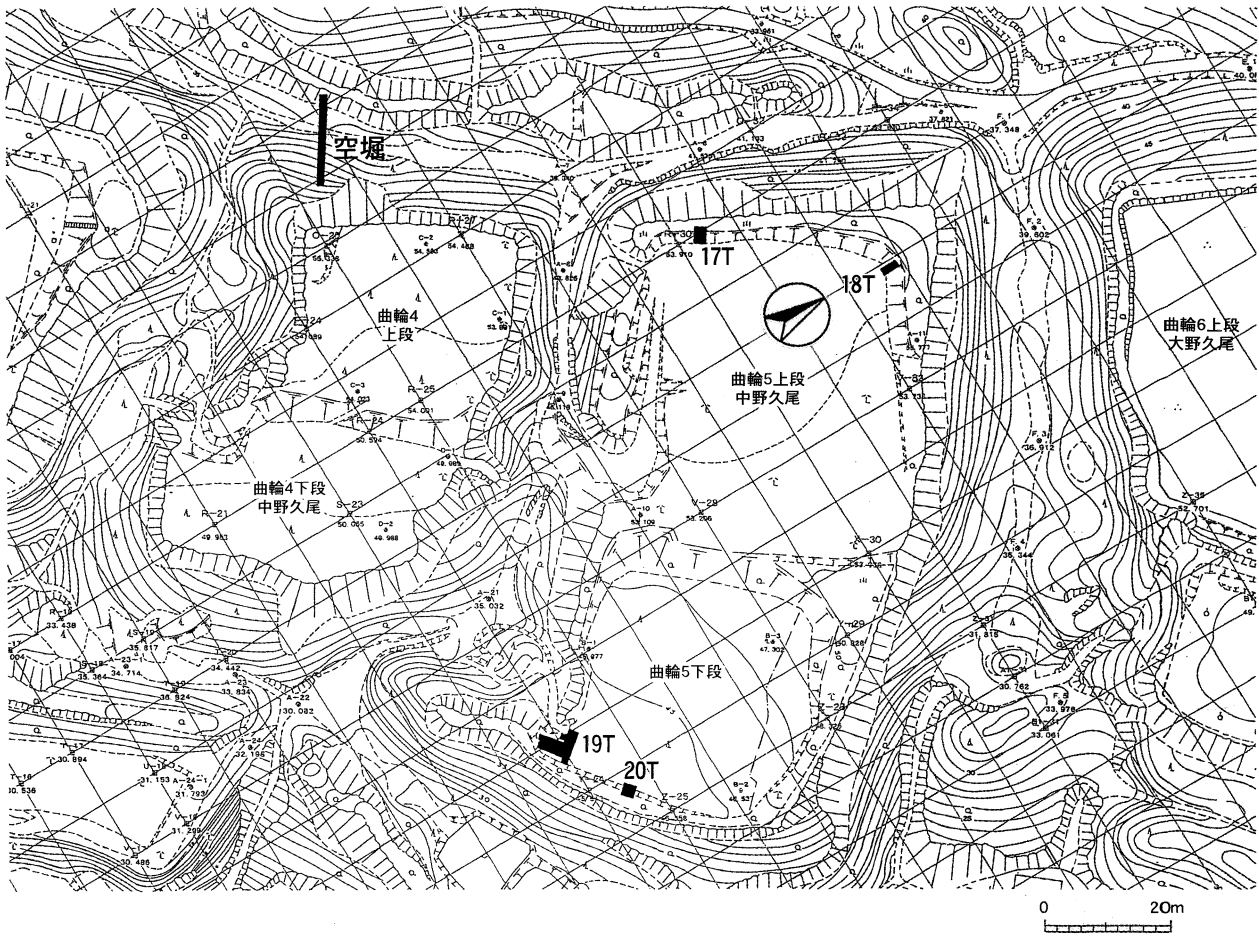
第3節 中野久尾の調査

曲輪4の上下段及び曲輪5の上下段を、あわせて中野久尾と呼んでいる。今回は曲輪5について調査を実施し、上下段に計4か所、17～20Tを設定して調査した。17・18・20Tは土塁の調査を目的とし、19Tは曲輪5下段の南西部にある虎口部分の調査を目的とした。

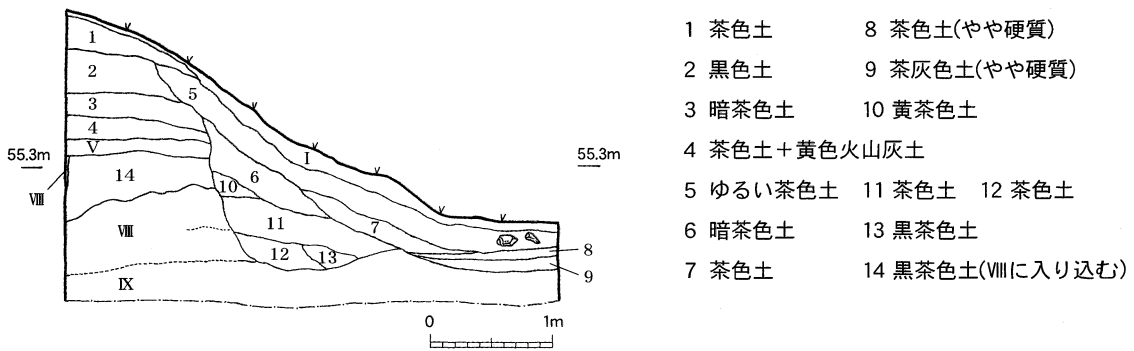
土塁を対象とした調査が中心となったため遺物数は多くないものの、19Tを中心として、青磁や染付が確認された。

【17T】(第18図参照)

曲輪5上段西側の土塁に約2×4mで設定した。西端の土塁中腹で標高約56.5m、土塁の麓部分で約54.9mである。土塁は薩摩火山灰土上の黒色土から黄白色シラス層までを削り込んで造られた切土塁である。土塁の立ち上がり部分は、やや窪ませるように掘り込まれている。崩土からは亜円礫が多く検出されたが、築造時に土止め等に用いられたものか、後世に曲輪面を耕作した際に寄せ集められたものかは判断できない。



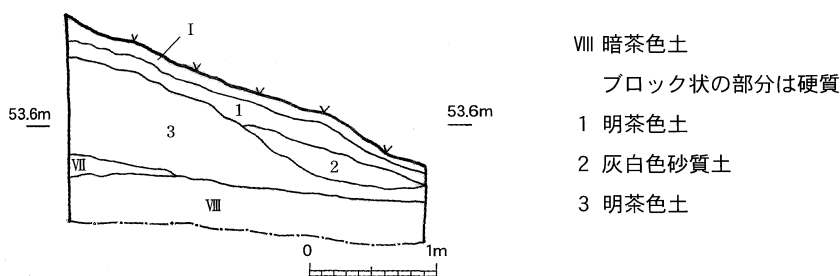
第17図 中野久尾トレンチ配置図



第18図 内城跡17T断面図

【18T】(第19図参照)

曲輪5上段の築造状況を確認するため、17Tと同一の土塁に約3×1mで設定した。北端の土塁中腹で標高約54.5m、土塁の裾部分で53.3mである。縄張図上では櫓台cとされている部分である。切土塁である17Tとは異なり、黄白色シラスまで削り込んだ上に盛土を行っている。しかしながら、櫓台cは幅広の土塁であり、17Tの土塁が急激に立ち上がる形状であることも考慮し、18Tの北端よりさらに奥に土塁の基部が存在する可能性が残る。



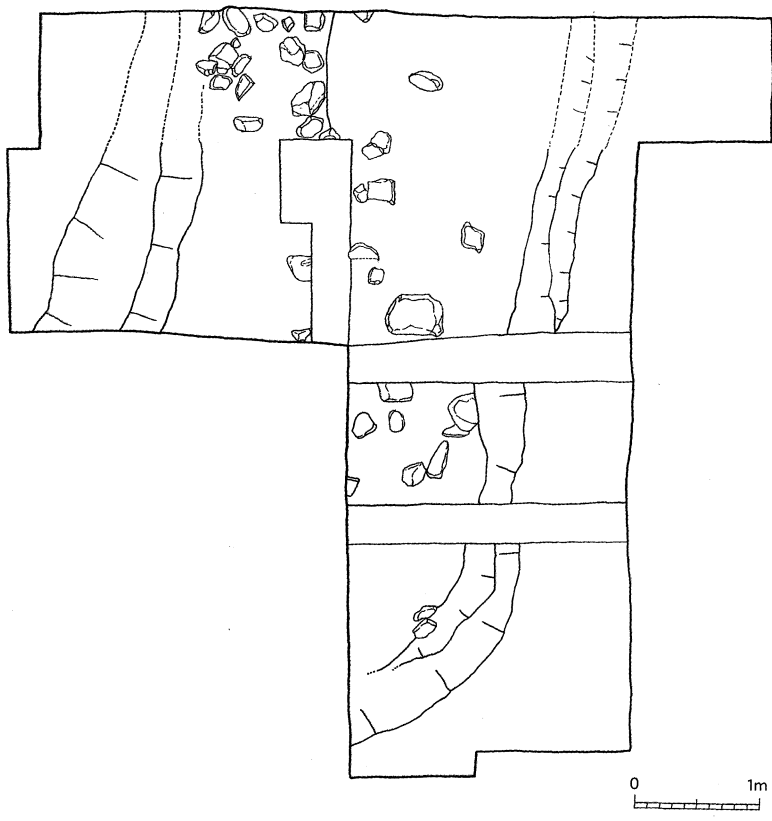
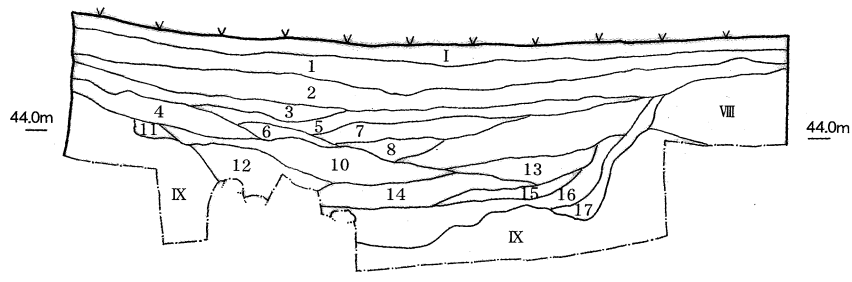
第19図 内城跡18T断面図

【19T】(第20図参照)

曲輪5下段の虎口部分を調査するため、標高約44.8mの地点に約4×4mで設定した。白色シラス面を削り込んだ溝状の遺構が確認され、拡張して調査を継続した。溝状の遺構は曲輪面から虎口方向にのび、ほぼ直角に折れて、現在の虎口に設置している簡易な階段の方へ向かう。空堀5から曲輪5下段の虎口に至る通路と考えられる。遺構内からは垂円礫が多く検出されたが、土止め等の目的があるものかは、判然としない。底面には硬化面が確認され、通路として使用されたことを裏付けている。底面部分より検出された1点の石は、平坦で上面がやや窪んだ形状を呈し、柱等の礎石を想定させる。虎口の性格上、門等が存在していたと考えられるが、この石に対応すべき石は確認されず、あくまでも門礎の可能性をうかがわせるにとどまった。

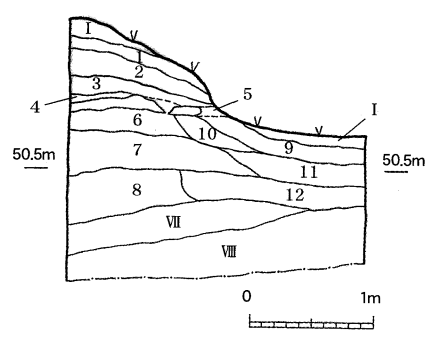
【20T】(第21図参照)

曲輪5下段東側の土塁に約2×2mで設定した。東端の土塁中腹で標高約51.7m、土塁の裾部分で約50.8mである。土塁は薩摩火山灰土を削り込んだ上に盛土を行っており、傾斜する地形に盛土をした後、茶色土と黄白色火山灰土を突き固めた上で盛土を行っている。突き固められた盛土の上部は下層と関係せず、土塁を築造しなおした可能性もうかがわせる。曲輪5上段の調査とあわせて、曲輪5の地形は北西から南東に向かって傾斜していたことが推察される。



- 1 暗茶色土
- 2 灰茶色土
- 3 茶色土+乳白色砂質土
- 4 茶色土+白色砂質土
- 5 茶色土
- 6 茶色土+白色砂質土
- 7 淡茶色土
- 8 茶色土
- 9 茶色土+濁橙色土
- 10 白色砂質土+茶色土
- 11 暗茶色土
- 12 茶色土
- 13 茶色土
- 14 灰茶色土(やや硬化)
- 15 茶色土
- 16 茶色土+黄色砂質土
- 17 乳白色+黄色砂質土

第20図 内城跡19T平断面図

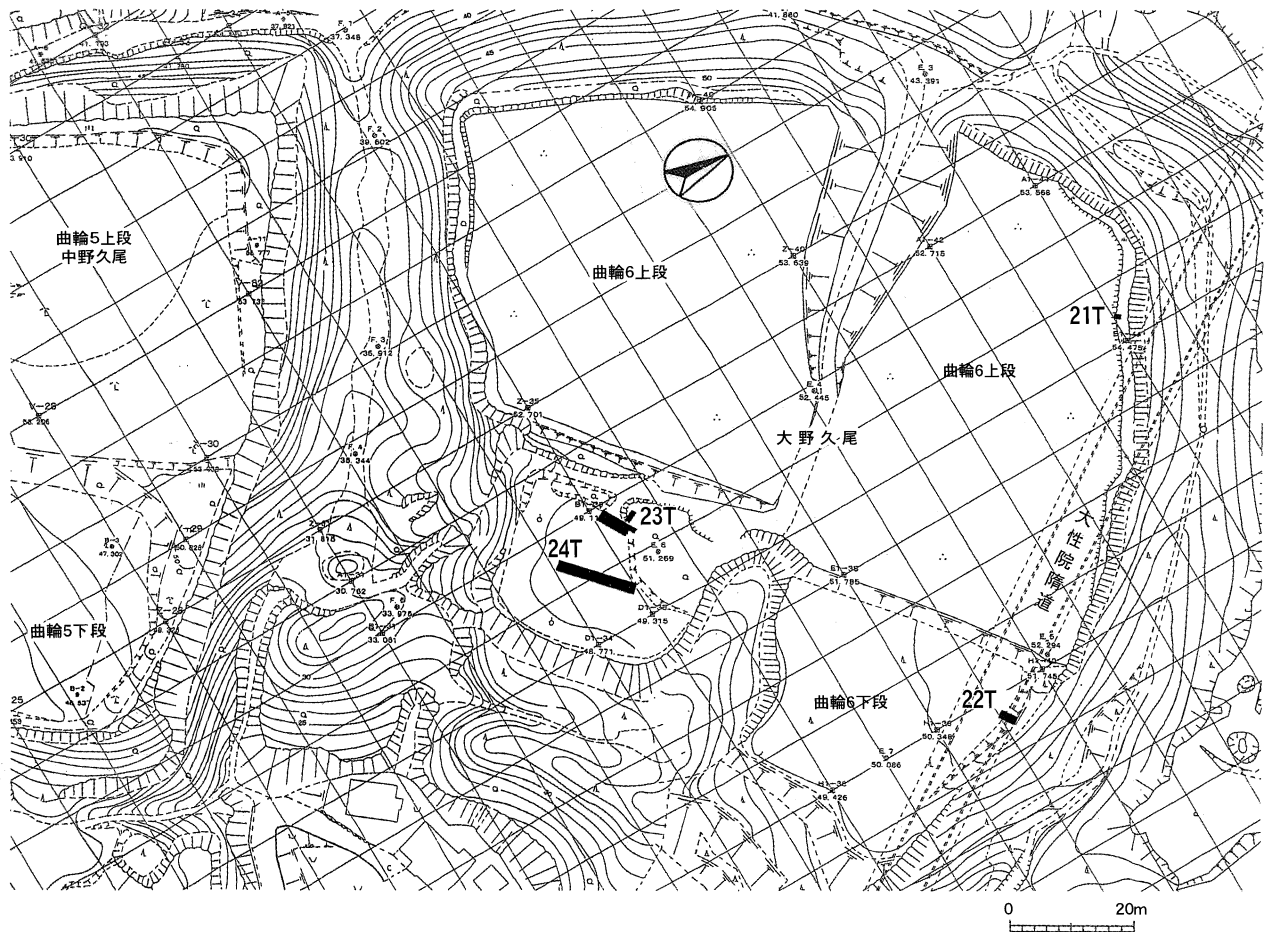


- VII 暗黒茶色土
- VIII 暗黄茶色火山灰土
- I 茶色土
- 2 暗茶色土
- 3 茶色土+濁黄橙色土
- 4 茶色土
- 5 ブロック状白色砂質土
- 6 茶色土+黄色パミス+白色砂質土
- 7 茶色土+黄色パミス
- 8 茶色土層+黄白色砂質土層(硬化)
- 9 ゆるい暗茶色土
- 10 茶色土
- 11 茶灰色土+白色パミス
- 12 ゆるい茶色土

第21図 内城跡20T断面図

第4節 大野久尾の調査

大野久尾の調査は、曲輪6上下段について21～24Tを設定して実施した。21・22は土塁の調査を目的としたが、現在、曲輪6上段は茶畑として利用されており、近年に茶園の拡張が行われた際、周辺の土塁の一部が破壊されたとされているため、現状の確認も目的とした。



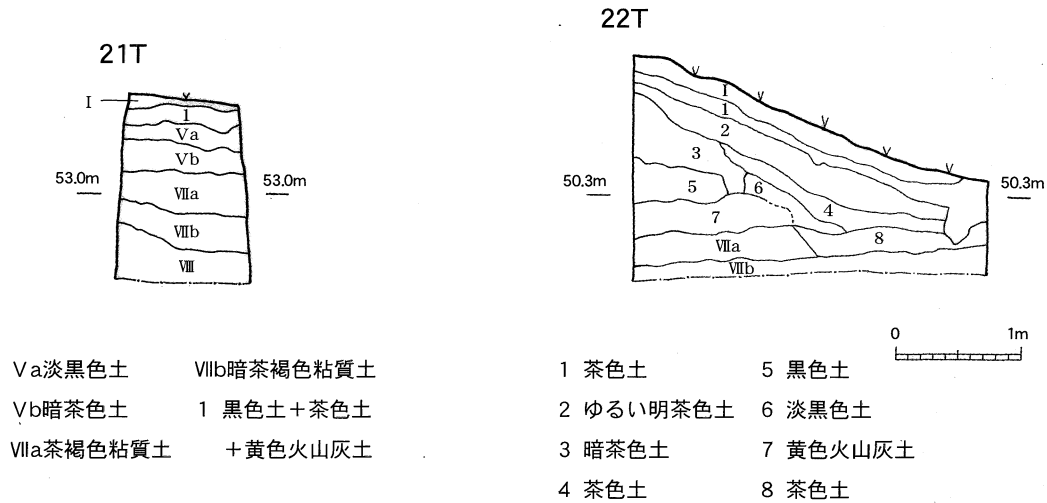
第22図 大野久尾トレンチ位置図

【21T】(第23図参照)

大野久尾の曲輪6上段、北東の土塁に約2×1mで設定した。近年の茶園拡大に際して造成が行われた部分であり、土塁等が破壊されている可能性が高いが、本来は台地から山城を切り離している空堀7に面し、内城の最も外側にある土塁である。土塁頂部で標高約53.8m、茶園の面で約53.1mである。調査の結果、残存する土塁部分は大半が地山のいわゆるチョコ層で構成され、茶園の造成時に削り取られたと考えられる。土塁の上端部には黒色土等を含む薄い盛土の層が残存しているが、土塁本来の形状、築造方法等は判断できなかった。なお、現在の茶園面もチョコ層上にあり、山城の築城面及び生活面は失われている可能性が強い。

【22T】(第23図参照)

曲輪6下段北東の土塁に約2×4mで設定した。21Tの土塁と同様に、空堀7に面し、内城の最も外側にある土塁である。北東端の土塁頂部で標高約51.4m、土塁の裾部分で約50.4mである。土塁は、いわゆるチョコ層までを削り込んだ上に盛土を行っている。トレンチの規模に比して出土遺物が多く、青白磁、陶器片が数多く出土した。量が多いものの、遺物自体は本丸周辺及び中野久尾の遺物と類似しており、大野久尾独自の特徴は見出せない。



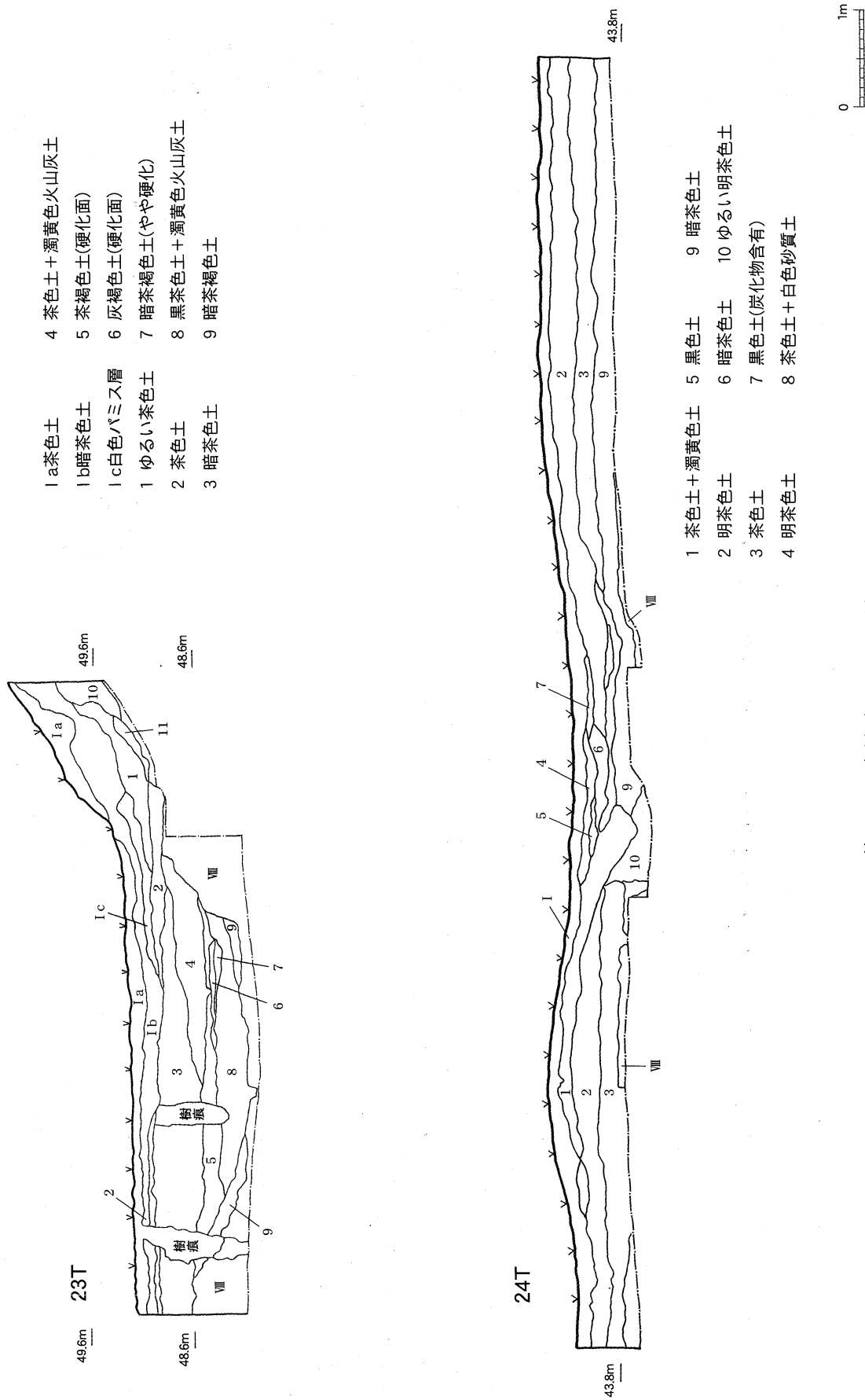
第23図 内城跡21・22T断面図

【23T】(第24図参照)

曲輪6上段から南に下った曲輪は、北部に小高い丘状の高まりが存在するほか、西側にも土塁状の高まりが存在する。曲輪の北東部に、丘と土塁が近接する部分が存在し、この部分が曲輪の入口と想定された。この部分に約2×8mで設定し、必要に応じて拡張した。標高約49.2mの地点である。調査の結果、黄色シラス面を削りこんだ溝状の遺構が検出され、その遺構の底面と中ほどに硬化面を確認し、通路としての使用をうかがわせる。一部に大正時代の桜島火山灰を含む部分があるが、近代以降の落ち込みとして理解された。板瓦と思われる土製品が数片確認されたが、瓦葺の建物を想定するにはあまりにも出土数が少ない。その他、染付を中心とした陶磁器片が確認された。

【24T】(第24図参照)

23Tの調査を補完する目的で23Tの東側、標高約48.7mの地点に約2×12mで設定した。黄色シラス面を削り込み平坦面を得ている。一部で炭化物を含む層が確認されたが、樹痕等と思われる不整形でゆるい埋土のものばかりで、明確な遺構としては確認されなかった。23Tで確認された溝状の通路は緩やかな傾斜を登り、24Tの平坦面に連続すると考えられ、この曲輪に対する通路であることが想定されるが、曲輪面からは建物跡を想定できるような、明確な遺構は確認されなかった。



- | | |
|-----------|---------------|
| la 茶色土 | 4 茶色土+濁黄色火山灰土 |
| lb 暗茶色土 | 5 茶褐色土(硬化面) |
| lc 白色パミス層 | 6 灰褐色土(硬化面) |
| 1 ゆるい茶色土 | 7 暗茶褐色土(やや硬化) |
| 2 茶色土 | 8 黒色土+濁黄色火山灰土 |
| 3 暗茶色土 | 9 暗茶褐色土 |

- | | | |
|------------|--------------|------------|
| 1 茶色土+濁黄色土 | 5 黒色土 | 9 暗茶色土 |
| 2 明茶色土 | 6 暗茶色土 | 10 ゆるい明茶色土 |
| 3 茶色土 | 7 黒色土(炭化物含有) | |
| 4 明茶色土 | 8 茶色土+白色砂質土 | |

第24図 内城跡23・24T断面図



- 1 ゆるい茶 2 暗茶 3 茶+白砂 4 暗茶 5 茶+白砂 6 茶+白砂 7 明茶+白砂 8 乳白 9 茶 10 白砂 11 茶 12 明茶 13 茶+白砂 14 茶 15 乳白砂 16 茶+乳白
 17 明茶(やや硬化) 18 暗茶 19 乳白砂 20 乳白砂 21 白砂 22 灰白砂 23 白砂(やや硬化) 24 淡茶 25 暗茶 26 白砂 27 明褐色 28 茶 29 白砂 30 白 31 乳白砂 32 茶+乳白
 33 白砂 34 乳白砂 35 乳白砂やや硬化 36 茶灰やや硬化 37 茶+白砂 38 乳白砂 39 白 40 茶 41 灰 42 茶+白砂やや硬化 43 灰茶 44 白 45 茶+乳白 46 白 47 明茶+白砂
 48 白砂+茶 49 茶+白砂 50 白砂 51 茶+白砂 52 灰白砂 53 灰白 54 白砂 55 茶灰 56 暗茶 57 灰白砂 58 灰白砂 59 暗茶 60 暗茶+白砂 61 白 62 暗茶 63 暗茶+白砂 64 白
 65 暗茶 66 暗茶+白砂 67 白砂 68 茶 69 茶+白砂 70 茶+白砂 71 暗茶 72 茶+白 73 暗茶+白 74 乳白 75 茶 76 灰白砂 77 茶 78 茶+乳白 79 茶 80 白砂 81 茶粘 82 白
 83 茶 84 茶 85 灰白 86 白 87 暗茶 88 暗茶+白 89 乳白 90 灰白 91 茶灰 92 灰 93 茶灰粘 94 白砂+茶 95 白砂 96 乳白砂 97 白砂 98 灰白砂+茶 99 乳白砂 100 暗茶
 101 茶+白砂 102 乳白砂 103 茶+白砂 104 茶粘 105 灰 106 茶 107 乳白砂 108 茶灰 109 茶 110 茶+白砂 111 黄茶 112 茶 113 乳白 114 茶 115 乳白 116 茶 117 乳白 118 茶
 119 白砂+茶 120 白 121 茶 122 白砂 123 灰白砂 124 白系砂(分層できず) 125 灰礫 126 茶 127 乳白 128 茶 129 暗茶+淡黄 130 灰白 131 灰茶 132 淡茶砂 133 茶 134 茶
 135 灰茶 136 暗茶 137 茶 138 淡茶 139 暗茶 140 灰白 141 灰 142 灰礫 143 灰茶 144 暗茶 145 茶 146 灰白砂(やや硬質) 147 灰白砂 148 茶 149 灰白砂 150 灰砂+白砂
 151 灰砂+白砂 152 灰 153 灰白 154 灰 155 灰白 156 灰白砂 157 淡茶 158 灰 159 茶 160 白砂 161 白砂 162 茶 163 灰砂 164 淡茶 165 暗茶 166 茶 167 茶灰 168 茶 169 灰
 170 茶 171 茶灰 172 灰砂 173 黄茶 174 灰 175 灰褐 176 灰砂 177 灰茶 178 黄茶+灰 179 灰白 180 灰 181 灰白礫 182 黒 183 茶 184 暗茶 185 茶 186 灰白砂 187 灰砂
 188 白砂 189 茶 190 灰白 191 黄砂 192 茶 193 灰 194 灰茶 195 灰 196 灰砂 197 茶 198 灰砂 199 灰砂 200 茶 201 灰礫 202 灰黒礫 203 灰白 204 灰 205 灰砂 206 乳白砂
 207 灰白砂 208 灰砂 209 茶 210 白砂 211 灰 212 白砂 213 灰砂+茶 214 暗茶 215 灰礫 216 茶 217 灰砂 218 茶灰 219 茶 220 灰白砂 221 淡茶 222 茶 223 茶 224 灰 225 灰礫
 226 灰やや粘 227 灰+茶 228 灰砂 229 灰 230 灰 231 白砂 232 灰 233 灰砂 234 灰やや粘 235 灰礫 236 茶砂 237 茶 238 灰礫、灰、灰礫、灰(水成層か?) 239 灰礫 240 灰
 241 茶 242 灰礫(水成層か? 下方ほど砂礫粒が小さい)
- 砂=砂質土 粘=粘質土 礫=砂礫層

第25図 内城跡空堀断面図

第5節 空堀の調査

【空堀】(第25図参照)

内城の西側を北東から南西にかけて走る空堀2について、調査を実施した。曲輪4及び曲輪5の西側に位置し中野久尾周辺であるが、曲輪の調査とは区別し別に節を設けた。

トレンチは大土居と称している土居d付近に、約2×14mで設定した。現状の堀底が標高約36.8mである。空堀は東側の曲輪4上段及び西側の土居dに連なると思われる、灰色シラス層を削り込んで築かれており、壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。地表から堀底までの深さは、シラスの岩盤を確認した最下層面を堀底とした場合、約8.4mを測る。堀底の幅は約4.2mである。

しかしながら、下層では砂礫層や水成層と思われる薄い砂質層が多く見られ、最下層面も流水の浸食によるものか、不整形である。最下層付近には硬化面が確認されない。最下層を堀底と考えた場合、堀の両端はほぼ垂直に降りて段を設けた後、さらに下る二段掘りの状況を呈するが、本来の堀底を流水が削り取った結果、現在の形となった可能性も考えられる。二段掘りをなさないことを想定した場合、地表面からの深さは約7m、堀底の幅は約6～約7.5mとなる。

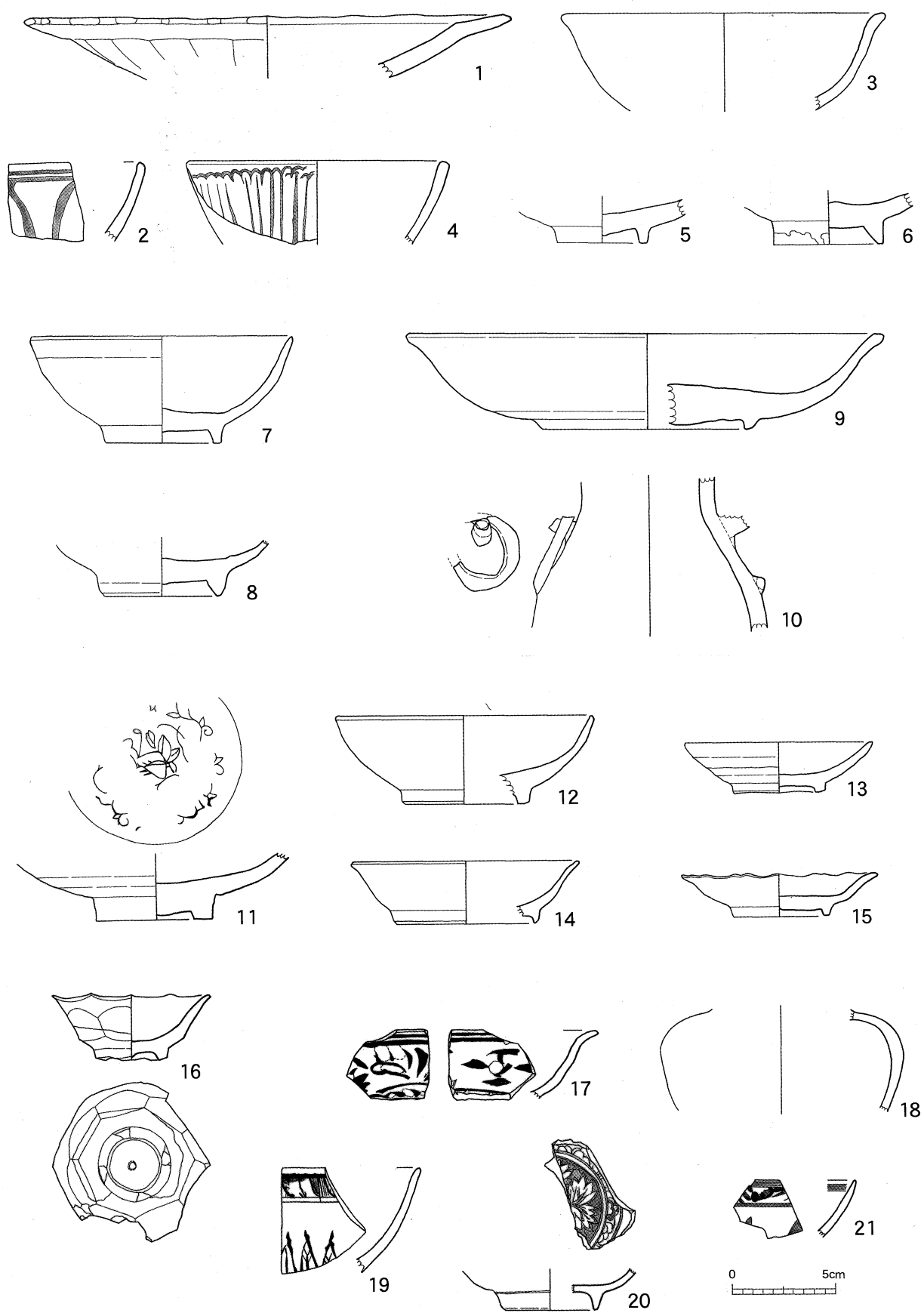
堀の埋土は白色または灰色シラス土による部分と、茶色土や黒色土による部分、白色砂礫等が層状をなす部分とに大別される。白色及び灰色シラス土が多く確認される部分は、崩落あるいは滑落によって上部のシラスがブロック状に堆積した部分と考えられる。色調等が微妙に異なるが、明確な分層はできなかった。特に曲輪4側で顕著にみられ、大規模な崩落が数回に渡り起こったと思われる。一方、土居d側では黒色土及び茶色土等が薄い層状に堆積し、比較的自然的な堆積状態を示す。上層から中央部分にかけては数か所の硬化面が見られ、堀がある程度埋まった段階で通路として利用されたことが推察される。

遺物はほとんど確認されなかったが、最下層の砂礫層より15～16世紀代と考えられる備前焼の破片を確認した。

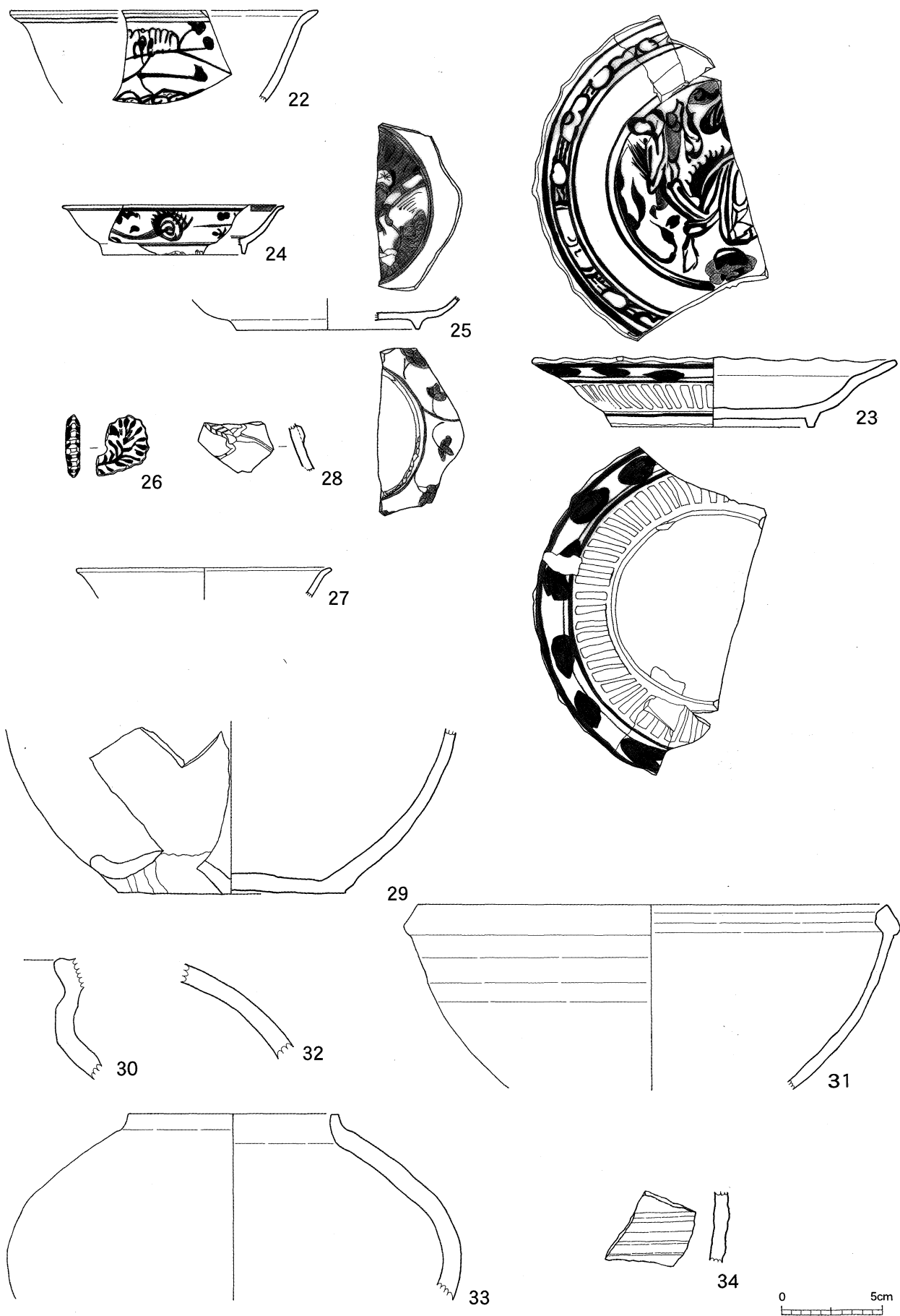
第6節 遺物

1. 青磁(第26図・1～10)

1は高台を持つ盤と思われる。中野久尾の虎口である19Tの遺構内より検出されたもので、稜花形を呈すると思われる。やや黄色がかっている。2～7は碗である。2は内湾気味に立ち上がる口縁部で、外面にへら書きの蓮弁文が施されている。3は端反碗で、内面見込み付近に圏線がめぐらされる。4は外面に剣先蓮弁文が施され、その縦線と先端部分は別々に描かれている。5～8は底部である。5は豊付を釉剥ぎしているが、6は高台下半を粗雑に釉剥ぎしている。また、6は胎土が茶褐色を呈し異なっている。7は粗製の碗で焼成が不良である。8は皿の可能性もある底部で、内底は露胎であり豊付は釉剥ぎが施され、粉状の付着物が認められる。9も中野久尾の虎口である19Tの遺構内より検出されたもので、低い高台を持つ皿である。底部は極端に厚く、口縁に向かって薄くなり口縁端部はやや外反する。豊付まで施釉されているが、内底中心部付近は無釉である。10は双耳瓶の頸部だが、耳の一部を欠損している。耳部分では釉葉のかかりが粗く、頸部付近は焼成不良気味である。



第26图 内城跡出土遺物実測図 (1)



第27图 内城跡出土遺物実測図 (2)

2 白磁・染付・その他の磁器(第26・27図・11～28)

11～18は白磁である。そのうち11～15を皿とした。11は大降りの皿あるいは碗で、外面及び畳付は丁寧に造られている。外面下半は露胎だが、上半及び内面は緑灰色の釉がかかり青磁のようでもある。内面見込には花文が描かれている。12は小さな高台を持ち、畳付は釉剥ぎが施されている。13は切高台の底部を持ち、体部下半は露胎で見込には重ね焼きの目跡がある。焼成がやや不良である。14は白地に灰色の細粒が散っており、他と異なる。また、二次的に被熱している。12Tでも同様の破片が確認されている。15は焼成不良の稜花皿である。見込は蛇ノ目釉剥ぎ、畳付及び内底部は釉剥ぎが施されるが、全体的に粗雑である。

16は小杯で八角形を呈し、高台は切高台である。体部下半は露胎で装飾を意図したと見られるが、釉薬のかけ方は丁寧ではない。部分的に釉がかけ分けられ、薄い灰色の模様を呈している。17は赤絵が施された端反の皿である。一部に色が剥げた部分がある。18は小壺の肩部と思われる。頸部付近は器壁が薄く、張り出した肩部付近は厚い。

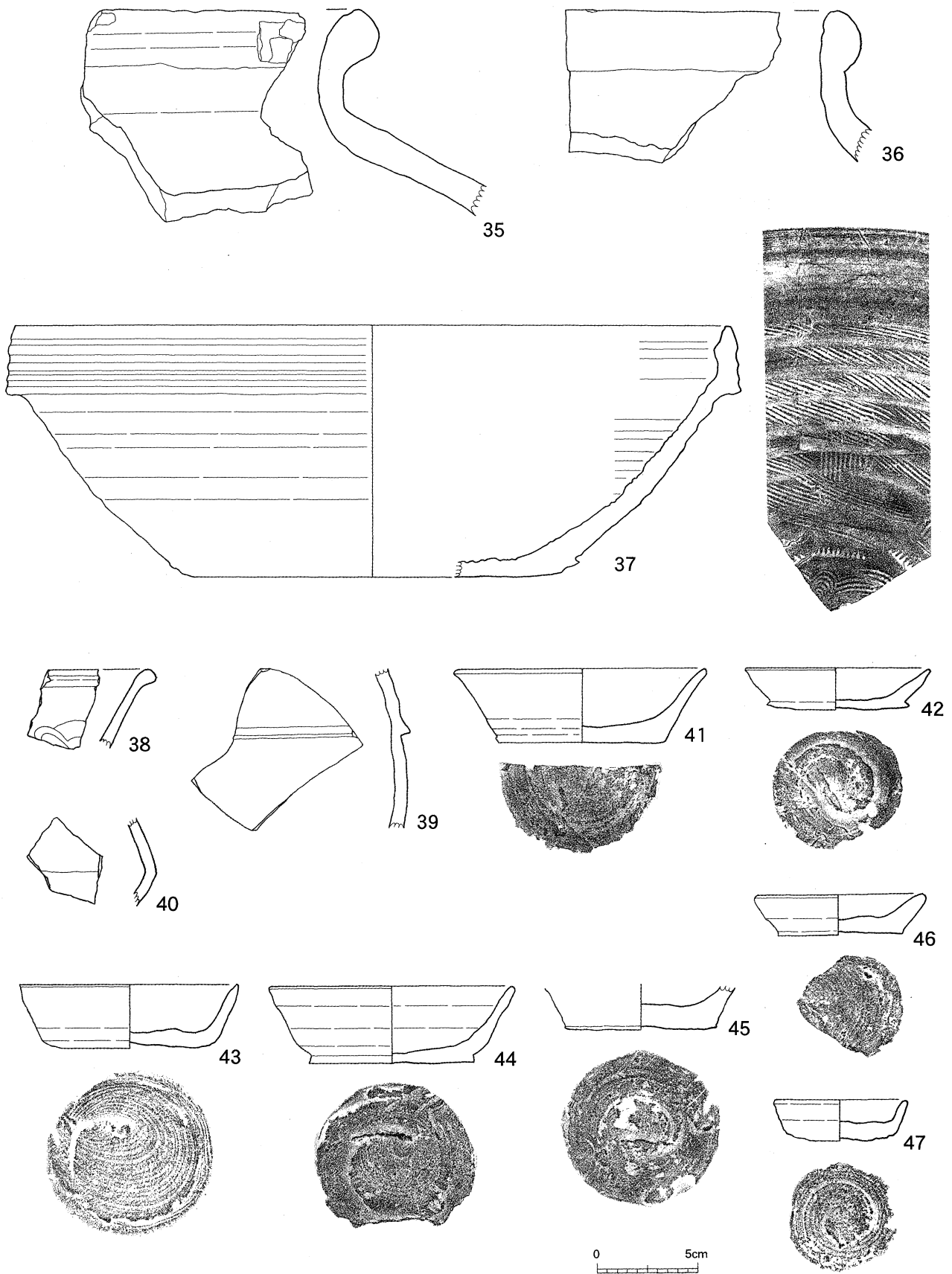
19～26は染付である。19～22を碗とした。19は外面に蕉葉文が描かれるが、やや粗雑である。20は薄手の碗の底部と思われる。見込みには文様が施されているが、粗雑である。21は表面がやや黄色がかり、胎土も黄色味を帯びる。22は端反碗で外面には草花と見られる文様が描かれるが、不鮮明で簡略化されており粗雑な印象を受ける。23は屈折して外反する皿である。口縁端部は波状に仕上げ、頂部を持つ芙蓉手の様相を示す。内面に麒麟と思われる文様が描かれているが、文様は粗雑で発色も良くない。24は端反皿で畳付には砂粒状の付着物が見られる。25は薄手の皿の底部であり、見込みには鹿文が描かれている。釉剥ぎされた畳付には糊状の付着物が認められる。26は鳥の尾または草花を意匠化した耳と思われるが、どのような器形に伴うものかは不明である。文様は両面に施されている。

27は薄い緑色を呈し薄手の皿の口縁部である。青磁あるいは白磁かの判別がしがたい。ここでは単に磁器とした。28は袋物の頸部である。瑠璃釉がかけられた上に龍を模したと思われる貼り付けの装飾が施されている。

3 陶器(第28図・29～40)

29は壺あるいは甕の底部である。胎土に砂粒が多く含まれ、褐釉がかけられている。底部付近から底面にかけては露胎である。30は壺あるいは甕の口縁部～頸部と見られるが、口縁端部を欠損している。31は鉢と思われる。茶褐色を呈し、比較的薄手で口縁端部を折り返して帯状としている。内面では口縁部下方より自然釉のような施釉が見られる。22Tでも同様の破片が確認されている。32は壺の肩部と思われる。外面には黒褐釉がかけられ、内面は無釉である。タイ産の陶器と思われ、胴部と思われる同様の小片が数点確認されている。

33は無頸壺あるいは甕のような器形と思われ、口縁の内面には使用痕と思われる摩耗が認められる。産地不明だが、九州の中世窯によるものの可能性がある。34は瀬戸の鉢の胴部破片と思われ、黄褐色を呈し、外面には突帯状の装飾が巡っている。35～37は備前焼である。35は甕の口縁及び頸部だが、無釉で灰色を呈する。やや焼成不良である。36も甕の口縁部だが、空堀の調査において堀底付近より出土したものである。37は備前焼の播鉢である。38は唐津焼の鉢である。口縁端部には口鏝が施され、外面には文様が描かれている。39は壺あるいは甕の胴部と思われるが、産地不明である。全体に灰色を呈し、外面には突帯状の張り出しが巡る。内面には自然釉がかかっているようである。40は袋物の胴部と思われるが肩部の可能性もあり、



第28図 内城跡出土遺物実測図 (3)

上下についても想定である。くの字状に屈曲し、内面は無釉で灰色を呈し、外面は施釉され屈曲部より上方が茶色、下方が黄褐色を呈する。

4 土師器(第28図・41～47)

土師器の小片はほぼ全域で確認されたが、特に矢倉場である曲輪1の8Tで、上下の段差を埋めた土から良好な資料が出土した。

41は器高が高く古手と思われる坏である。ヘラ切底で内外面を丁寧に仕上げている。古代に相当する遺物と考えられ、内城築城以前の遺物と思われる。42はやや古手とみられるヘラ切底の皿である。内外面ともに丁寧に磨かれ、見込み部分は光沢がある。41と同様に築城以前の遺物と思われる。43は坏とした。糸切底で内外面はナデ整形が施されるが、胎土に大きめの砂粒がみられ、粗雑な印象を受ける。44は坏とした。内外面の調整は丁寧に底部は糸切底である。底面の切り離しは粗雑で、底面の一部を削り切っている。45～47は皿とした。45はヘラ切底で内外面は丁寧に仕上げられているが、底面は粗雑なままである。46は糸切底で内外面は丁寧にナデ整形され、丁寧な印象を受ける。47は小皿で垂直に近い立ち上がりを見せる。糸切底である。

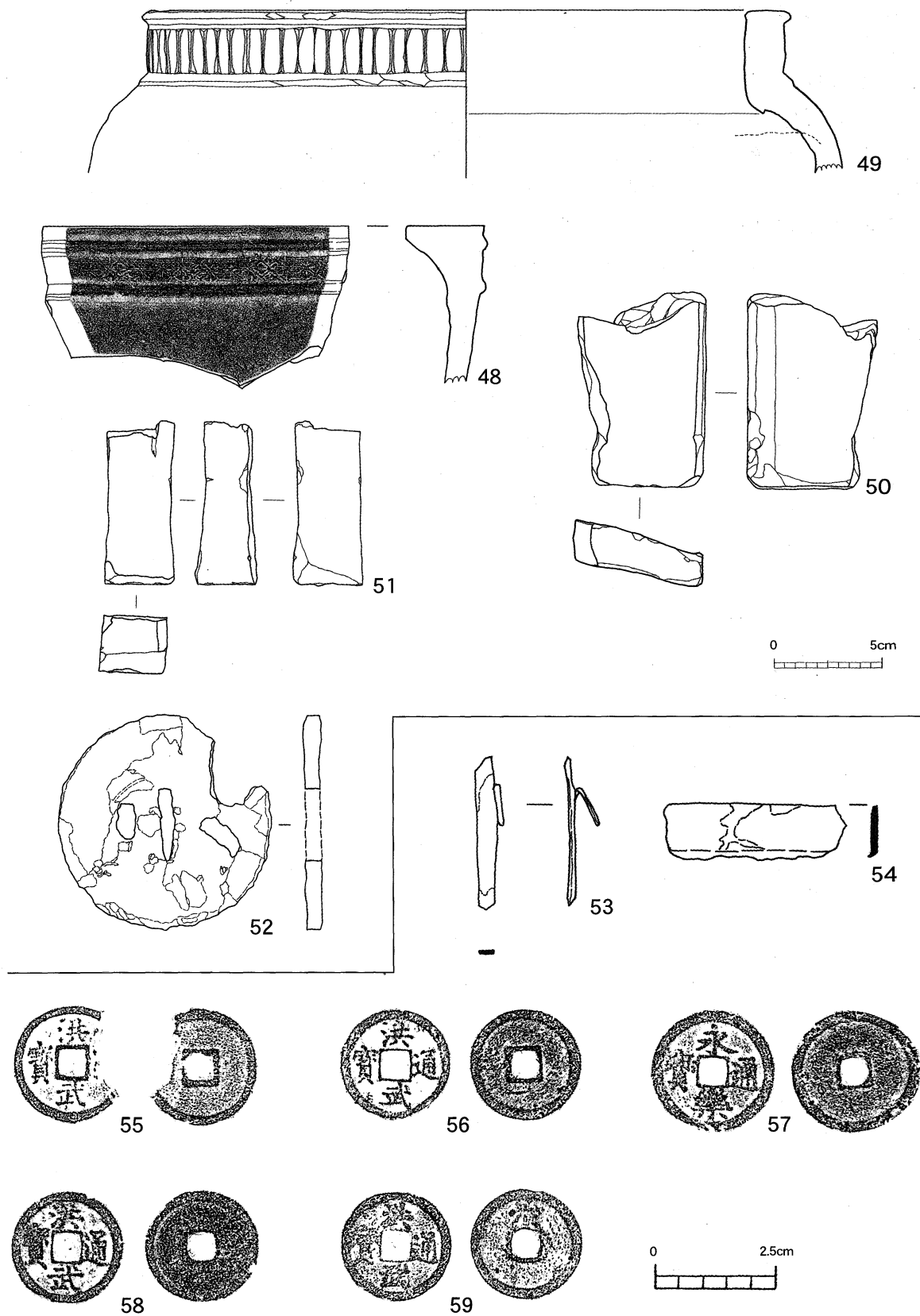
5 瓦質土器・瓦・石製品(第29図・48～51)

48は足を持つ方形の浅鉢と考えられる。口縁部は内側に直角に曲がる形状を呈し、外面は丁寧に仕上げられている。口縁部には2条の突帯がめぐり、その内側に幾何学的な文様が施されている。同様の破片が1点確認されている。49は火入と思われる。外面は丁寧に磨かれており、内面では輪積みの痕跡が確認される。口縁部には工具を用いた装飾が施されている。50は緩やかに湾曲する板状の瓦と思われる。丁寧に仕上げられているが、側面及び裏面に比して、正面はややざらざらしている。胎土は赤褐色で白色土がマーブル状にみられる。大野久尾の23Tから出土したが、同地点から合計3点の出土が確認された。51は石製品で砥石である。長方形を呈する4面は研磨され、使用によって磨り減っている。残る2面のうち1面は破面であるが、もう1面は擦過痕の残る平坦面部分と自然面あるいは破面と見られる部分とが存在する。意図的なものか破損によるものかは不明である。

6 金属製品(第29図・52～59)

52は鉄製品でその形状より鏝と思われる。曲輪1(矢倉場)での表採であり、錆化が著しい。年代等は不明である。53・54は銅製品である。53は薄く細長い小片で一部が捲れ上がっている。54は屈折部を持ち何らかの器具の一部であった可能性がある。

55～59は銭貨である。55～56は洪武通寶であり、55は特に銭文が鮮明である。56は銭文が明確だが他に比して線が細い。57は永楽通寶である。58・59は洪武通寶の模鑄銭と思われる。58は銭文が太くやや不明瞭である。背字は見られないが背面がやや潰れている。59は本丸の3Tで礎石建物跡の検出面付近から出土した。「治」の背字があることから、いわゆる加治木銭と思われる。



第29図 内城跡出土遺物実測図 (4)

第7節 まとめ

1 遺構

(1) 柱跡及び建物跡

内城跡の曲輪面を調査した結果、複数の曲輪で柱穴を確認した。トレンチによる狭い範囲の調査であり、明確な建物跡を想定できる例は1例のみであった。しかしながら、曲輪2下段等で多数確認された柱穴は時期差を持つと考えられ、複数時期に渡る山城の使用をうかがわせた。

建物跡が想定される例は、本丸とされている曲輪3の上段で検出された礎石を持つ建物跡である。これは、柱穴内に礎石を入れるもので、今回検出された部分だけでも南北約2間、東西約3間あり大型の建物が想定される。また、一時的性格の強い掘立柱建物とは一線を画す、主要な建物跡の可能性はある。今後の全面調査により、全容を解明したい。

(2) 虎口

曲輪5下段で中野久尾の虎口とされている部分を調査した結果、通路状の遺構を確認した。この通路は空堀から蛇行して曲輪に向かう坂道の末端にあたり、ほぼ直角に曲がって曲輪面に連続する。通路の底面部では門礎の可能性のある石1点を検出し、門の存在をうかがわせるが、あくまでも可能性の域を出ない。

(3) 土塁

各曲輪の土塁について調査した結果、曲輪の北から西にかけて築かれている土塁は主として切土塁であり、東側の土塁は盛土塁である。このことから、内城の存在する台地は本来、北西方向から東側にかけて傾斜していたと考えられる。また、土塁を築造する際に、土塁の手前側をわずかに掘り窪める手法が数か所で確認されたが、この手法は盛土塁に多くみられる。

(4) 空堀

中野久尾の西側に存在する空堀2を調査した結果、極めて大規模な空堀であることが確認された。現在の堀底から約8.4mが埋まり、その埋土の大半を灰白色シラスが占める。崩落によって埋まったことをうかがわせるが、一方で茶色土等による薄い堆積層と硬化面も確認され、ある程度埋まった段階での使用もうかがわせる。堀底の幅は約4.2mであるが、不整形であり、川砂のような砂質土が堆積し砂礫層もみられることから、築造当初の堀底は流水等によって破壊されている可能性も考慮する必要がある。

2 遺物と内城の年代

内城跡の出土遺物は、青白磁、陶器、土師器、金属製品、縄文土器、石器等、幅広く確認されたが、細片も多く図化できないもの、あるいは年代の判別できないものも存在する。

特徴的な出土状況としては、曲輪1の段差を埋めていた土から縄文土器及び石錘、土師器が確認された。土師器には古代に相当する遺物も含まれているが、内城築城以前に存在した古代の遺跡を破壊して段差を埋めたものと理解される。縄文時代の遺物についても、同様に理解される。曲輪2下段からは複数の銭貨が確認されたが、他の曲輪面に対してその点数が多い。曲輪3下段より錆化の著しい金属製品あるいは金属塊が多数出土し、鉄滓と思われるものも確認された。曲輪6下段では土塁の調査であったにもかかわらず、多数の陶磁器片が確認された。

曲輪ごとに見られる出土遺物の状況は、その曲輪の性格を判断する手掛かりになると思われるが、今回の調査はトレンチによる狭い範囲の調査であり、曲輪の性格を判断するには、今後の全面調査による資料の増加を待ちたい。

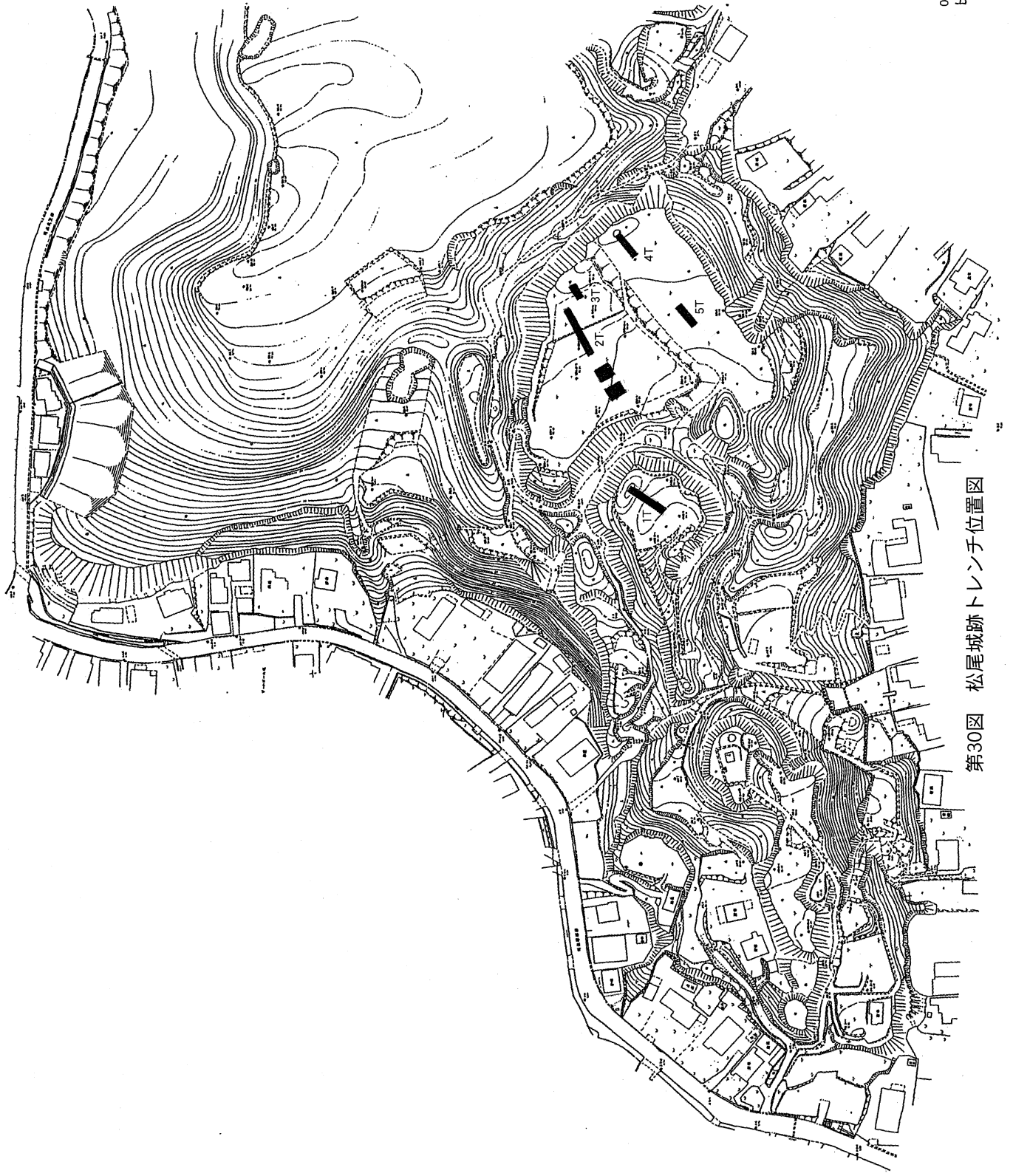
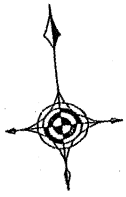
陶磁器の年代から判断される内城跡の年代は、おおむね14世紀後半から16世紀代、あるいは17世紀代までととらえられる。このため、内城の使用期間はおおむね14世紀後半～16世紀代と考えられるが、曲輪1にみられるような大規模な改変を行い長期に渡って利用されたことを考慮すれば、築城に関してはややさかのぼる可能性がある。

番号	T	種別	器種	部位	口径cm	底径cm	器高cm	生産地	年代	備考
1	19	青磁	盤	口縁~体部	23.6			中国(龍泉窯)	14c後~15c前	高台を持つ盤
2	9	青磁	碗	口縁部				中国(龍泉窯)	14c後~15c中	へう書蓮弁文
3	9	青磁	碗	口縁~体部	16.0			中国(龍泉窯)	14c後~15c中	端反碗
4	9	青磁	碗	口縁~体部	12.8			中国	15c後~16c前	剣先蓮弁文
5	8	青磁	碗	底部~高台		4.4		中国(龍泉窯)	14c後~15c中	遺構内
6	21	青磁	碗	底部~高台		5.4		中国	15c~16c	
7	20	青磁	碗	口縁部~高台	13.0	5.8	5.4	中国(福建広東)	16c頃	焼成不良 粗製の青磁
8	8	青磁?	碗・皿	底部~高台		5.7		中国(福建広東)	16c頃	畳付に粉殻状のものが付着
9	19	青磁	皿	口縁部~高台	23.2	10.2	4.8	中国(龍泉窯)	14c末~15c中	
10	22	青磁	瓶	頸~胴部				中国	明代	双耳瓶
11	9	白磁	皿?碗?	底部~高台		6.1		中国	14c頃	
12	13	白磁	皿	口縁部~高台	12.4	5.8	4.5	中国	14c後~15c前	底部欠損
13	矢倉場	白磁	皿	口縁部~高台	9.3	4.4	2.5	中国	15c~16c中	切高台
14	22	白磁	皿	口縁部~高台	11.1	6.7	3.2	中国(景德鎮窯)	16c代	被熱
15	2	白磁	皿	口縁部~高台	4.8	2.2	2.2	中国(福建広東)	16c後	稜花皿 焼成不良 見込み蛇ノ目釉剥ぎ
16	7	白磁	杯	口縁部~高台	7.9	3.6	3.3	中国	15c~16c中	小杯 切高台
17	3	白磁	皿	口縁~体部				中国(景德鎮窯)	16c前~c中	赤絵
18	22	白磁	壺?	肩部				中国	16c後~17c初	小壺?
19	24	染付	碗	口縁~体部				中国(景德鎮窯)	16c前~16c中	蕉葉文
20	3	染付	碗	底部~高台		4.4		中国(景德鎮窯)	16c後	饅頭心
21	7	染付	碗?	口縁~体部				中国(漳州窯系)	16c後	
22	16	染付	碗	口縁~体部	16.0			中国(景德鎮窯系?)	16c代	端反碗
23	23	染付	皿	口縁部~高台	18.4	10.5	3.6	中国(景德鎮窯)	16c第2~3四半期	麒麟文
24	22	染付	皿	口縁部~高台	11.4	7.4	2.6	中国(景德鎮窯)	16c前~16c中	
25	3	染付	皿	底部~高台		9.4		中国(景德鎮窯)	16c後	鹿文 花唐草文
26	8	染付	不明	耳				中国	16c頃	器形不明
27	22	磁器	皿?	口縁部	13.2			中国	16c頃?	青磁か白磁, 中間
28	22	磁器	袋物	頸部				中国(景德鎮窯系)	16c頃	瑠璃釉 龍を模した貼り付け
29	3	陶器	壺・甕	胴~底部		11.8		中国南部	明代	褐釉 型造り 重ね積み痕
30	17	陶器	壺・甕	口縁部				中国	明代	褐釉
31	22	陶器	鉢?	口縁~胴部	24.0			中国	明代	
32	20	陶器	壺?	肩部				タイ	15c~16c	黒褐釉 内面無釉
33	8	陶器	壺?甕?	口縁~胴部	11.0			九州か	鎌倉~室町前期	九州の中世窯か
34	9	陶器	鉢	胴部?				瀬戸	室町頃	

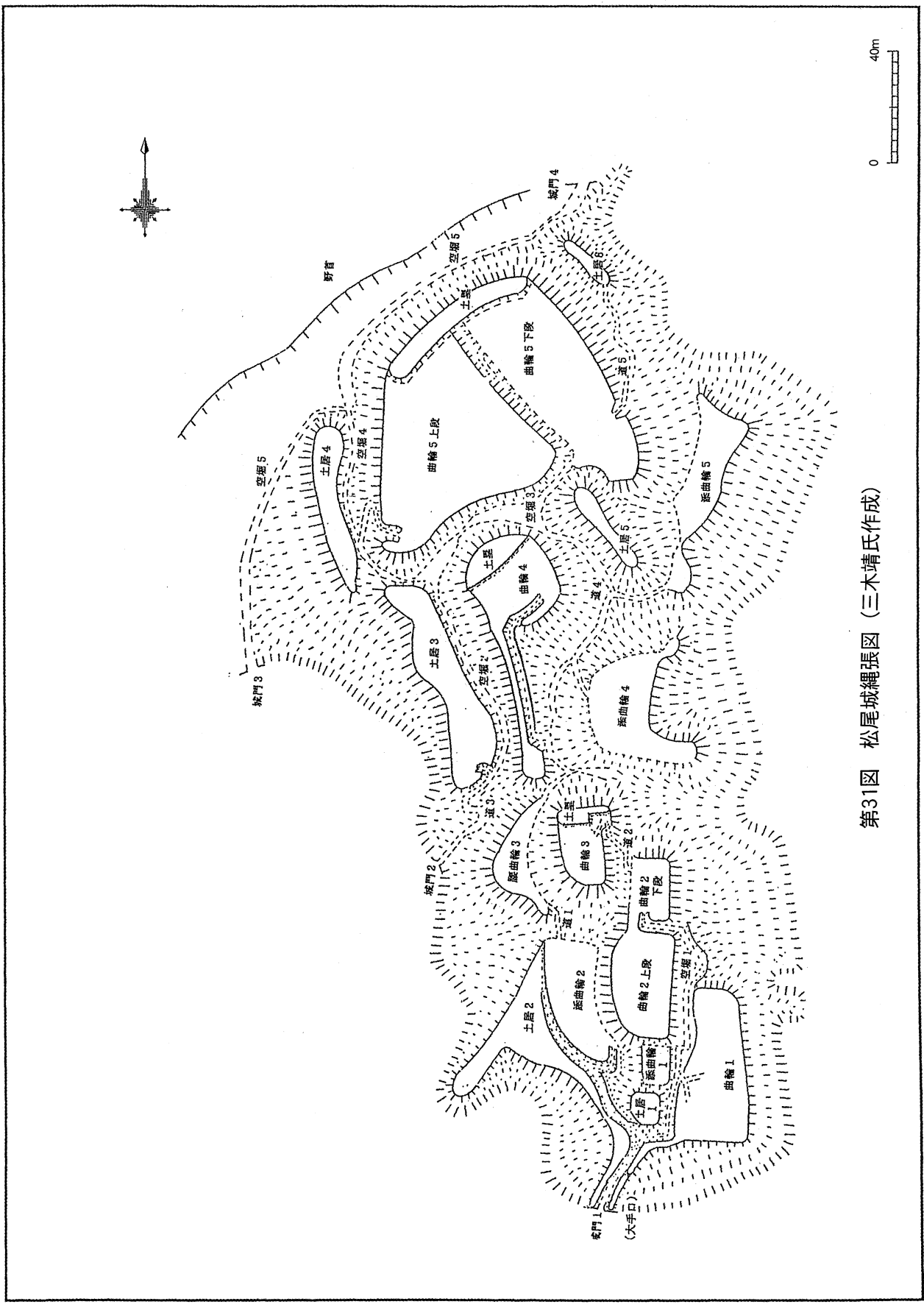
第4表 内城跡出土遺物一覽(1)

図	番号	T	種別	器種	部位	口径cm	底径cm	器高cm	生産地	年代	備考
第28図	35	9	陶器	甕	口縁～頸部				備前	15c～16c	
	36	空堀	陶器	甕	口縁部				備前	15c～16c	空堀底面付近
	37	16	陶器	播鉢	口縁～底部	36.0	18.2	12.7	備前	15c後～16c前	
	38	3	陶器	鉢	口縁～体部				唐津	1590～1610	鉄釉
	39	22	陶器	壺?甕?	胴部				産地不明	中世	
	40	22	陶器	袋物	胴部				産地不明	不明	
	41	9	土師器	坏	口縁～底部	12.7	8.3	3.7		9c頃	ヘラ切底
	42	9	土師器	皿	口縁～底部	9.1	6.4	2.1		11c頃	ヘラ切底
	43	9	土師器	坏	口縁～底部	11.0	8.0	3.2		15c～16c	糸切底
	44	8	土師器	坏	口縁～底部	12.4	8.3	3.9		15c～16c	糸切底
45	13	土師器	皿	底部		7.8			15c～16c	ヘラ切底	
46	9	土師器	皿	口縁～底部	8.5	6.1	2.1		15c～16c	糸切底	
47	9	土師器	皿	口縁～底部	6.6	4.8	2.1		15c～16c	糸切底	
48	16	瓦質土器	浅鉢	口縁部					15c前後か		
49	13	瓦質土器	火入	口縁～頸部					15c前後か		
50	23	瓦		部分					中世か	厚さ1.9	
第29図	51	23	石製品	砥石	部分						
	52	矢倉場	金属製品	鏝?							
	53	3	金属製品	金具?							直径10.2ほぼ円形 厚さ0.7
	54	3	金属製品	金具?							銅製品 長辺3.1, 短辺0.5, 厚0.1
	55	8	金属製品	銭貨						1368～	銅製品 長辺3.7, 短辺1.0, 厚1.0
	56	3	金属製品	銭貨						1368～	洪武通寶
	57	8	金属製品	銭貨						1408～	永樂通寶
	58	8	金属製品	銭貨					不明	15c～17c	洪武通寶 背字なし
	59	3	金属製品	銭貨					鹿児島(加治木)	15c～17c	洪武通寶 背字「治」

第5表 内城跡出土遺物一覧(2)



第30図 松尾城跡トレン子位置図



第31図 松尾城縄張図 (三木靖氏作成)

第IV章 松尾城跡の調査

松尾城は志布志城の中でも最初に築かれたと伝えられるが、中心的役割を内城が担うようになってからも継続して利用され、結果的に改変が加えられたと考えられる。調査は平成15年度に実施し、縄張図で「二の丸」と表現される曲輪に1か所、「三の丸」と表現される曲輪に4か所、合計5か所のトレンチを設定した。

第1節 調査の概要

【1 T】(第32図参照)

「二の丸」の曲輪、標高約54.8mの地点に約2×14mで設定し、曲輪北側の土塁にも調査が及ぶよう、配慮した。曲輪北部に存在する土塁は切土塁であり、いわゆるチョコ層からシラスである黄色火山灰土層までを削り込んで造られている。曲輪面は、土塁と同様にシラスを削平して造成されている。

曲輪面からは柱穴等の明確な遺構は確認されなかったが、造成面の上層からは青磁や染付を中心として多数の陶磁器片が出土した。

【2 T】(第32図参照)

「三の丸」の上段の広い曲輪面、標高約56.1mの地点に約2×20mで設定した。曲輪面を対象として建物跡の検出を目指したが、柱穴等の明確な遺構は確認されなかった。このため、2 Tの延長線上南側に約4×6.5mで延長部を設定したが、明確な遺構は確認されなかった。その後、さらに南に約4×3mを拡張し、曲輪面を縦断する形で調査を行い遺構の検出に努めたが、柱穴等の明確な遺構は確認されなかった。遺構精査を実施した結果、初めの拡張部分でトレンチを横断する溝状の遺構を確認した。しかしながら、遺物等を伴わなかったため、正確な時代及び遺構の性格は不明である。また、2回目の拡張部においては、原地形が西から東に著しく傾斜していることが確認された。

トレンチ全体を通じて、青磁を中心とした陶磁器片及び土師器片が多数出土し、洪武通寶も確認された。

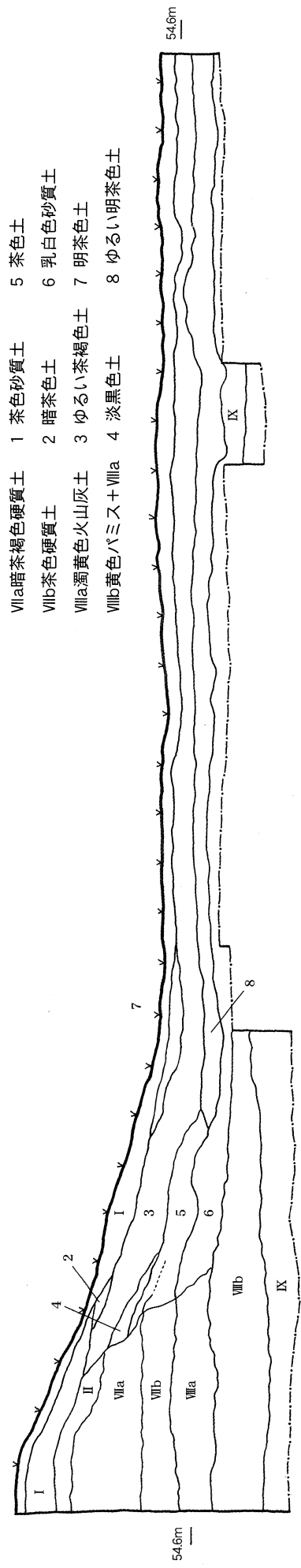
【3 T】(第33図参照)

「三の丸」の上段で2 Tの北端付近、標高約56.1mの地点に約1×7mで設定した。現状ではトレンチ北端部が標高約56.5mとやや高まりを持つ状態にあるが、断面観察により本来の地形は、北側の堀に向かって傾斜していたことが確認された。北側の堀に面して、シラスである濁黄色火山灰土より上位の層が残存し、切土塁の存在を予想させるが、樹根が入り込み立ち上がりは不明確である。

【4 T】(第33図参照)

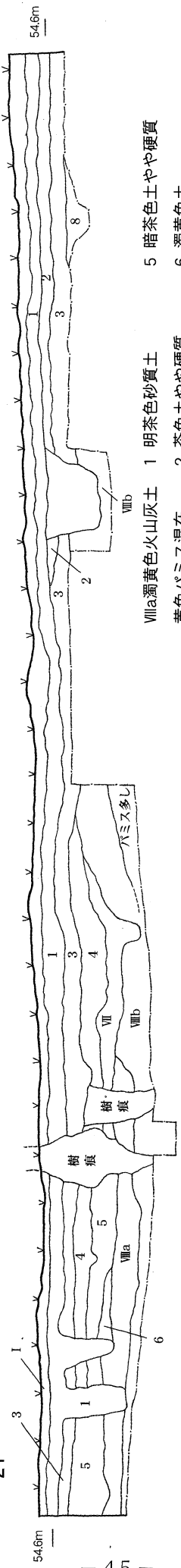
「三の丸」の下段北側、標高約51.6mの地点に約2×10mで設定し、曲輪北側の土塁にも調査が及ぶように考慮した。北側の土塁は、チョコ層と呼ばれる粘質土までを削り込んだ切土塁である。断面観察から本来の地形は西から東に傾斜していたことが確認された。

1T



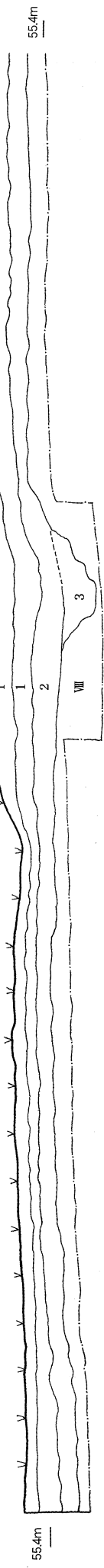
- VIIa 暗茶褐色硬質土 1 茶色砂質土 5 茶色土
- VIIb 茶色硬質土 2 暗茶色土 6 乳白色砂質土
- VIIc 濁黄色火山灰土 3 ゆるい茶褐色土 7 明茶色土
- VIIIa 黄色パミス+VIIa 4 淡黒色土 8 ゆるい明茶色土

2T



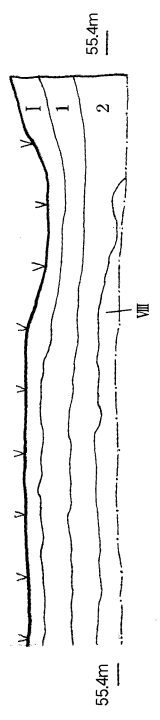
- VIIa 濁黄色火山灰土 1 明茶色砂質土 5 暗茶色土やや硬質
- 黄色パミス混在 2 茶色土やや硬質 6 濁黄色土
- VIIb 乳白色火山灰土 3 明茶色土+黄色パミス 7 暗茶色土
- VIIc より若干白色 4 淡黒色土 8 明茶色土

2T

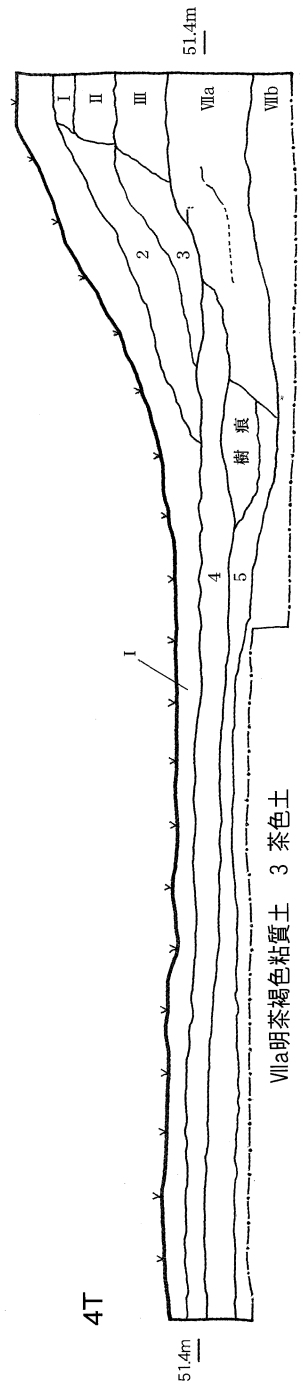
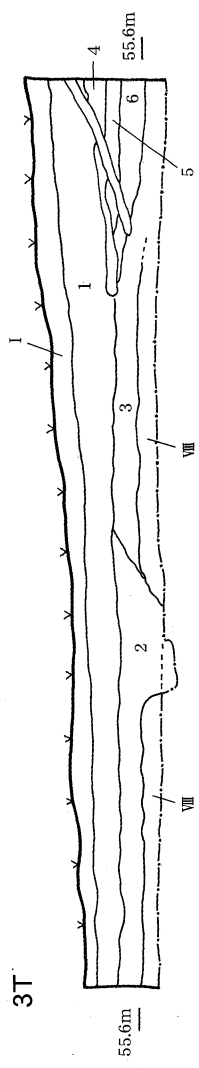


- VIII 黄褐色火山灰土+黄色パミス 1 暗茶色土 2 茶色土 3 茶色土

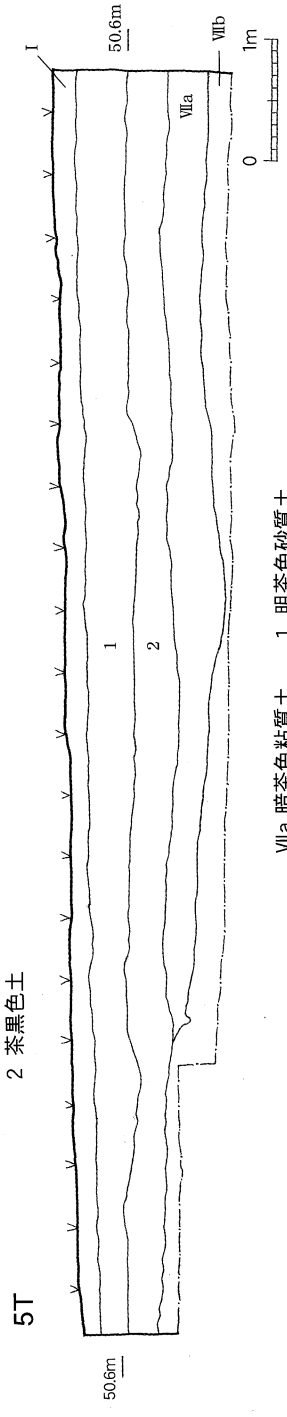
第32図 松尾城跡 1・2トレンチ断面図



- VIII 濁黄色火山灰土
- 1 ゆるい茶色土
- 2 明茶色砂質土
- 3 茶褐色土
- 4 灰色砂質土
- 5 茶色土+黄橙色火山灰土
- 6 淡黑色土



- VIIa 明茶褐色粘質土
- VIIb 乳白褐色粘質土
- 1 茶色土
- 2 茶黑色土
- 3 茶色土
- 4 明茶色砂質土
- 5 茶色土



- VIIa 暗茶色粘質土
- VIIb 乳白褐色粘質土
- 1 明茶色砂質土
- 2 茶色土

第33図 松尾城跡 3・4・5T断面図

【5 T】(第33図参照)

「三の丸」の下段、曲輪の中央付近に建物跡等の遺構検出を目的として約2×10mで設定した。磁器を中心とした遺物が出土したが、明確な柱穴等は検出されなかった。断面観察では、シラス層または、いわゆるチョコ層の面で削平されており、この面が築城面と考えられる。

第2節 遺物

1 青磁(第34図・60～68)

60～64を碗とした。60は端反碗である。61も口縁部がやや端反り気味で、焼成がやや不良である。62は内湾気味の口縁を持ち、外面には崩れた雷文あるいは草文と思われる文様が描かれる。63は外面に剣先蓮弁が描かれ、黒色味を帯びた深緑色を呈する。64は高い高台を持つ底部で、見込みには花文が描かれている。高台部分の施釉はやや粗雑で、畳付には不完全な釉剥ぎが施され、内底部分は露胎である。

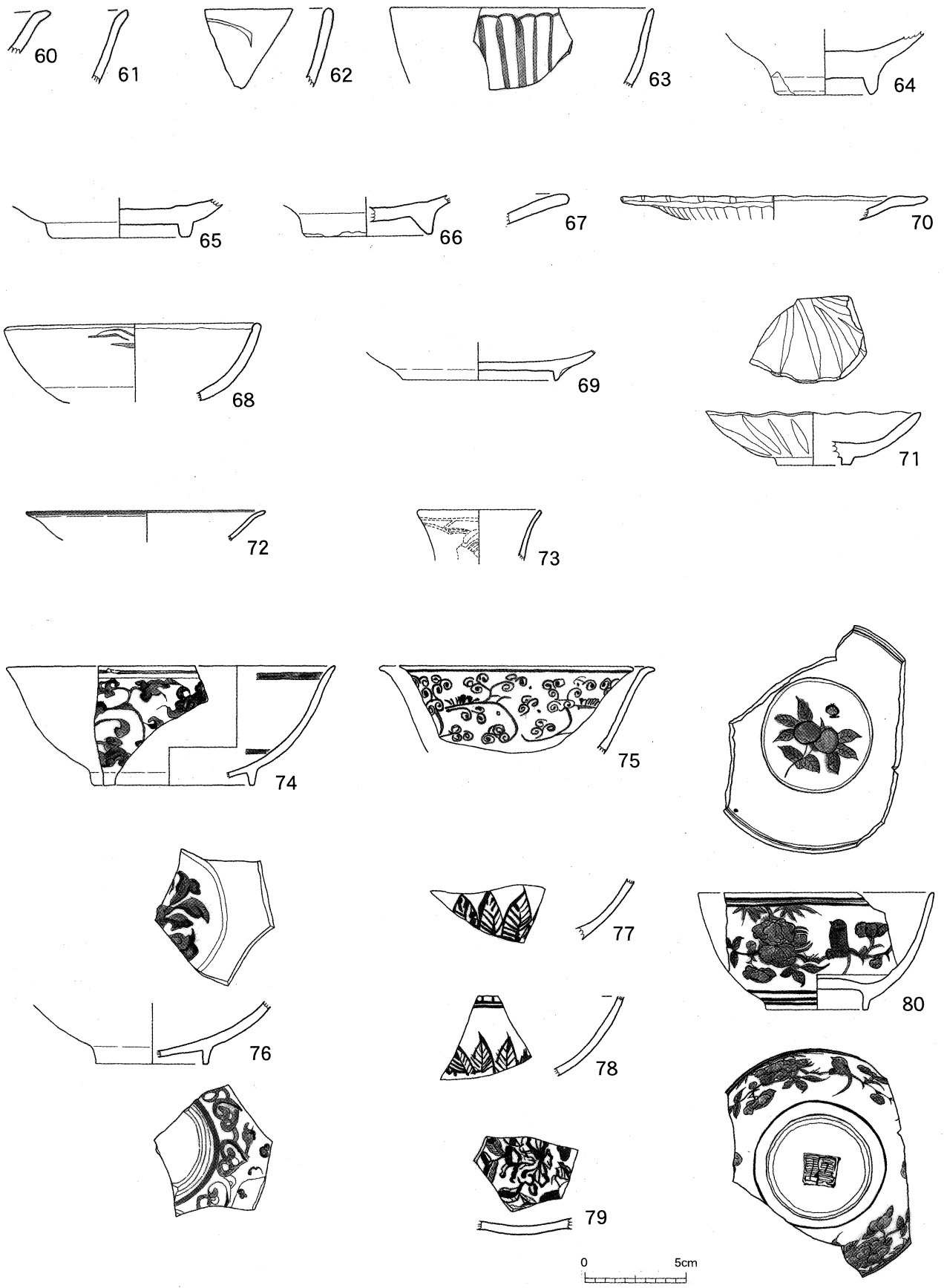
65～68を皿とした。65は低い高台を持つ底部で、内底部分及び見込み部分に釉剥ぎが施されている。66は碗の可能性もある底部である。見込み部分が大きく下がる形で、高台の施釉が荒く、粗雑な印象を受ける。内底及び畳付部分は施釉されず露胎であるが、内底部には釉が少量付着している。67は口縁部で器壁が厚い。内面には沈線状の段があり、器高が大きいことをうかがわせる。68は大きく内湾して立ち上がる口縁部である口縁部には口鑄が施され、外面には雷文あるいは草花文と思われる文様が描かれている。表面、特に内面がざらついており、二次的に被熱したと考えられる。

2 白磁(第34図・69～73)

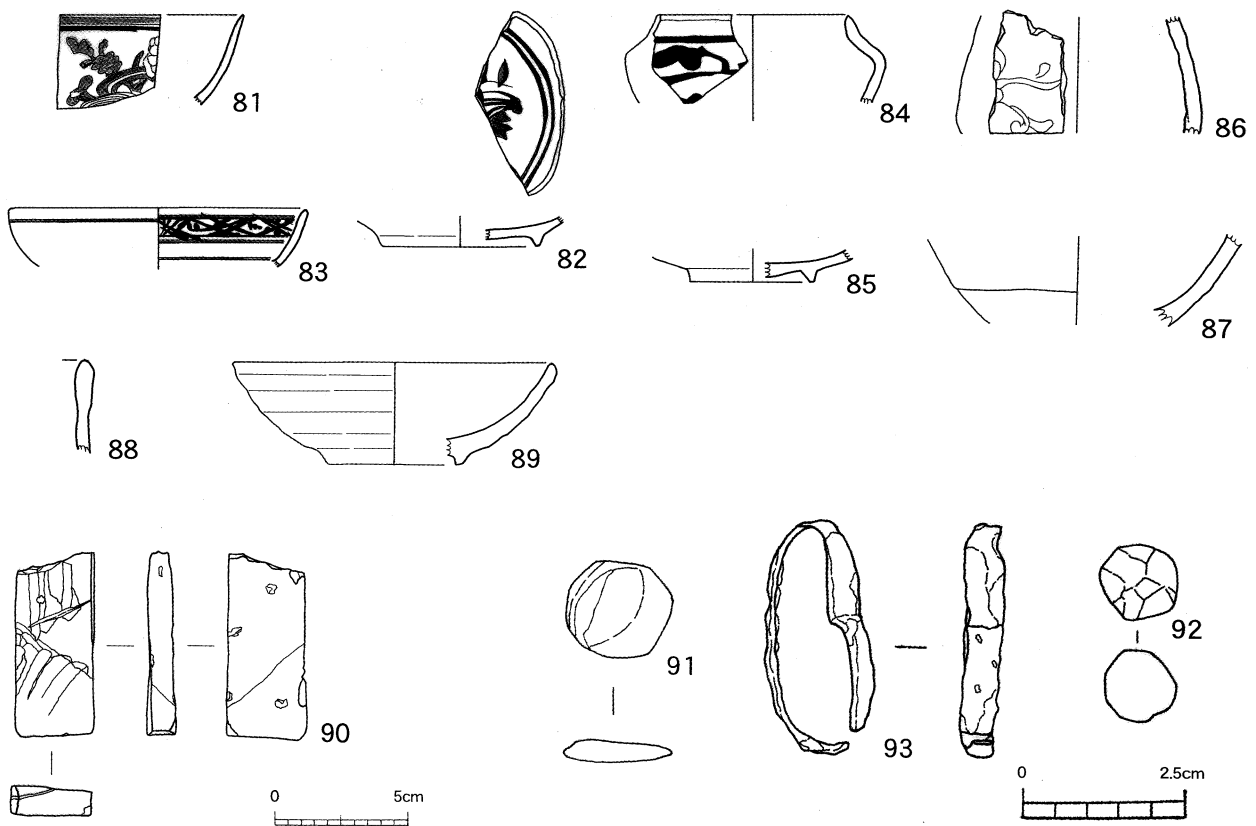
69は皿の底部である。内外面は薄い緑色を呈し、内底部は白色である。高台部分に釉が溜まっている部分がみられる。70は白磁の稜花皿である。緩やかな立ち上がりから大きく外反する口縁部を有する。71も白磁の稜花皿としたが、青磁の可能性もある。内外面にへら書きの文様を施している。内底のほとんどを欠損しているが、残存部から内底は無釉で、畳付は釉剥ぎが施されていることがわかる。72は皿の口縁部で口鑄が施されている。73は色絵で瓶類の口縁と思われる。色絵は剥げているが、その痕跡を破線で示した。

3 染付・その他の磁器(第34・35図・74～85)

74～81を碗とした。74は端反碗で、外面に唐草文が施される。焼成は良いが文様は粗雑である。75は内湾気味に立ち上がる碗で、外面には草花文が描かれる。見込みにも文様が描かれているが、ほとんどを欠損しているため、文様は判別できない。文様の発色はやや不良である。口縁部外面に重ね焼きの痕跡が見られる。76は底部で外面に唐草文、見込みに花文が描かれているが、発色が悪く文様も粗雑である。内底まで施釉され畳付は釉剥ぎがなされている。77・78は蕉葉文が描かれた体部である。78の方がわずかに薄く焼成も良い。79は見込み部分にあたり、牡丹文が描かれている。80はいわゆる饅頭心碗であり、外面及び見込みに鳥文と柿文が描かれる。内底には富貴佳器銘がある。81は口縁部のみだが、龍文と思われる文様が描かれている。82は低い高台を持つ皿の底部で、見込みには草花文が描かれている。83は薄手の口縁部で焼成が不良のためか、発色が良くない。胎土もやや黄色がかっている。84は小壺である。くの字状に屈曲する頸部を持つ。口縁部は内外面に渡り釉剥ぎが施され、外面には植物の文様が



第34图 松尾城跡出土遺物実測図 (1)



第35図 松尾城跡出土遺物実測図 (2)

描かれる。85は低い高台を持つ底部である。青磁または白磁で判別しがたいため、ここでは単に磁器とした。胎土はやや黄色がかり薄手で丁寧な印象を受ける。内底まで施釉されるが畳付は釉剥ぎが施される。

4 陶器(第35図・86~89)

86は明三彩で袋物の胴部と思われる。外面には唐草様の文様が描かれている。87は碗の体部だが、天目茶碗と思われる。内面は全体が施釉され、外面は体部下半が露胎と思われる。88は口縁部だけの小片だが、楽焼の茶碗と思われる。薄手だが口縁部は肥大する。軟質の褐釉がかけている。89は唐津焼の皿である。口縁部には口錆が施され、体部下半は露胎である。

5 その他の遺物(第35図・90～93)

90・91は石製品である。90は砥石である。側面には細い線状の擦過痕が見られ、表面は研磨が施されている。表面には数条の抉りといった様な傷が残されている。欠損のため全長は不明である。91は基石と思われる。不整な円形だが、黒色の石を丁寧に磨いている。同様のものが数点確認されている。92・93は金属製品である。92は鉛で不整な球状を呈し、鉄砲玉の可能性もある。93は銅製品で薄い板が輪状を呈している。何らかの金具と思われる。

第3節 まとめ

松尾城の利用時期については、青磁を中心とした遺物の年代から、おおむね14世紀後半から16世紀後半、あるいは17世紀代までと考えられる。松尾城は志布志城4城の中で最初に築かれたとされているが、出土遺物の年代は内城跡出土遺物と大差なく、ほぼ同一の年代を示す。これは内城が築かれた後、松尾城と内城が同時に使用されたことによるものであり、必ずしも築城順を反映したものではないであろう。最初期に築かれた松尾城は長期間に渡る志布志城の使用の過程で改変されたことが想定され、それゆえに志布志城の最初期に当たるであろう遺物・遺構は検出されなかったとも考えられる。もちろん、今回の調査が小規模なトレンチによる調査であったために検出にいたらなかった可能性もあるため、今後、曲輪面の全面調査を実施した際には、やや古い時代に相当する遺物が検出される可能性がある。

松尾城の築城に関しては、「三の丸」のトレンチにおける断面観察により、三の丸上段から下段にかけて西から東へ傾斜していたことが確認された。この傾斜面を大きく削平して、曲輪面を得たものと考えられる。また、「三の丸」「二の丸」「東丸」と、3つの曲輪が北から南へと並んでいることは現状でも確認され、台地の突端に延びる尾根を利用して築城されている。

図	番号	T	種別	器種	部位	口径cm	底径cm	器高cm	生産地	年代	備考
第34 図	60	2	青磁	碗	口縁部				中国(龍泉窯)	14c後~15c前	端反碗
	61	1	青磁	碗	口縁部				中国(龍泉窯)	14c後~15c中	
	62	2	青磁	碗	口縁部				中国(龍泉窯)	14c後~15c中	雷文か
	63	1	青磁	碗	口縁~体部	13.0			中国(龍泉窯)	15c第2四半期	剣先蓮弁
	64	2	青磁	碗	体部~高台		4.6		中国(龍泉窯)	15c中~16c前	内底露胎
	65	3	青磁	皿	底部~高台		6.8		中国(龍泉窯)	14c後~15c中	見込み釉剥ぎ 内底釉剥ぎ
	66	2	青磁	皿・碗	底部~高台		6.2		中国	15c~16c前	内底無釉
	67	2	青磁	皿	口縁部				中国	15c中~16c前	稜花皿? 粗製
	68	1	青磁	皿	口縁~体部	5.9			中国(福建広東)	16c後	雷文または草花文 口鏝 被熱
	69	2	白磁?	皿	底部~高台		7.6		中国(景德鎮窯)	16c第2・3四半期	
	70	2	白磁	皿	口縁~体部	15.4			中国(景德鎮窯)	16c後	綾花皿
	71	5	白磁?	皿	口縁~高台	10.8	3.7	2.7	中国(福建広東)	16c後	綾花皿 青磁の可能性あり
	72	2	白磁	皿	口縁部	12.0			中国	16c後~17c前	
	73	2	白磁	瓶類?	口縁部	6.0			中国(景德鎮窯)	16c第4四半期	色絵(剥け)
	74	2	染付	碗	口縁~体部	15.6			中国(景德鎮窯)	15c後~16c初	端反碗 唐草文
	75	2	染付	碗	口縁~高台	16.6	7.8	6.1	中国(景德鎮窯)	16c前~16c中	草花文
	76	2	染付	碗	体部~高台		5.6		中国(景德鎮窯)	16c前~16c中	草花文 唐草文 見込花文
	77	2	染付	碗	体部				中国(景德鎮窯)	16c前~16c中	蓮子碗 蕉葉文
	78	2	染付	碗	体部				中国(景德鎮窯)	16c後	蕉葉文
	79	2	染付	碗	底部				中国(景德鎮窯)	16c前~16c中	見込牡丹文
	80	2	染付	碗	口縁~高台	11.9	5.0	6.0	中国(景德鎮窯)	16c後	饅頭心 鳥文 柿文 内底「富貴佳器」銘
	81	2	染付	碗	口縁~体部				中国(景德鎮窯)	16c後	龍文
	82	2	染付	皿	底部~高台		5.8		中国(景德鎮窯)	16c前~16c中	内底釉剥ぎ 見込草花文?
	83	2	染付	皿?	口縁~体部	11.2			中国(福建南部)	16c後	内面口縁四方標文
	84	2	染付	壺	口縁~体部	7.0			中国(漳州窯系)	16c後~17c初	小壺 草文?
	85	1・2	磁器	皿	底部~高台		4.6		中国(福建広東)	16c後~17c代	白磁か青磁か判別しがたい
	86	5	陶器	袋物	胴部				中国南部	16c代	明三彩
	87	2	陶器	碗	体部				瀬戸・美濃	16c頃	天目茶碗
88	2	陶器	碗	口縁部				京都? 柴焼	16c末	葉茶碗 軟質褐釉	
89	5	陶器	皿類	口縁~高台	12.0	5.2	3.9	唐津	1590~1610	口鏝	
90	2	石製品	砥石	部分						長5.9 幅3.0 厚1.2	
91	2	石製品	碁石							最大長径1.7 厚さ0.4 黒色	
92	2	金属製品	鉄砲玉							鉛玉 不整形	
93	2	金属製品	輪状金具?							銅製品 長辺3.9 幅0.5 厚0.2	

第6表 松尾城跡出土遺物一覧



第36図 高城跡トレンチ位置図

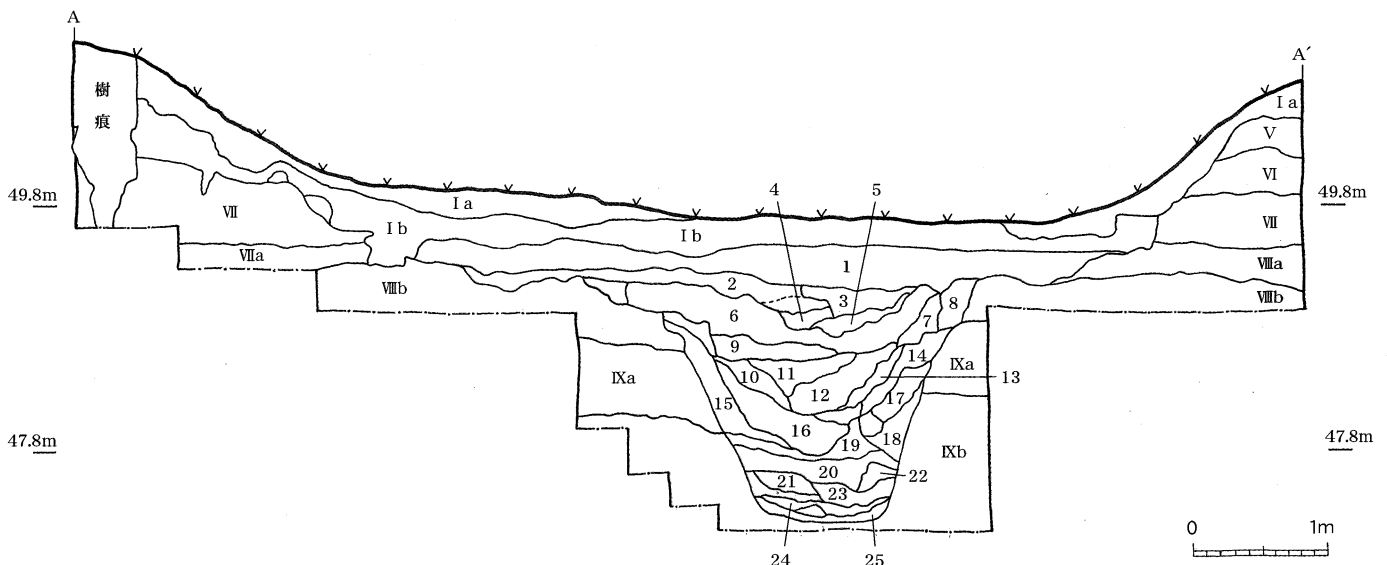
第V章 高城跡の調査

高城跡には谷を挟んで南北ふたつの曲輪が存在する。北側の曲輪は、周辺地域において高城の「二の丸」と言い伝えられている。文献資料等に拠る名称ではないが、南北ふたつの曲輪を区別するため、便宜上この呼称を用いて、北側の曲輪を「二の丸」と表現する。それに伴い南側の曲輪を便宜上、高城「本丸」と表現することとする。

今回の調査は平成15年度に実施され、「二の丸」に2か所、「本丸」に3か所のトレンチを設定して実施した。「二の丸」は近年に開発の手が入り、シラス層以下にまで及ぶ大規模な削平が行われた結果、曲輪面のほとんどを消失したと考えられているが、開発着手以前にT字状の堀が存在していたことが知られており、堀の確認を主眼として調査を実施した。「本丸」は志布志中学校の校庭の東側に存在し、校庭とは大きな堀で隔てられている。

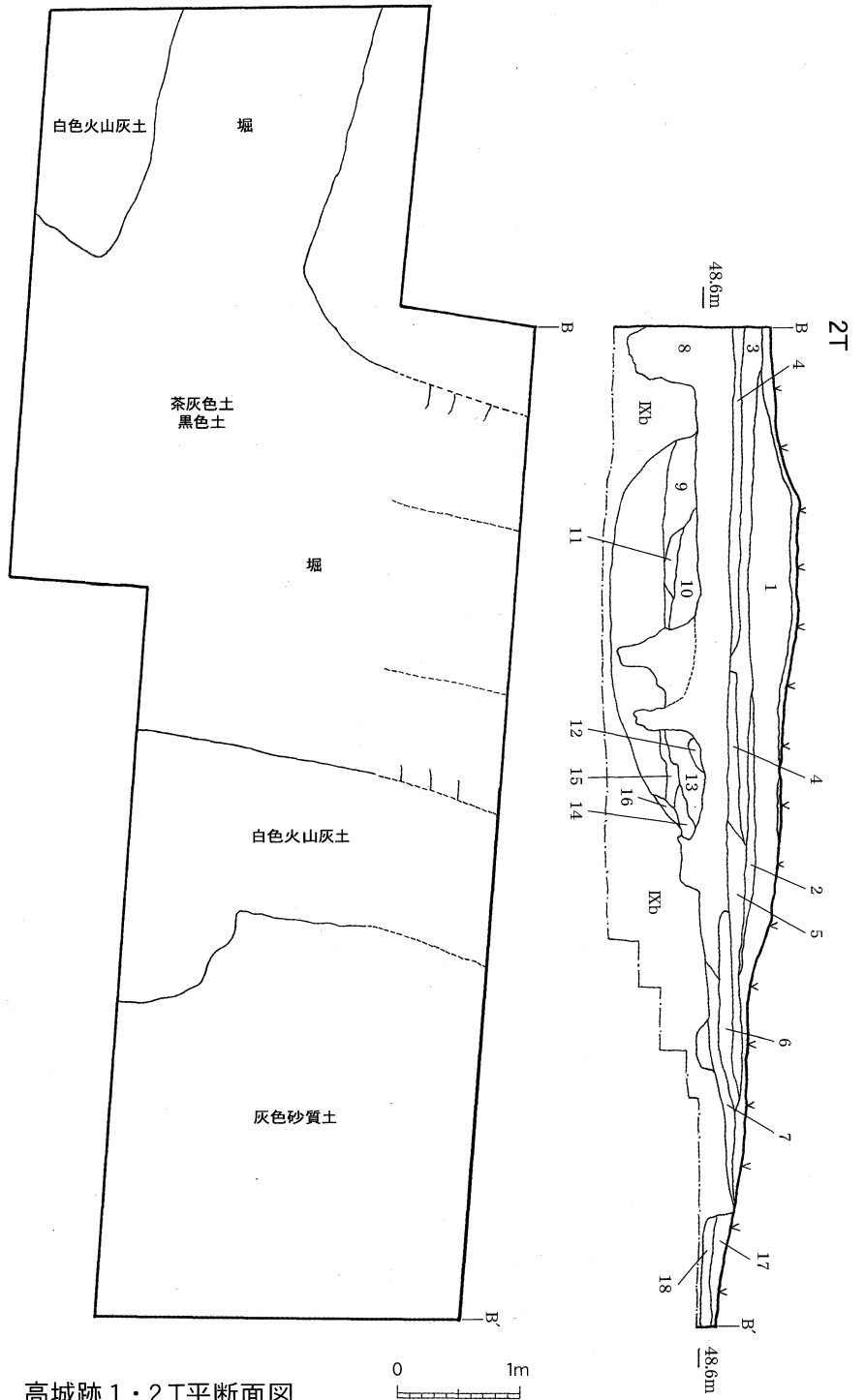
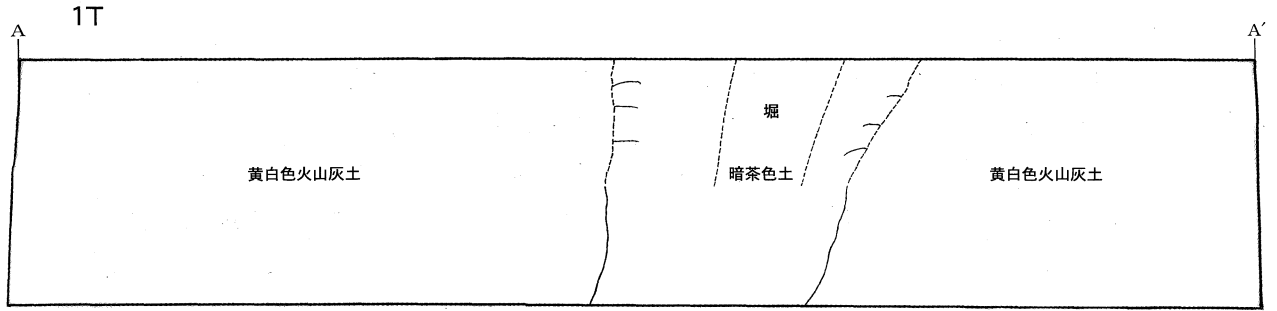
なお、今回の確認踏査に先立ち平成14年度に、高城本丸の西側に存在し新城に面する土塁の確認調査が実施されている。2か所のトレンチによる調査を実施し、この土塁がシラスを用いて築かれた盛土塁であることが確認されている。

第1節 調査の概要



I a ゆるい茶色土	3 淡黒色土	12 明茶灰色+白色砂質土	21 白色砂質土
I b 明茶色土	4 茶色土	13 暗茶色土	22 淡黒色土
VII 明茶褐色粘質土	5 暗茶色土	14 茶灰色土	23 乳白色さ質土
VII a 黄色火山灰土	6 暗茶色土	15 淡黒色土	24 白色砂質土
VII b 黄白色火山灰土	7 明茶灰色土	16 暗茶色土	25 明茶灰色土(硬化)
IX a 乳白色火山灰土	8 明茶灰+白色砂質土	17 黒色土	
IX b 白色火山灰土	9 茶灰色土	18 黒茶色土	
1 明茶褐色土	10 暗茶褐色土	19 淡黒色土	
2 明茶灰色+黄色火山灰土	11 暗茶灰色土	20 暗茶色+黄色火山灰土	

第37図 高城跡1 T断面図



- | | | | |
|------------------|--------------|---------------|---------------|
| 1 茶色土+黑色土+白色火山灰土 | 10 黑色土 | 14 茶灰色土+白色砂質土 | 18 灰色土 |
| 2 淡黑色土 | 6 灰色砂質土+乳白色土 | 15 濁黄色土+白色砂質土 | |
| 3 黑色土 | 7 灰色砂質土 | 11 暗茶色土 | 16 茶灰色+白色砂質土 |
| 4 灰白色土+ハミヌ | 8 灰色土+砂質 | 12 茶灰色土+白色砂質土 | |
| 5 茶灰色土 | 9 茶灰色砂質 | 13 淡茶色砂質土 | 17 茶灰色土+白色砂質土 |

第38図 高城跡1・2T平断面図

【1 T】(第37・38図参照)

「二の丸」の残存状況が比較的良好と思われ、丘状の高まりが南北に存在している地点に、約2×12mで設定した。南北の丘状の高まり部分で標高約51.4m、谷間部分で約49.7mである。谷間部分より幅約2mの堀が検出された。堀の深さは地表面より約2.4m、削り込まれた灰白色シラス層より約1.9mを測る。南北の高まりには、いわゆるチョコ層が残存しており、堀は高まり部分を削り残しシラスを掘り込んで造られている。堀底にはシラスと思われる砂質土が硬化し、通路等の利用をうかがわせる。また、堀底以外にも硬化面が確認され、複数の時期に渡る利用をうかがわせる。

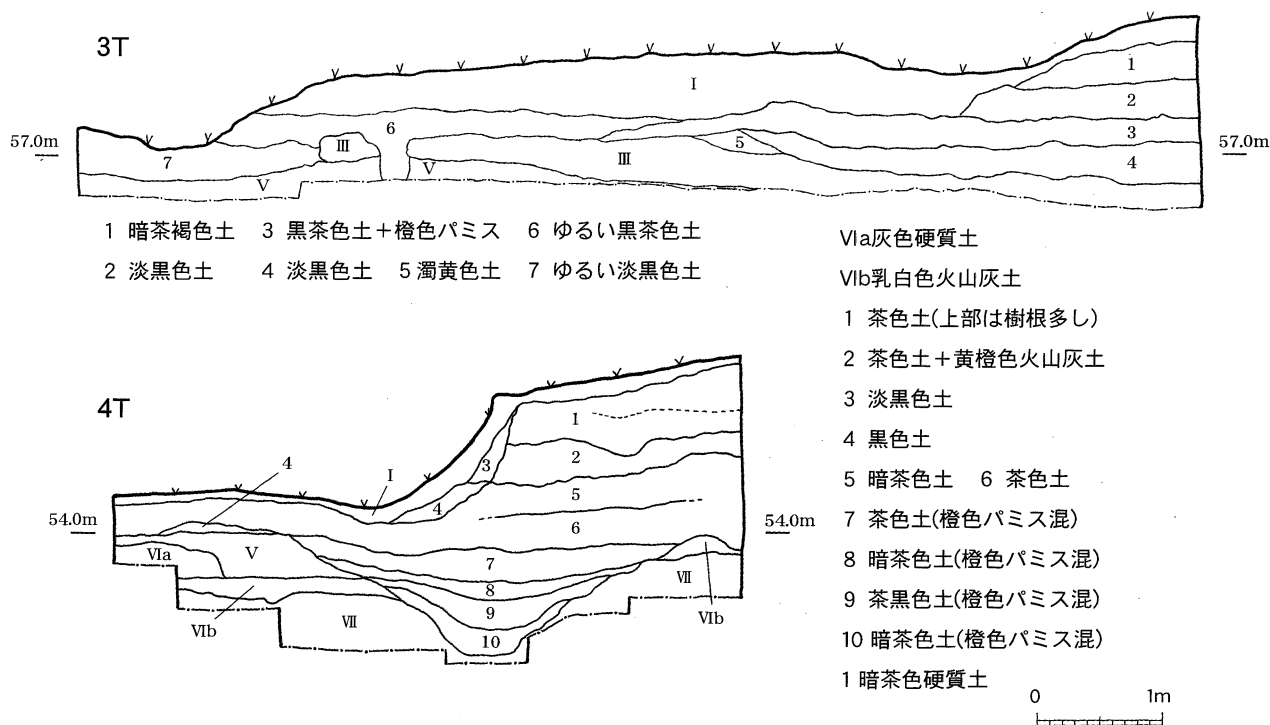
陶磁器片が検出されたほか、堀の埋土中からも陶磁器や土師器ほかの遺物が確認されたが、堀の作成時期等を特定するにはいたらなかった。

【2 T】(第38図参照)

1 Tで検出した堀の形状を確認するため、1 Tに直交する形で約7×2mで設定し、調査の進捗にあわせて拡張した。トレンチの西端は近年の造成地に及び、現状でも白色シラスが露出している。調査の結果、1 Tで検出した堀と交わり南北に延びる1条の堀を検出したが、削平により底部が残るのみであった。1 Tで検出した東西の堀と同様にシラスを掘り込んで作られている。上面が破壊されているため、本来の深さは不明である。底面のシラスは総じてやや硬質だが、明確な硬化面としては確認できなかった。

【3 T】(第39図参照)

「本丸」の最も高い位置にある曲輪で、標高約57.8mの地点に約2×8mで設定した。曲輪面は、アカホヤ火山灰の二次堆積土までを削平して平坦面を得ている。曲輪の北側に存在する



第39図 高城跡3・4T断面図

土塁状の高まりについては、土塁状の盛土がなされているものの、締りが悪く、堅固に積み重ねられたイメージは受けない。表土に近い上層部分では、近現代の遺物が確認され、近現代における造成で破壊されている可能性がある。

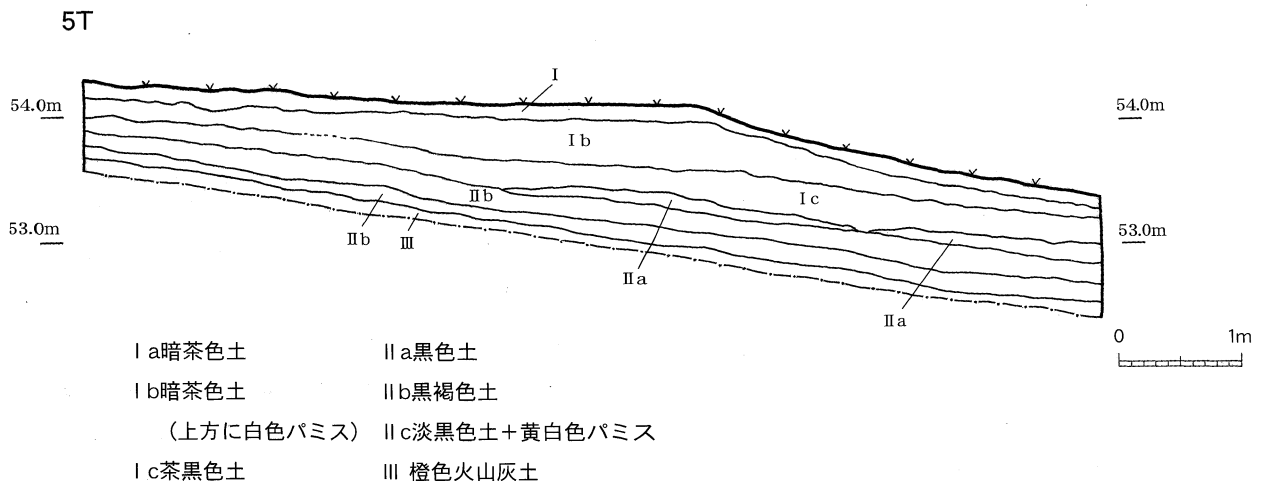
平坦面からは明確な遺構等は確認されなかったが、青磁、陶器、土師器等の遺物が出土し、鉄滓も確認された。

【4 T】(第39図参照)

「本丸」築城の状況を確認するため、3 Tを設定した曲輪と1段下がった南側の曲輪の境界に約2×3mで設定した後、拡張した。段差の上面では標高約56.5m、下面で約55.6mである。低い方の曲輪面はいわゆるチョコ層あるいは薩摩火山灰土層までを削り込み、平坦面を得ているようである。トレンチ北端部には樹痕が入り込んでいるものの北壁の土層断面観察により、薩摩火山灰土及びその上層の黒色土が削り残されていることが確認された。造成の際に削り残すことで曲輪間の段差をつけ、その上に盛土を行っている。また、盛土を行う際には、造成面をいったん掘り込み、溝状の窪みを作ってから盛り始めている。この掘り込み部分からはいくつかの拳大の垂円礫が検出された。そのうちの1個は石英を多く含み、例外的に大きく子供の頭ほどあり、掘り込みの底部で検出された。これらの礫は、土止め等の用途に利用されたと推測されるが、その出土数は十数点であり、少ない印象を受ける。

【5 T】(第40図参照)

「本丸」の南東部、緩傾斜の地点に約2×10mで設定した。トレンチ端部の標高は約54.4mと約53.4mである。調査の結果、アカホヤ火山灰土までの層位が残存していることが確認され、この地点には自然堆積が残存していると判断された。黒色土中からは青磁等の遺物が出土したものの、傾斜しているアカホヤ火山灰土を削平した状況は見られない。柵列等の施設に相当する痕跡も確認されなかった。



第40図 高城跡5T断面図

第2節 遺物

高城跡については、平成14年度に緊急確認調査が実施された際の遺物を今回の調査とあわせて掲載する。

1 磁器(第41図・94～108)

94～97は青磁である。94は小碗で内底は無釉、畳付は釉剥ぎが施されている。95は皿あるいは盤と考えられる。口縁端部は外反した後、垂直に立ち上がる。内面には線彫りと思われる文様が施されるが、鮮明ではない。96・97は皿の口縁部である。96は端反り気味に外反するもので、97は稜花皿と思われる。

98～103は白磁である。98・99は皿の底部である。どちらも碁笥底を呈するが、98は厚手で99は薄手である。100～102は端反の皿である。101は胎土が異なり内外面ともに下半部は露胎である。103は碗の底部付近と思われ、二次的な被熱が見られる。

104～108は染付である。104～107は碗である。104は端反碗の口縁部で、外面には渦文が描かれている。105は底部で、外面及び見込みに草花文と唐草文が描かれるが、粗雑で発色は良くない。高台部分に焼成時の破損が見られる。106は口縁部で、波濤文と思われる文様が描かれている。107は口縁部に雷文、体部には鳥文が描かれている。発色はあまり良くない。108は皿であり、口縁部はやや外反し内底は無釉である。見込の文様は玉取獅子文と思われる。

2 陶器(第41図・109～118)

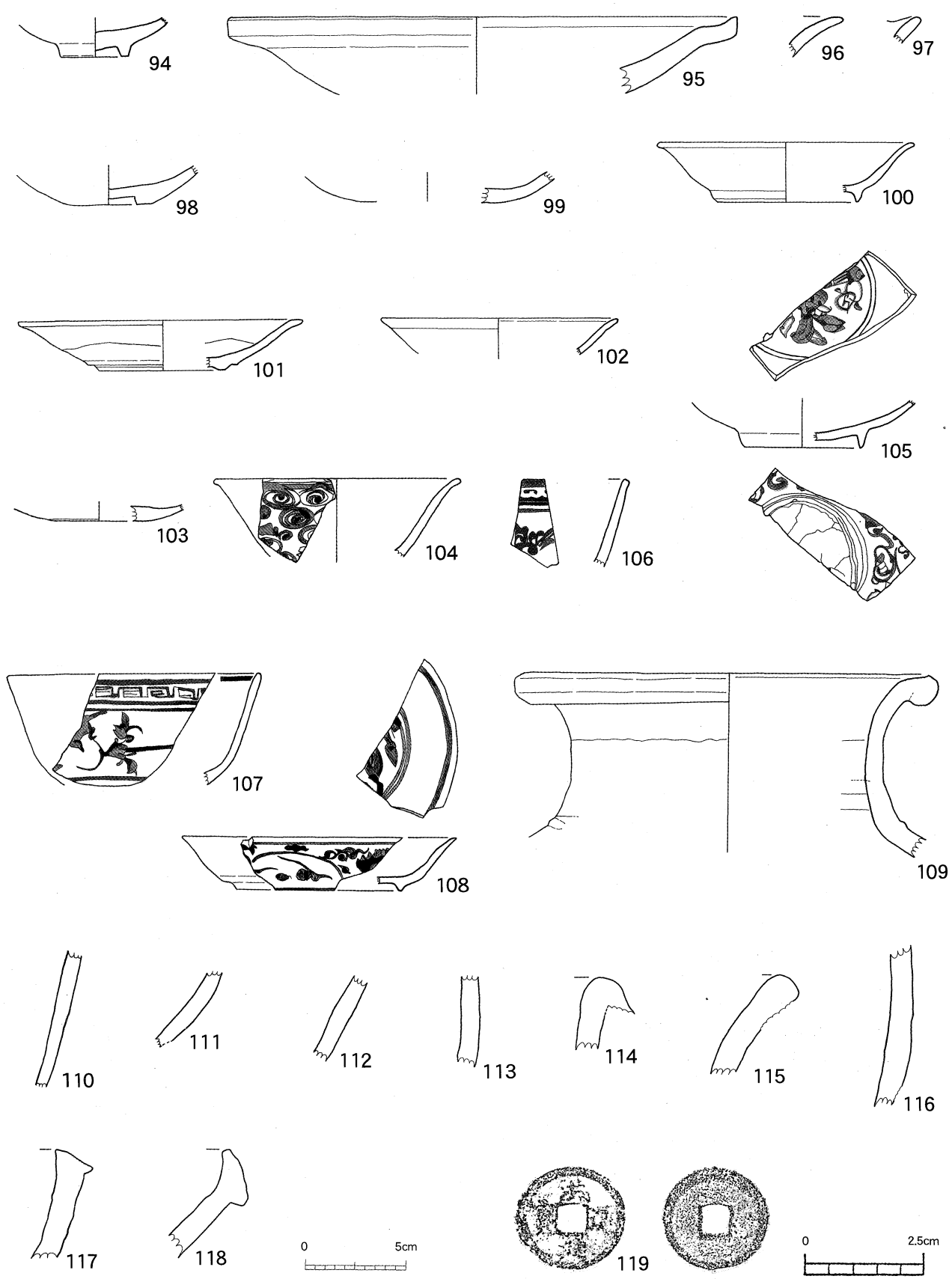
109はタイ産の壺の口縁部で、頸部から肩部にかけて施釉されるものと思われる。頸部から肩部にうつる部分に、重ね積みした際の溶着とみられる部分がある。110～112は中国陶器の壺あるいは甕である。110はやや薄手で、外面は褐釉がかけられ内面は無釉である。111は底部付近の胴部と思われ、内外面ともに黒釉がかけられている。112は内外面に褐釉がかけられ外面は光沢が強い。同様の小片が数点出土している。

113は内外面とも施釉され外面には櫛状の工具痕が残る。生産地は不明で在地系とも思われるが、常滑焼系の可能性もある。114は壺あるいは甕の口縁部と思われ、折り返しの部分が広がる様子が見受けられる。産地不明だが常滑焼系の可能性がある。115～118は備前焼で、115・116は壺あるいは甕と思われる。116は胴部で内外面ともに無釉である。117・118は播鉢の口縁部である。118に類似する破片は数点が確認された。

第3節 まとめ

高城跡の利用時期については、遺物の出土数が少なく一概には判断できないが、本丸で出土した中国の龍泉窯系青磁に類似する小片等は二の丸でも確認され、本丸と二の丸に大きな差は認められない。このため、利用時期に大きな差はなく遺物の年代からは14世紀後半から16世紀、あるいは17世紀代までととらえられる。

高城の築城について、曲輪面が失われている二の丸については不明だが、本丸については緩傾斜の自然地形を残している部分が存在する。戦時に急いで築城されたためとも考えられるが、遺物から見た使用期間は長期に渡っており、問題が生じる。4城の使用時期の問題として、今後の課題としたい。



第41图 高城跡出土遺物実測図

図	番号	T	種別	器種	部位	口径cm	底径cm	器高cm	生産地	年代	備考
	94	3	青磁	碗	底部～高台		3.4		中国(龍泉窯)	14c後～15c前	小碗
	95	緊急確認	青磁	皿・盤	口縁部	25.6			中国(龍泉窯)	14c後～15c中	線彫り
	96	3	青磁	皿	口縁部				中国(龍泉窯)	14c後～15c中	
	97	3	青磁	皿	口縁部				中国(龍泉窯)	15c代	稜花皿
	98	3	白磁	皿	底部		3.9		中国(景德鎮窯)	16c後	碁笥底 ヒビ焼
	99	3	白磁	皿	底部		4.6		中国(景德鎮窯)	16c後	碁笥底
	100	緊急確認	白磁	皿	口縁部～高台	12.8	7.0	3.0	中国(景德鎮窯)	16c	端反
	101	緊急確認	白磁	皿	口縁部～高台	14.0	6.4	2.5	中国	16c後	端反
	102	緊急確認	白磁	皿	口縁～体部	11.6			中国(景德鎮窯)	16c後	端反
	103	3	白磁	碗	底部				中国(福建広東)	16c～17c代	被熱
	104	3	染付	碗	口縁～体部	12.4			中国(景德鎮窯)	15c末～16c前	渦文 唐草文
	105	3	染付	碗	底部		5.7		中国(景德鎮窯)	16c前～16c中	草花文
	106	3	染付	碗	口縁部				中国(景德鎮窯)	16c前～16c中	波濤文
	107	緊急確認	染付	碗	口縁～体部	12.6			中国(景德鎮窯)	16c代	烏文 雷文
	108	緊急確認	染付	皿	口縁～底部	11.8	8.2	2.7	中国(景德鎮窯)	16c前～16c中	草花文 雲文 見込玉取獅子文
	109	緊急確認	陶器	壺	口縁～頸部	20.8			タイ(シーサッチャナイ窯)	15c～16c	四耳壺 被熱
	110	3	陶器	壺・甕	胴部				中国	明代	褐釉
	111	緊急確認	陶器	壺	胴部				中国	明代	黒釉
	112	緊急確認	陶器	壺	胴部				中国	明代	褐釉
	113	4	陶器	壺・甕	胴部				産地不明	鎌倉時代	在地系か 常滑系の可能性あり
	114	1	陶器	壺?甕?	口縁部				産地不明	13c～14c	在地系か 常滑系の可能性あり
	115	4	陶器	壺・甕	口縁部				備前	15c	
	116	4	陶器	壺・甕	胴部				備前	15c前後	
	117	2	陶器	插鉢	口縁部				備前	15c頃	室町時代か
	118	2	陶器	插鉢	口縁部				備前	15c～16c	
	119	緊急確認	金屬製品	錢貨						1368～	洪武通寶

第 41 図

第 7 表 高城跡出土遺物一覧



第42図 新城跡 トレンチ位置図

第VI章 新城跡の調査

新城跡は現在、志布志中学校の校庭となっており、主体となる曲輪部分は失われているが、周囲に土塁が残存していることが確認されている。昭和62年度には中学校の体育館改築に際して確認調査を実施し、台地と山城とを切り離す堀の存在を確認している。堀は台地の北側に入り込む谷を利用し、台地から新城を切り離している(『志布志新城跡』志布志町教育委員会1992)。

今回の調査は平成15年度に実施し、北側の志布志中学校武道館周辺に残存する土塁と、南西部の土塁を確認することを目的として、合計5か所にトレンチを設定した。

第1節 調査の概要

【1 T】(第43図参照)

志布志中学校武道館の東側には、新城北側の谷に面する大規模な土塁が部分的に残存している。この土塁を断ち割るように、約2×5mで設定した。土塁頂部で標高約56.7m、土塁の裾部分で約54mである。土塁は大規模な盛土塁であり、アカホヤ火山灰土やシラスを用いて築造されている。また、断面観察による盛土の状況は北から南に傾斜しており、北側断面では盛土の層が厚く、南側断面では層が薄い。

調査の進捗にあわせてトレンチを延長し土塁の基部を確認したところ、土塁の内側にあたる部分でV字状に造成面を掘り下げている部分を確認した。造成面を溝状に掘り込んでから盛土を行う手法は、志布志城の他の城でも見られ、盛土塁を作成する際の工法とも考えられるが、あるいは曲輪面に存在する溝状の施設である可能性もある。このトレンチでは、南壁断面では確認されるものの、北壁断面では確認できない。当初より存在しないか、あるいは、中学校校庭を整備する際に破壊された可能性がある。

土塁内部より少量の陶磁器片が検出されたため、おおよその築造年代が推測される。

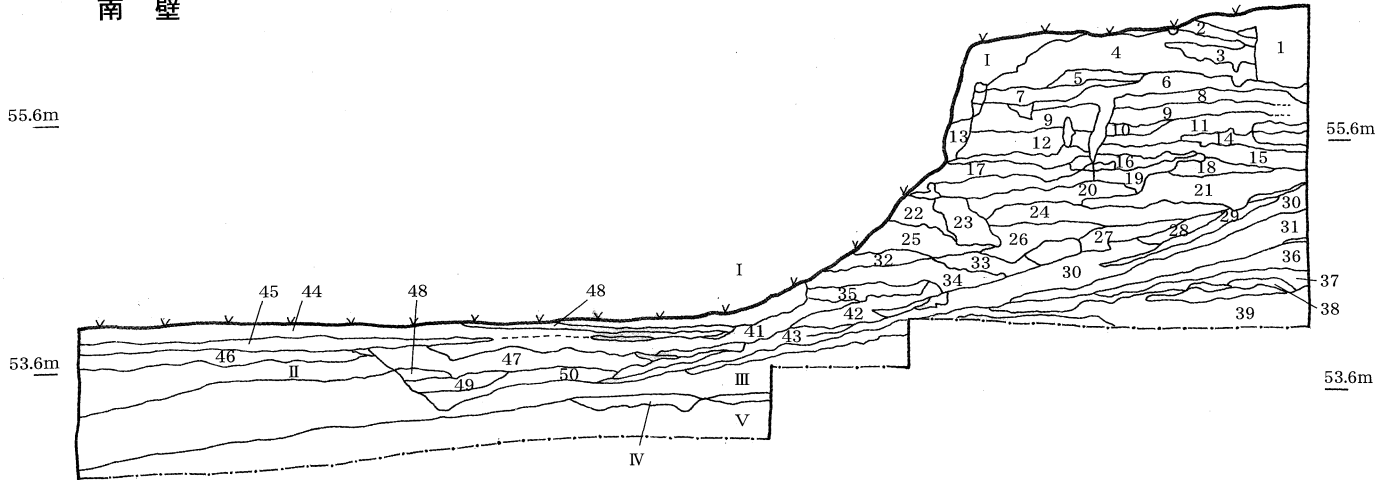
【2 T】(第44図参照)

1 Tを設定した土塁の延長を確認するため、1 Tの北東で校庭の平坦面、標高約54.1mの地点で、北側の谷に向かい約1×8mで設定した。調査の結果、山城の造成面と思われる部分は校庭整備に伴ってほぼ破壊されているが、本来の地形が北側の谷に向かって大きく傾斜していることが確認された。築城時には盛土を行って平坦面を得て、谷に対して土塁を築いたことが推測されるが、現状では盛土塁の基部等の存在は確認できなかった。

【3 T】(第45図参照)

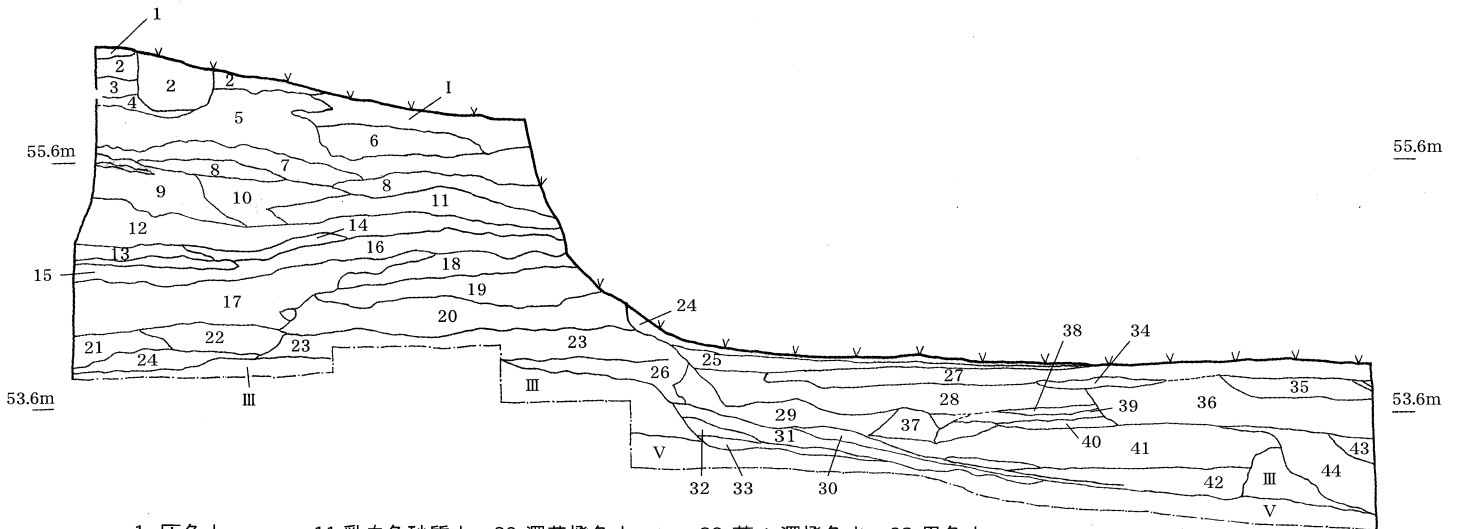
1 Tを設定した土塁の周辺を調査するため、1 Tの南側に約2×3mで設定した。1 Tの土塁はこの地点まで延びているが、近年の造成によって破壊されたとみられ、約50cmの高まりとして残存している。トレンチ端部、高まりの頂部付近で標高約54.3mである。1 T南壁断面で確認された、盛土塁の手前を部分的に掘り下げる手法について、3 Tでも同様の手法を確認した。しかしながら、1 TのようなV字状ではなく、浅い掘り込み状を呈するとみられる。

南 壁

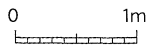


- | | | | | |
|-----------|------------|-------------|--------------|---------------|
| 1 ゆるい灰白色土 | 11 茶色土 | 21 茶褐色+濁橙色土 | 31 白色砂質土 | 41 茶+濁橙色土 |
| 2 淡黒色土 | 12 黒色土 | 22 暗茶色土 | 32 茶+濁橙色土 | 42 暗茶+濁橙色土 |
| 3 黒色土 | 13 ゆるい黒色土 | 23 茶色土 | 33 暗茶+濁橙色土 | 43 茶色砂質土 |
| 4 白色砂質土 | 14 濁橙色土 | 24 茶色土+パミス | 34 淡黒+濁橙色土 | 44 黒灰色+濁橙色土 |
| 5 黒色土 | 15 茶色土 | 25 暗茶色+濁橙色土 | 35 暗茶+濁橙色土 | 45 白色砂質土 |
| 6 暗茶色土 | 16 茶褐色土 | 26 茶色土 | 36 白色砂質+濁橙色土 | 46 暗茶色土+白色パミス |
| 7 茶+橙色土 | 17 茶褐色土 | 27 茶色+濁橙色土 | 37 淡黒色+黄色パミス | 47 暗茶色土 |
| 8 淡黒色土 | 18 茶+白色パミス | 28 茶色土 | 38 暗茶+濁橙色土 | 48 淡黒色土 |
| 9 淡黒+茶色土 | 19 淡黒色やや褐色 | 29 黄色砂質土 | 39 茶+濁橙色土 | 49 白色砂質土 |
| 10 淡黒色土 | 20 暗茶褐色 | 30 白色砂質土 | 40 茶灰色土 | 50 黒色土+濁橙色土 |

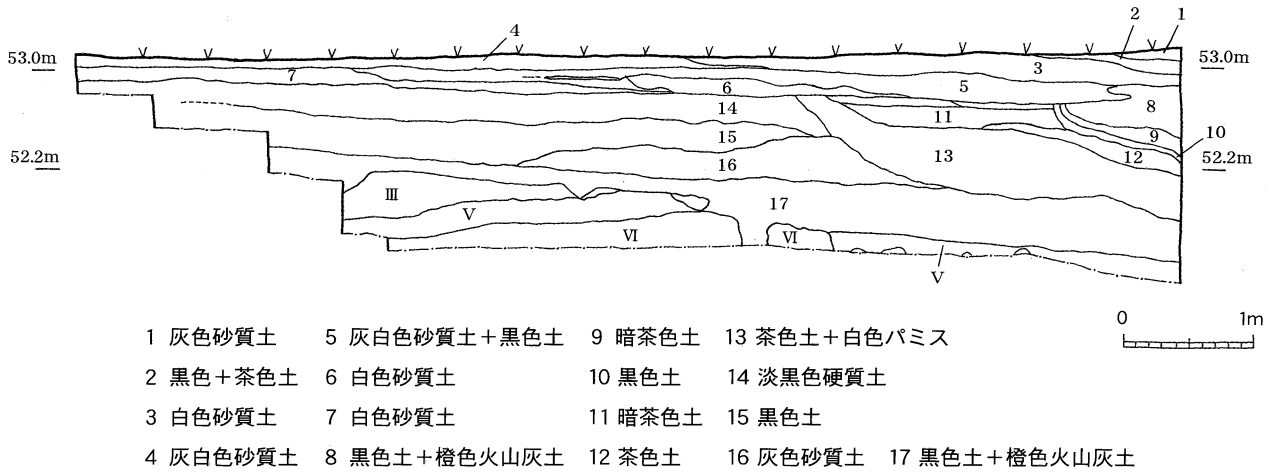
北 壁



- | | | | | |
|-------------|--------------|----------------|---------------|-----------|
| 1 灰色土 | 11 乳白色砂質土 | 20 濁黄橙色土 | 29 茶+濁橙色土 | 38 黒色土 |
| 2 白色砂質土 | 12 白色砂質+濁黄色土 | | 30 白色砂質土 | 39 灰白色土 |
| 3 淡黒色土 | 13 乳白色砂質土 | 21 暗茶色土 | 31 茶+濁橙+白色砂質土 | |
| 4 黒+白色砂質土 | 14 白色砂質土 | 22 暗茶色土+黄橙色パミス | 40 黒色土 | |
| 5 淡黒+白+濁橙色土 | 15 濁橙色土 | 23 灰黒色土 | 32 茶色土 | 41 黒+濁橙色土 |
| 6 黒色土 | 16 淡黒色土 | 24 茶色土 | 33 濁橙+黒色土 | 42 茶+濁橙色土 |
| 7 茶褐+濁橙色土 | 17 淡黒+濁橙色土 | 25 暗茶+白色砂質土 | 34 白色砂質土 | 43 灰白色砂質土 |
| 8 淡黒色土 | 18 濁橙色土 | 26 黒色土 | 35 白色砂質土 | 44 茶+黒色土 |
| 9 白色砂質土 | 19 濁黄橙色土 | 27 暗茶+白色砂質土 | 36 黒+灰色砂質土 | |
| 10 灰白色砂質土 | | 28 黒+濁橙色土 | 37 茶灰色土 | |



第43図 新城跡1 T断面図



第44図 新城跡 2 T断面図

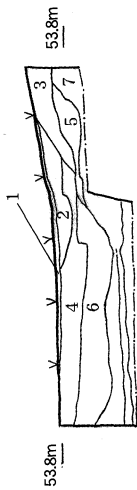
【4 T】(第45図参照)

新城の南西部分、現在の志布志中学校テニスコート裏には、二重の土塁が残存する部分がある。さらに下の曲輪にも土塁が存在し、あわせて三重の土塁を備えているかのように見える。二重の土塁部分に約2×11mで設定し、調査を実施した。現状は、外側の土塁の頂部が標高約53.4m、裾部分で約52.9mであり、内側の土塁は高さ20cm程度の丘状の盛り上がりである。外側の土塁については、アカホヤ火山灰土までを造成し、シラスや黒色土を用いた築いた盛土塁であることが確認された。本来の地形は東から西に向かって大きく傾斜し、傾斜地に盛土を行って、ある程度の平坦面を確保した後に土塁が築造されている。内側の土塁については、近現代遺物が確認されたほか盛土の状況も悪く、テニスコート等の造成に伴って盛られたものと判断された。

【5 T】(第45図参照)

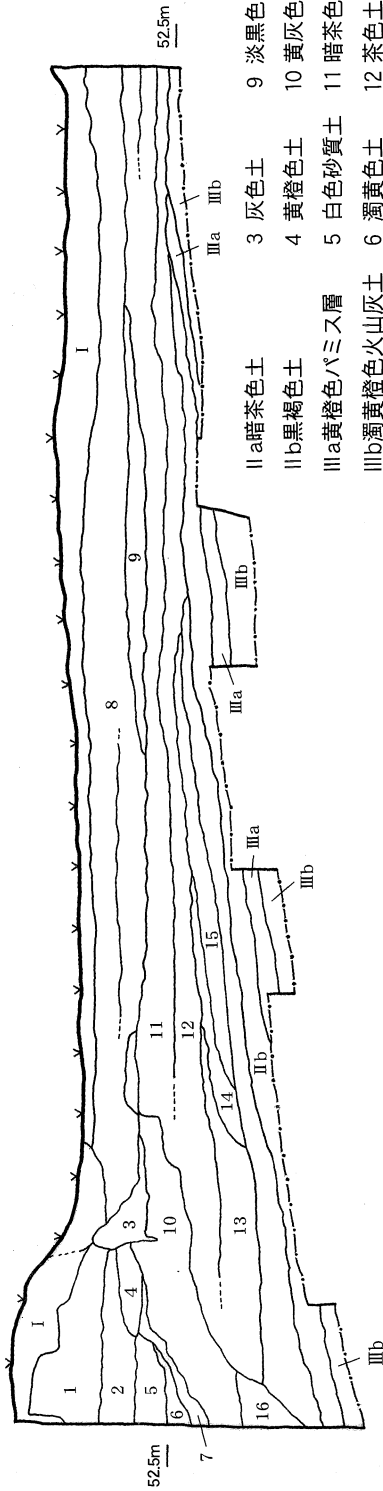
4 Tの調査を補強するため、4 Tの北側で土塁の残存が比較的良好な部分に約2×5mで設定した。土塁頂部で標高約54.1m、裾部分で53mである。4 Tと同様に、アカホヤ火山灰土までを造成した後に盛土を行い、ある程度の平坦面を確保した上に盛土塁が築かれている。土塁には白色シラスが多く用いられているが、4 Tトレンチに比べて盛土の層が薄く、丁寧な築造した印象を受ける。本来の地形は4 Tと同様に東から西に傾斜しているが、4 Tよりもやや緩やかな傾斜であったと推測される。

3T



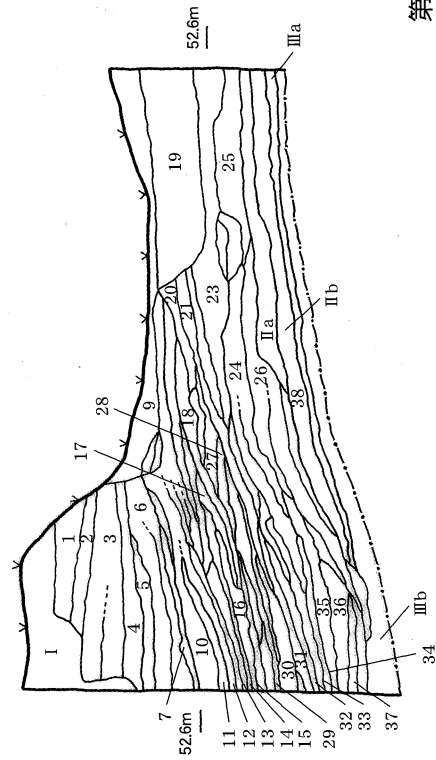
- 1 灰色砂質土
- 2 灰色土
- 3 茶色土
- 4 灰色砂質土 + 白色パミス
- 5 黒色土 + 橙色火山灰土
- 6 橙色火山灰土 + 黒色土

4T



- 1 白色砂質土
- 2 乳白色砂質土
- 3 灰色土
- 4 黄褐色土
- 5 白色砂質土
- 6 濁黄色土
- 7 白色砂質土
- 8 茶色土(中ほどに硬化部あり)
- 9 淡黒色土
- 10 黄灰色砂質土
- 11 暗茶色土
- 12 茶色土
- 13 茶灰色土
- 14 灰褐色土
- 15 明茶色土
- 16 灰白色砂質土

5T



- 1 茶色土
- 2 乳白色砂質土
- 3 白色砂質土
- 4 灰白色砂質土
- 5 白色砂質土
- 6 灰白色砂質土
- 7 茶色土 + 灰白色土
- 8 白色砂質土
- 9 灰白色土(やや硬化)
- 10 白色砂質土 + 茶色土
- 11 茶色土
- 12 茶灰色土
- 13 白色砂質土
- 14 灰白色砂質土
- 15 白色砂質土
- 16 灰白色砂質土
- 17 白色砂質土
- 18 茶色土 + 白色砂質土
- 19 灰白色土 + 白色砂質土
- 20 茶色土 + 白色砂質土
- 21 明茶色土 + 白色砂質土
- 22 淡灰色
- 23 濁橙色土 + 茶色土
- 24 淡黒色土
- 25 灰茶色土
- 26 暗茶色土
- 27 白色土 + 茶色土
- 28 白色砂質土
- 29 白色砂質土
- 30 乳白色砂質土
- 31 濁灰色砂質土
- 32 灰色土 + 橙色土
- 33 濁橙色土
- 34 濁橙色土
- 35 淡灰茶色土
- 36 濁橙色土
- 37 灰色土
- 38 淡茶色土

第45図 新城跡 3 ~ 5 T断面図



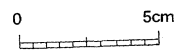
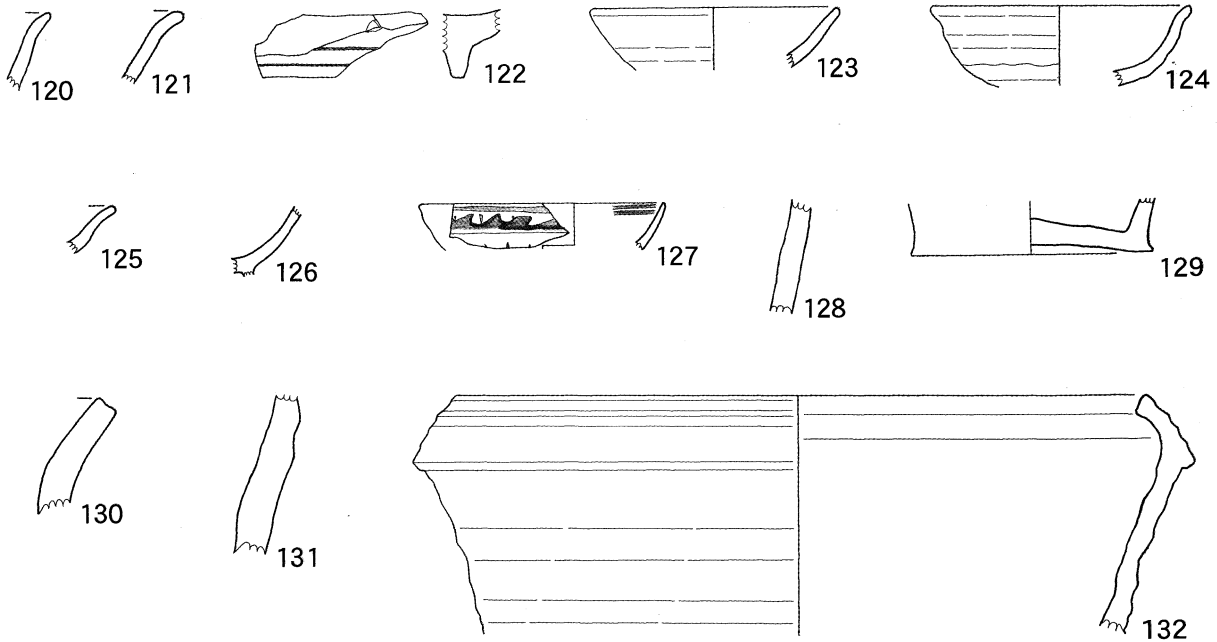
第2節 遺物

120～122は青磁の碗である。120・121は端反の口縁部で、121の方がやや焼成が良い。121は底部破片で器壁は厚く、畳付も施釉されている。

123～125は白磁である。123は内湾気味の口縁部を持つ皿で、外面に稜線が確認される。124は小碗あるいは小皿である。内湾して立ち上がり口縁部で若干外反する。欠損しているが、外面体部下半は露胎と思われる。焼成はあまり良くない。125は皿の口縁部である。外反する口縁部を有し、外面には稜線が認められる。

126・127は染付である。126は碗あるいは皿の底部で外面に渦文が描かれる。127は内湾気味に立ち上がる碗の口縁部であり、外面には波濤文が描かれている。文様は粗雑で発色はあまり良くない。

128～132は陶器である。128は1 Tの土塁内より出土したもので、壺あるいは甕の胴部と思われる。内外面に褐釉がかけられ、内面には輪積みによるものか、緩やかな段が認められる。129は焼きしめ壺の底部で、ベトナム産の可能性はある。130も壺あるいは甕の口縁部と思われるが、詳細は不明である。内外面とも無釉で生産地は不明で九州の在地系陶器とも思われるが、あるいは亀山焼の可能性はある。131は渥美焼の壺あるいは甕の胴部と思われ、内外面とも施釉されている。132は5 Tの土塁内より出土したもので、備前焼の播鉢である。くの字状に内傾する口縁部を有する。



第46図 新城跡出土遺物実測図

第3節 まとめ

新城跡の出土遺物からみた年代は、おおむね14世紀後半から17世紀ととらえられる。築城順では、松尾城に続いて内城、その後に高城及び新城が築かれたとされるが、遺物から見る限りでは、松尾城跡及び内城跡の遺物と時期的な差はほとんどなく、高城跡と比べてもその前後関係を明らかにする資料はない。

出土遺物の中では国産陶器に若干の多様性がみられる。小破片を観察したところでは、備前焼の壺あるいは甕、播鉢が多くみられるなかで、他の地域の陶器がごく少数ではあるものの混在している。

新城の中心となる曲輪部分は失われており、その築城の様子を知ることは不可能であるが、土塁の盛土に見られるように、台地を削平して出たシラスを有効に活用したであろうことが推測される。北側の土塁では盛土を築造する際に手前側を掘り下げる手法が確認され、南西の土塁では緩傾斜の斜面に盛土を築く際にはある程度の造成を行った後、土塁が築かれている。この2点は内城跡においても確認された手法である。

図	番号	T	種別	器種	部位	口径cm	底径cm	生産地	年代	備考
第 46 図	120	4	青磁	碗	口縁部			中国(龍泉窯)	14c後~15c前	端反碗
	121	4	青磁	碗	口縁部			中国(龍泉窯)	14c後~15c中	端反碗
	122	4	青磁	碗	底部~高台			中国(龍泉窯)	14c後~15c中	
	123	4	白磁	皿	口縁~体部	9.3		中国	16c頃?	小皿
	124	4	白磁	皿・碗	口縁~体部	9.2		中国	15c~16c代	小皿・小碗
	125	4	白磁	皿	口縁部			中国(福建広東)	明代?	
	126	4	染付	碗・皿	体~底部			中国(福建南部)	16c後~17c前	渦文
	127	1	染付	碗	口縁~体部	9.6		中国(景德鎮窯)	15c末~16c前	波濤文
	128	1	陶器	壺・甕	胴部			中国?	明代	褐釉 土塁内出土
	129	4	陶器	壺	底部		8.8	ベトナム?	16c~17c	焼き締め壺 灰釉
	130	5	陶器	壺?甕?	口縁部			産地不明	鎌倉?	在地系? 亀山焼?
	131	4	陶器	壺・甕	胴部			渥美	14c以前	鎌倉時代
132	5	陶器	播鉢	口縁~胴部	25.4		備前	16c頃	土塁内出土	

第8表 新城跡出土遺物一覧

第Ⅶ章 総括

・遺物の年代

青磁は中国製がほとんどを占める。器形は碗及び皿がほとんどであるが、小壺と思われる小片等も確認された。龍泉窯系が多く、福建・広東省のような中国南部と称される地域の製品も確認される。その年代は14世紀後半～16世紀代を中心とする。

白磁及び染付は中国製がほとんどを占める。碗及び皿が多いが、袋物とした瓶等の器形も確認された。その年代は15～16世紀代を中心とするが、16世紀後半から17世紀代に渡るものも複数確認された。

海外産陶器は中国産が多く、単に中国産としたもののほか、福建広東省の製品をはじめ、中国南部と総称される地域から東南アジアにかけての陶器が確認された。産地が判明したのものとしては、タイ産陶器が複数確認されている。海外産陶器の年代は14～16世紀に渡る可能性があり、おおむね明代としてとらえられる。

国産陶器は備前焼が多く、ほとんどを占める。渥美焼や楽焼等もごく少量確認されるほか、産地不明のものも多い。その年代はおおむね15～16世紀代を中心とすると思われるが、不詳なものも多く、幅を持たせて室町時代あるいは中世としたものもある。

土師器は15～16世紀代を中心とし、糸切底とヘラ切底の製品が混在する。内城跡矢倉場では9世紀代と考えられる土師器が確認されたが、これらは志布志城以前に存在した古代の遺跡を、志布志城の使用時期に破壊したものと考えられる。矢倉場で確認された縄文時代の遺物についても、同様の理由によると考えられる。

・遺物から見た志布志城の時期

志布志城跡の出土遺物の年代は、14世紀から16世紀までを中心として、おおきなまとまりを見せる。築城順としては松尾城が最初に築かれ、次いで内城が築かれた後、高城と新城が築かれたとされているが、遺物の年代を見る限りでは4城の年代に大差は見られない。

遺物の上限が14世紀代、おおむね14世紀後半にそろふことから、志布志城の4城がそろって利用され始めたのは14世紀後半頃と推測される。

これに対して、「建武3年(1336)重久篤兼、救仁院志布志城の肝付兼重を責め落とす」(注1)「貞和4年(1348)この頃、楡井頼仲志布志松尾城に(中略)兵を挙げる」(注2)とする資料が存在し、松尾城の築城は14世紀中葉以前にさかのぼる可能性があるが、遺物のまとまりからみて志布志城が活発に利用されたのは14～16世紀代と考えられる。また、志布志城の終末としては、16世紀末に島津氏が志布志周辺を含めた大隅一帯を平定(注3)したことをうけ、山城としての意義を失って利用されなくなると考えられるが、これは遺物年代の下限がおおむね16世紀中葉ないし後半にまとまること合致する。

一方で、14～16世紀代のまとまりから外れる資料も少量ながら確認されており、14世紀以前の年代を推定される遺物が、松尾城及び内城の築城年代を示唆するとも考えられるが、伝世品の可能性も考慮する必要もあり、計画されている内城跡の全面調査による資料の増加を待ちたい。

これらのことから、遺物から見た志布志城の年代としては、4城が並行して利用された期間が14世紀後半～16世紀末まで続くと考えたい。そうした場合、14世紀後半頃には高城及び新

城が築かれ、志布志城全域の整備拡張が行われた可能性が強い。松尾城及び内城の築城年代については、14世紀中頃以前にさかのぼる可能性があるものの、それを裏付けるに足りる資料は確認されていない。これについても、今後の調査による資料の増加を待ちたい。

・遺物の産地と交易の可能性

出土遺物のうち、青磁及び白磁は中国産のものがほとんどであるが、景德鎮窯系及び龍泉窯系の製品が多数を占める中で、漳州窯系や福建広東省地域の製品、中国南部と総称される生産地の製品も確認されている。陶器についても中国南部と総称される東南アジア色の強い遺物が多数確認されている。タイ産陶器のように、産地が判明している例もあり、中国から東南アジアにかけての比較的広い範囲の製品が流入していると考えられる。また、九州各地で見られる一般的な貿易陶磁とは若干異なるマイナーな製品と思われる例が見られ、中国南部方面に対して独自の交易ルートを持っていた可能性も示唆される(注4)。

・築城の手法と改変

志布志城は河岸段丘であるシラス台地に築かれ、曲輪の作成については、傾斜地を削平して平坦面を確保している。山城の築城については、削平する一方で削り残した傾斜地に盛土を行うことで更なる平面を確保する場合があるが、今回の調査では、明らかに傾斜地に盛土を行って平坦面を確保したような部分はみられなかった(注5)。

土塁の築造方法として、傾斜地に盛土塁を築く際、単純に土塁を築くのではなく、ある程度の盛土を行って築城面を調整した後に、盛土塁を築く手法が確認されている(注6)。

一方で土塁を築く際に土塁基部の手前側をV字状に掘り込み、溝状を呈する手法がみられる。切土塁、盛土類の両方でみられる(注7)が、盛土塁においては、土塁の崩壊を防ぎ強固な土塁とするための工法と考えられるが、盛土を行わない切土塁ではこれと異なり、曲輪の排水等を目的とした溝状の施設の可能性も考慮される。しかしながら、土塁築造時に明確な意図を持って掘り込んでいることから、同様の築造の手法としてとらえられる。

注1 『志布志町誌 上巻』志布志町教育委員会 1972

注2 『大崎町史』大崎町教育委員会 1941/1975

注3 天正5年(1577)、鎌田近政が島津氏の地頭として志布志に入る。

注4 佐賀県立九州陶磁文化館 副館長 大橋康二氏のご教授による。

注5 内城跡3 T南端部等で、その可能性はみられるものの、明確ではない。

注6 高城跡4 T及び5 Tで顕著に確認されたほか、内城跡5 T等でも可能性がみられる。

注7 切土塁では、内城跡17 Tで顕著である。

盛土塁では、内城跡20 T、高城跡4 T、新城跡1 T等で顕著に確認された。

参考文献

- 『伊作城跡』吹上町教育委員会 2003
『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004
『上ノ城跡』加世田市教育委員会 1980
『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002
『亀丸城跡(伊作城本丸跡)』吹上町教育委員会 1999
『桑幡氏館跡-第3次調査-』隼人町教育委員会 2003
『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府市教育委員会 2000
『知覧城跡』知覧町教育委員会 1992
『知覧城跡(二)』知覧町教育委員会 1994
『油須木城跡』郡山町教育委員会 2004
『横川城跡』横河町教育委員会 1987
『留守氏館跡』隼人町教育委員会 隼人町遺跡調査会 2001
『明代前半期陶磁瓷器の研究-首里城京の内SK01出土品-』亀井明德 2002
- 上田秀夫「14~16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 1982
小野正敏「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982
重久淳一「鹿児島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁器」『シンポジウム 陶磁器が語る交流-九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器-』東南アジア考古学会 2004
森田 勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982
- 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995
『日本陶磁全集10 備前』中央公論社 1977
- 『志布志町郷土史年表』志布志町教育委員会
『志布志町誌 上巻』志布志町教育委員会 1972
『志布志新城跡』志布志町教育委員会 1992

第Ⅷ章 志布志城の縄張

鹿児島国際大学生涯学習センター長 三木 靖

日向国志布志内城は、現在の鹿児島県曾於郡志布志町の前川の河口付近の右岸に沿うシラスの丘陵の端に存在していた。当城は、周辺の西から南にかけて存在する松尾城、高城、新城等の山城と併せて志布志城と総称されており、特に松尾城とは、一対になるものとして位置付けられる側面もあるが、島津藩政後期に編纂された「要用集」(『薩藩政要録』として鹿児島県史料刊行会より刊行されている。)中、島津家の「御元祖以来御居城之事」の項に「諸県郡 志布志 内城 右城地、氏久公御居城二而候」と記載されている通り、かなり古くより、独立した中世の城とみなされてきたし、既に明らかにされている当地域の歴史に照らしても、また立地状況を観察しても、独立した中世の城として位置付けられる側面があることは明白である。そこで当城をひとつの独立した中世の城としてみて、中世山城の価値を端的に示す縄張に関する検討を行なうこととする。

第1節 立地状況

縄張の検討の前提として立地状況を明らかにしておきたい。当城は鰐塚山地を構成する御在所嶽から南西に延びる丘陵の河口に臨む端に位置している。この丘陵は山地が前川と沢目記川により浸食されて形成されたもので、北東から南西に向かって伸びている。河川に浸食された面は急な崖となり、先端に行くに従い丘陵の幅が狭くなり、南西の先端部は半円状になって終わっている。丘陵の最上段は、先端を少し南に傾けたふたつの辺によってかたどられていて、この部分を上空から見ると鳥の嘴状になっている。

この丘陵の最上段の幅は先端より110m程の所で70m程、220m程の所で100m程と広がり、先端から550m程遡った所で160m程になる。これから北東の方は山地に続いており、当然のことながら幅はますます広がって行く。

この先端から550m程遡った所で、以上で述べてきた丘陵部分と北東の山地の部分との間に凹地ができています。この凹地は丘陵最上段に、丘陵の尾根筋に対して直角に存在しており、その底幅は10mを遥かに越えるほど広く、丘陵の斜面を先端部の方に曲がりながら降りている。この凹地は以上で述べてきた丘陵部分と北東の山地の部分とを切断する役割を果たしている。この南東から北西へと続く凹地の線は、既に述べた南西を先端とする二辺と結んで三角形を形成しているとみることができる。丘陵の先端部からこの凹地までの間の三角形が、志布志内城の山城地域である。

しかし丘陵の最下部即ち平地とつながる所でみると先端より100m程の所で幅200m以上になり、先端より550m程の凹地の所でも幅220～30m程であり、丘陵の最上段の場合の様に三角形を形成しているとみるよりも、先端部は半円状であるが、南西より北東への450m程の間は、幅200m程で続いている。即ち長方形になっているのである。

この様に当城は丘陵に存在しており、その最上段と、平地につながる最下段とでは形が異なっているのである。

山城では形と広さと高さが重要な要素である。多くの場合その最上段には手を加えるものであるから、形、広さ、高さいずれも、もとの自然のままとは言い難い。当城でも丘陵の最上段は、平坦な面を広げるために、手を加え造成されて当城の主要な曲輪となっている。従って広さとともに高さも調整されていると思われるが、高さについてはもとの高さが尊重されていると考えられるので、ここでは丘陵の最上段の高さを標高でみておきたい。

この丘陵の最上段の標高は先端の曲輪で21m台、その北側で先端より100mの所で48m台、先端より140mの所から550mまでの所で53m台となっている。丘陵先端付近の平地は現在町立志布志小学校となっており、その校舎の建っている場所が標高7m台、先端より550mの凹地のあたりの平地が前川側で5m台、沢目記川側で12m台であるから、比高は先端部で14m台、先端より550mの凹地のあたりで41～48m台になる。実際の高さでも、平地との差でも先端部が低く、先端より遠ざかり凹地に近づくと高くなっている。凹地から北東の山地寄りの部分は更になだらかに高くなっている。いずれにせよこの丘陵は山地から丘陵先端部にかけて徐々に低くなっており、先端になると急に角度が付いて下がっている。先端は10m以上の崖となっている。なお最上段の平坦な面は、曲輪毎に北東側が高く南西側が低くなっており、その標高差は4mから9mである。これは丘陵の北東の側の斜面が急であるのに対し、南西側がなだらかな斜面になっていたためである。

以上の検討からは最上段にある曲輪面の高さも丘陵の先端部が低く、先端より遠ざかる程高くなると予測されるが、前川を挟んだ当城の東側の台地から、当城をみると明確に分かる通り、実際には先端部と凹地の所との中間辺りがそれほど差にはなっていないが、最も高くなっている。そこでこの理由を探るために更に曲輪毎に検討することにしよう。

第2節 構成要素

日向国志布志内城縄張図は本来は縄張跡図とすべきもので、現状より確認できる当城の山城地域の曲輪、空堀、土塁、櫓台、土居等の構成要素を図示したものであり、概略南西から北東の順に記号を付けてある。

曲輪とは既に述べた通り造成された平坦面で合戦に対する機能を持つものである。その曲輪は周囲が切岸である即ち全面が下りの崖になっていて独立的なものと、そうでないものがある。前者が主な曲輪であり、その城にとって重要な役割を担っており、後者が副次的な曲輪で主要な曲輪を守り、それらの連絡等の役割を担っていた。当縄張図では主要な曲輪に算用数字をあて丘陵の先端から順に1より6までの番号を付けた。この曲輪はいずれも上下2段に分かれているので、上段、下段と区別する。また副次的な曲輪にも算用数字をあて丘陵先端の南西側から順に7より9までを付け、丘陵先端の南東側から順に10より14までを付けた。なお南東側も南西側も平地付近は、現在宅地となっており、かつての状況とは異なっていると判断されるが、中世には副次的な曲輪となっていたのではないかと思われるものが南東側に5か所、南西側に3か所ある。

空堀とは堀ではあるが水堀ではないという意味であり、城域を周囲から切断したり、曲輪間

を切り離したりするために地面に掘り込んだもので、長さ、幅、深さ、形とも多様であった。いずれも城や曲輪の防衛、出入り、連絡、あるいは乗馬、武術の訓練等の場所としての役割を担った。当縄張図では空堀に算用数字をあて南東から順に曲輪1、北西の端から北東へ続くものに2、南西から丘陵を登るものに3、その東側に南東から北西へと続くものに4、以下4の北東に並行するものに5より7までの番号を付けた。ちなみにここまでの記述中凹地と表現してきたのは、空堀7のことである。

土塁とは曲輪の周囲に設けられた土盛で、曲輪内を守るのが主な役割である。当縄張図では曲輪2、3、4、5、6や曲輪11上段の周囲に断続的にみられ、実線で細長く囲まれ周囲にケバが書かれているものである。櫓台とは櫓という建物が置かれたと思われる幅や高さが相当にある土盛のことである。ちなみに櫓とは見張り、連絡、時には攻撃の足場の役割を担った高樓のことである。当城では櫓台は曲輪の周囲に設けられていた。当縄張図では櫓台にアルファベットをあて南東から順にaよりcまでの番号を付けた。

土居とは城域を外部から守るために設けられた土盛のことで、目隠しや塀に相当する役割を担った。当縄張図では土居にアルファベットをあて南東側の南寄りから順にaよりc、南西側の南寄りから順にdよりfまでを付けた。尚、曲輪の場合と同様にかつての状況とは全く異なった姿を示していると判断されるものや、中世にも現状に近い姿をしていたと思われるので完成された土居とは言えないが、土居的なものとして使用されたり、土居として位置付けられていたものが南東側に3か所、南西側に4か所ある。

以上が当縄張図に書き込まれている主なものであるが、その他山城の周囲を破線で示し、山城と関連があったと思われる館即ち屋敷の所在地を示し、野首として丘陵尾根続きの城域外の存在地域である山地を示し、城の大手口、搦手口をそれぞれa、bと示してある。

第3節 『志布志記』等との関連

当縄張図と当城について近世藩政期の史料で最も詳しい『志布志記』の対応関係を示しておこう。志布志記の「古城」とは志布志内城縄張図の曲輪1より6までを、「内城」とは曲輪1、2、3を、「中野久尾」とは曲輪4、5を、「大野久尾」とは曲輪6をそれぞれ言っている。「外の囲」とは土居、中でも土居d、e、fを、「矢倉ノ場」とは曲輪1を、「矢倉ノ場の下に島津氏久屋敷が存在した」というのは館bと書いてある部分を、また「内城の中五、六反程の広さの平地に島津氏久屋敷が存在した」というのは曲輪3上段に存在したことを、「沢目記口」とは土居eと土居fの間の城周囲付近を、「小淵口」や「小淵口城戸」とは曲輪13の南東の曲輪付近を、「三宝(院)荒神の社」とは曲輪3上段の櫓台bにあることを、「留城戸」とは曲輪10下段と曲輪11下段との間の城周囲付近を、「隠井戸」とは曲輪10下段の東側の直下付近を、「矢倉場上の愛宕社」とは曲輪1付近を、それぞれ意味している。

また志布志内城の本格的な縄張と志布志城跡鳥瞰図を作成した田野辺道宏氏(「鹿児島県に於ける中世城郭の一考察」)に代表される、「当城には本丸という曲輪があった」という際の本丸とは曲輪3を指している。なお関連して志布志町帖6241番地で、昭和42年8月26日から9月4日

にかけ小淵遺跡を発掘した際、幅1.5m程の石段十数段が出土し中世の道と推定されたのは曲輪10下段付近になる。

第4節 曲輪の位置

さて曲輪についての検討をまずその高さを、標高をみることから始める。以下曲輪毎に数字を示すが、その数値は「志布志内城跡地平面図」(志布志町作成)による標高で、単位はm(m以下切捨ての概数)である。

曲輪1 上段21・下段21、曲輪2 上段45・下段37、曲輪3 上段53・下段48、

曲輪4 上段53・下段49、曲輪5 上段53・下段45、曲輪6 上段53・下段49

以上主要な曲輪の上段の高さは曲輪2は1の倍になる程差があるが、2と3とではそれ程の差がなく、その後6までほぼ同じ高さである。ところが、以上の各曲輪には土塁か櫓台かが付いていた。

曲輪の高さと同様に、曲輪毎の上段の土塁か櫓台の標高を数字で示す。その数値の単位はm(m以下切捨ての概数)である。

曲輪1 上段24、 曲輪2 上段46、 曲輪3 上段58、 曲輪4 上段55、

曲輪5 上段55、 曲輪6 上段54

以上曲輪それ自体の高さに大きな差のある曲輪1と2、2と3との間には、土塁等の高さにもほぼ同じ差があるが、曲輪自体はほぼ同じ高さの3より6においては土塁等の高さは若干差があり、曲輪3のそれが一番高く、次いで4と5が同一で3より3m低く、更に6は4より1m低い。即ち村田修三氏が指摘する通り、曲輪3より6まではほぼ同一の標高であるが、樹木の茂った志布志内城地域を望遠すると曲輪3付近が一番高く、曲輪6付近が空堀7とともに低く見えるのである。

なおその他の曲輪の標高を同様な数値で示すこととする。

曲輪7 上段 20～21、 曲輪8 13、 曲輪9 上段 37、 曲輪9 中段 29、

曲輪10 上段 21～24、 曲輪10 下段 15～19、 曲輪11 上段 30、 曲輪11 下段 22、

曲輪13 29、 曲輪14 中段 a 20、 曲輪14 中段 b 33

以上副次的な曲輪の標高は13m台より37m台まであり、10m台が3つ、20m台が9つ、30m台が3つで20m台が多く、主要な曲輪に比べ全体としては低い場所にある。

次に曲輪の広さをみるために、曲輪毎にその広さを数値で示すが、その数値の単位は m^2 (概数)である。

曲輪1 約1100、 曲輪2 約1500、 曲輪3 約3000、 曲輪4 約2400、

曲輪5 約4500、 曲輪6(南西)約3900、 曲輪6(北東)約4000

以上主要な曲輪の広さは1100 m^2 より4500 m^2 までとかなり広狭の差がある。即ち曲輪1と2が狭く、3と4がその2倍に近く、5、6は更にその5割増して広がっており、5、6南西及び北東は大体同じ広さである。なお、その他の曲輪は最小で400 m^2 程度、最大で1300 m^2 程度で大半が1000 m^2 以下である。

この様に主要な曲輪は1と2とが位置も低く、狭いが、3より6は似たり寄ったりで、極め

て目立つ存在なのである。

縄張図でこの主要な曲輪の形をみると1より3が南北方向沿いに長いのに対し、4より6は東西方向沿いに長くなっていることが分かる。またその形は大略長方形的であるが、3のみ鍵型になっている。

第5節 土塁と櫓台

曲輪を囲む土塁や櫓台をみると曲輪1は上段の東側に櫓台があり、2の上段下段の東から北西は、かなり長いが高さはそれ程でない土塁で囲まれている。3は上段の東から北西にかけては、北側が幅が広くかつ高さがある土塁で囲まれている。この北の部分は、当城域最大規模の土盛で、土塁に連続している櫓台とみなされている。前述の通りこの部分は当城域で最高地点となっており、この通り規模が大きいため北側に大きく湾曲している。3の下段の東より南西にかけてはほんの僅かではあるが、その周囲が高くなっており土塁の痕跡の様に見える。4は土塁等が少ない曲輪であるが、上段の西端角には高さ2m弱、幅2m、長さ6m程の土盛がある。土塁的なものの痕跡であろう。

曲輪5の上段の北角には広い土盛があり、櫓台と思われる。一番広いところでは幅10m程、高さは3m程になる。これは北東と北西に伸びて土塁となり、北東側は徐々に小さくなって消滅しているが、北西側は、その北西端まで幅2.5m程、高さ1m程で続いている。下段は上段につながる辺を除き3面とも土塁で囲まれている。特に北角は上段の北角よりも幅の広い土盛があるが、これは土塁であろう。6(南西)は上段の北から西、そして南の角まで2面にわたり高さ0.5m程、幅2m程の土塁が囲んでいる。下段は北の部分が0.5m程高くなっているが、土盛には当たらない。北西には通路を囲む様に長さ10m幅2m高さ0.5m程の土塁がある。6(北東)の上段は東から北そして西へと曲輪の半周を土塁が囲んでいる。幅1m、高さ1m弱で長さは70mになる。下段には東北側に上段に続く土盛状の土盛が25m程みられる。その他の曲輪で11上段にのみ土居bにつながる北西側を除く3面の周囲の内、南から東側を北までが少し高くなっており、特に東北側ははっきりして、幅も2m程になっている。南西側は西寄りに土盛の痕跡がみられる。

この様に主要な曲輪は土塁か櫓台かで周囲を囲まれている部分が多く、曲輪2、3、5、6にみられる通り、北東側に対するものが他の面に対するものよりも優越している。なお1の北西側は土盛があったが、崩壊した可能性がある。その他の曲輪にはほとんど土盛はないが、11上段にのみ南から東、そして北には土盛があり、土塁であったと思われる。なおこの11上段の南西側は土盛があったが、崩壊した可能性がある。

以上を総合すると主要な曲輪の中で1、2、3がⅠ群をなし、4、5がⅡ群をなし、6がⅢ群をなしているとまとめることができよう。

第6節 虎口

虎口を曲輪毎にみていくと、これもまた主要な曲輪にあるものが当城の虎口の主となるものであるから曲輪1より順に取り上げ、いずれも外から曲輪内に入る場合を想定して叙述するこ

とにする。曲輪1の場合、現在は大手口bより曲輪1の北へ廻り込み、下段を経て上段の坂虎口へ至り上段の北東側から平坦面に出るが、この曲輪1の南寄りの付近は近世以後かなり改変されたと思われ、かつては大手口aから北に廻る通路が下段の中を通り上段の坂虎口に至っていたとも考えられる。下段は上段の榊形に相当する。

曲輪2の場合、現在は空堀3から下段の北側土塁を乗り越えて入ることが多いが、これは旧態とは言えない。かつては空堀3から上段の西側斜面を南向きに登り上段の西側南寄りから平坦面に出るか、空堀3から南西に折れ下段の西側斜面を南東に向いて登り西側から下段の平坦面に出たと考えられる。更に空堀1の現状から空堀1から北を向いて曲輪2の下段の斜面を登り、下段の北側から平坦面に出て、そのまま北東に登り上段の南側から平坦面に出ることも考えられる。

曲輪3の場合、空堀3から南西に折れ下段の南東側から平坦面に出ることと、空堀3から上段の南側の二重に折れた坂虎口を経て南西方向から上段の南東から平坦面に出ることがあった。

曲輪4の場合、空堀4から下段の西側の崖下から南東へ向かって斜面を登り、坂虎口を下段に登り詰めた所で半円を描いて南西に向いて、下段の南西側から平坦面に出る通路があった。この通路の南東側には下段から土塁状の張出しがあり、袖を差し出す格好で登りの通路を護っている。上段には下段から入ったともみられるが、上段下段の西側斜面は大きく崩壊しており、旧態ははっきりしない。それにしても下段の虎口はかつては嚴重な構えであったことは確かである。

曲輪5の場合、空堀5から曲輪5の上段に入る坂虎口と、下段へ入る坂虎口とがある。上段へは空堀5から上段の南西斜面を西から東に向いて登り、上段にさしかかった所で半円状に廻り北西に向いて登り上段の南西寄りの辺で北西に向いて平坦面に出る。現在は大幅に拡幅されており、虎口は旧態を失なっている。曲輪5の下段へは空堀5から下段の南西斜面を西に膨らみながら北東に向いて2度折れながら登り、5の下段に入るところで坂虎口となり半円状に廻り北西に向いて登り5の下段の南角の辺に北西に向いて平坦面に出る。この通路の南東側には5の下段から長い土塁状の張出しがあり、曲輪4の下段の場合と同様に袖を差し出す格好で登りの通路を護っている。この付近の斜面の崩壊もひどいが、5の下段の虎口の構えがかつて極めて嚴重であったことが今でもみてとれる。

曲輪6の場合、空堀6から下段の南西側の斜面を登り下段へ入る虎口があった。下段へは空堀6から斜面を北に向いて登り上段の崖に当たって北東に大きく曲がり、下段に入るところで虎口になり下段の北西の部分で北東に向いて平坦面に出る。この虎口も土塁で固められているし、途中の斜面を北に向かう登り道も上段につながる土塁状の崖の張出しで護られている。この部分も嚴重な構えとなっている。空堀2から曲輪6の上段へ西側から入る通路があるけれども、これは旧態を全く失っていると思われる。ただ6の下段への登り口は下段の西側であったことだけは確実である。

この様に主要な曲輪の虎口は曲輪1と6の上段以外はそれぞれの曲輪の西側にあり、3、4、5では西側の南寄りにあり、かつ袖状の防衛的な土塁的施設を伴っている。1、6の場合は

旧態を失っていることを考慮すると、主要な曲輪の虎口は基本的には曲輪の西側の南寄りにあるものであるということが出来る。1、2の場合に現在の出入り口とは別に南西からの虎口を考へうということも以上と併せて考へておきたい。

なお、その他の曲輪の中、7上段、10上段、10下段、11上段、14中段aには虎口様のものがあるが、いずれも現在又は最近まで人家があり、その通路として使用されたため旧態は明確ではないが、虎口がかつて一度も無かつたとは言切れない。

以上曲輪、土塁と櫓台、虎口に関する検討をまとめると主要な曲輪は3つの群に分けられる。曲輪1、2、3がⅠ群であり、4、5がⅡ群であり、6がⅢ群である。

第7節 土居

土居についてみると空堀1、2の南東側に断続的にaよりcまでであるのが、もとの地形を利用しながら最も土塀状の姿を示して整然と並んでゐる。土居aの南西付近は改変されているが他は旧態を存している。空堀1の北東部は空堀6に沿うように北に向いて土塊状の土盛等が断続してみられる。これは土居cに連続する土居を展開させようという意図を感じさせずにはおかない。曲輪6の南側にのみそれらしいものが見当らないのは、その後の改変の結果と考えられる。

大手口bから空堀3の下方を廻り曲輪3の北西側搦手口bまでの間には、土居の痕跡とみなせるものが点々とあるが、これらをつないで曲輪1、曲輪8、7上段、9上段、9中段の外側即ち西から北にかけて土居を予想しても、現状をもとにすると規模はそれ程大きくはならない。ただし大手口b付近はかなりの改変が予想されているし、当該地域は宅地化されて久しいので、現状から安易な推測をすべきではない。

搦手口aから空堀7に続く空堀2の北西側には土居d、e、fがある。dはかなり整備され、eとfはもとの地形を利用したもので、いずれもその上段に施設を置くことができる広場があり、壮大なものである。ただし3つの土居は一直線にはなっていないし、高低差もあり上段の幅も広狭があり上段を使用するとはいっても限定されたものであった。

各土居の長さ、上段の最大幅、空堀面よりの高さの3項目を数値で示すが、その単位はm(概数)である。

土居a南	50、3、12、	土居a中	30、7、8、	土居a北	50、9、6
土居b	50、4、4、	土居c	40、7、4、	土居d	130、12、10
土居e	70、10、5、	土居f	90、12、6		

土居の総延長は510mで、dが最も長く、上段の幅はaからcは9m以内、dからfは12m以内と後者の幅が広く、高さは標高の低い所で大きくなり、aの大手口b近くで12m、dの曲輪3近くで10mになり、その他は8m以内である。この様に土居が展開しているのは、県内随一である。その土居の中ではdが抜群の規模を誇っている。田野辺氏は早くこの土居dよりfに注目し当城を北西からみる者に対し各曲輪にある土塁に加えてこの土居が二重目の土塁ともなり、空堀造成の際の土砂を集めて築いたとし、更に前川と浸食谷に依存した当城の南東側には土居は無いと主張している。

第8節 空堀

空堀をみると、空堀1より7までとしたが、空堀3は大手口aから空堀1まで、空堀2は搦手口aから空堀7までとしたのは、それぞれ2つとみる必要があるかとも考えており、そうすれば空堀は9と数えることになるが、大手口a付近は改変が激しく、搦手口a付近は崩落のため空堀と確認し難いので保留してある。丘陵を横断するのが3、4、5、6、7で丘陵に並行するのが1、2で、この2本とも土居の内側にあり、7は斜面中の通路である。

各空堀の長さ、最大幅、周囲の曲輪面よりの最大上下差即ち深さの3項目を数値で示すが、その単位はm(概数)である。

空堀1	320、14、25、	空堀2	300、10、26、	空堀3	180、5、28、
空堀4	200、15、17、	空堀5	100、10、15、	空堀6	140、15、21、
空堀7	330、14、12				

空堀は直線に作られているとみなされがちであるが、4、5の様に周囲からの張出しで曲がっているもの、7の様に地形とはかかわりなしに湾曲させているもの、3の様に曲輪の形に応じて曲がっているものがあり、屈曲のないものはない。長さは1が最長で次は2である。これは城域と山地とを切断するため斜面から平地に至るまで続いているからであり、空堀4がそれに次いで長いのも搦手口bまで連続しているためである。幅は地面でみたが、崩落等で狭くなっていると思われるものが多く、周囲にある曲輪の端と端即ち空堀からみれば空堀の上端の幅は4、5、6、7等では最少で20m、最大で55mになり、7は平均しても40mを越えている。1、2等では曲輪と土居との間であるが50mを越えている。深さも曲輪間にある4、5、6は全区間が10m以上であり、曲輪と土居の間の1、5はそれに劣らず深い。空堀3は曲輪3に出た地点で当城域内最大の高低差を示している。

空堀の総延長は1730mになり、空堀1、2は尾根筋に並行し、4、6、7は尾根筋に直角で丘陵を横断しており、いずれも長く、かつ幅と深さも大きい。この様な長大で縦横に組合せを基本とする空堀は県内の中世の城にしばしば見られるものである。

なお大手口a付近と、曲輪6の北東の辺は現在空堀がみられない。また曲輪6については田野辺氏は南東側は侵食谷で、北西からの一定は幅の空堀は作事途中で中止された結果であるとし、村田修三氏(『志布志城』(『図説中世城郭事典三』))は農道で埋没したとしているが、この3つとも後の改変の影響を受けたものとみなしなければならない。

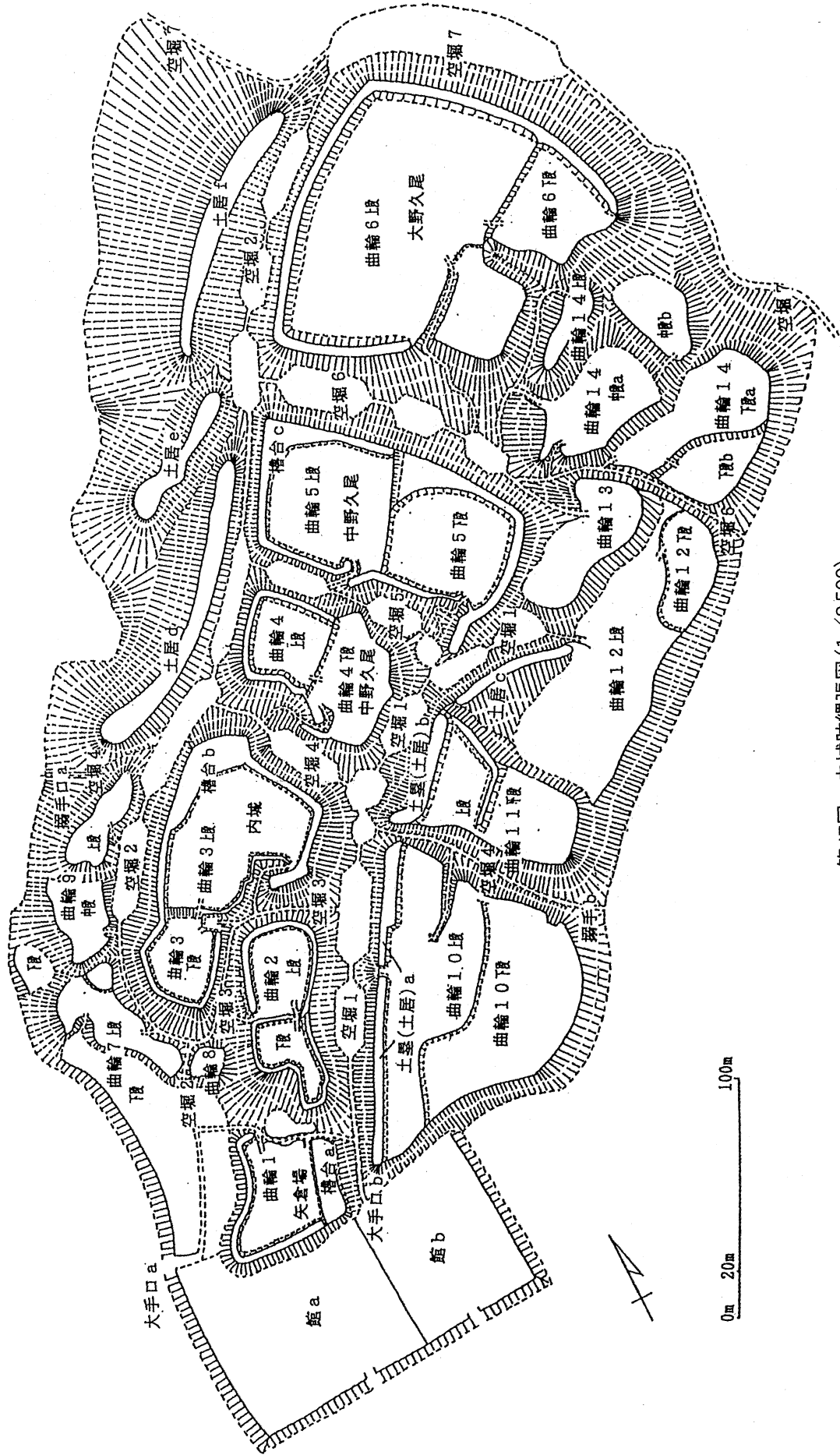
第9節 まとめ

構成要素をみると当城の縄張は整然としたものであったことがうかがえる。これは当城が長期にわたり使用されたことを示している。主要な曲輪が丘陵最上段にあり、それは3群を成し、両側に土居を連続して配置した。まずI群の曲輪を尾根筋沿いに作り、曲輪1、8、7上段、9上段、9中段の外側を結ぶ土居と、土居aを設け、搦手口a、空堀4、搦手口bの空堀を拵え山地と切り離した。このとき大手口bと搦手口bが使用され、櫓台bは山地と北西方面の監視に使用された。これが当城の第1段階である。続いて合戦の激化に対応しII群を尾根筋に直角に造り、土居d、e、b、cを設け、空堀7の北西側、6を拵え山地と切り離した。土居d

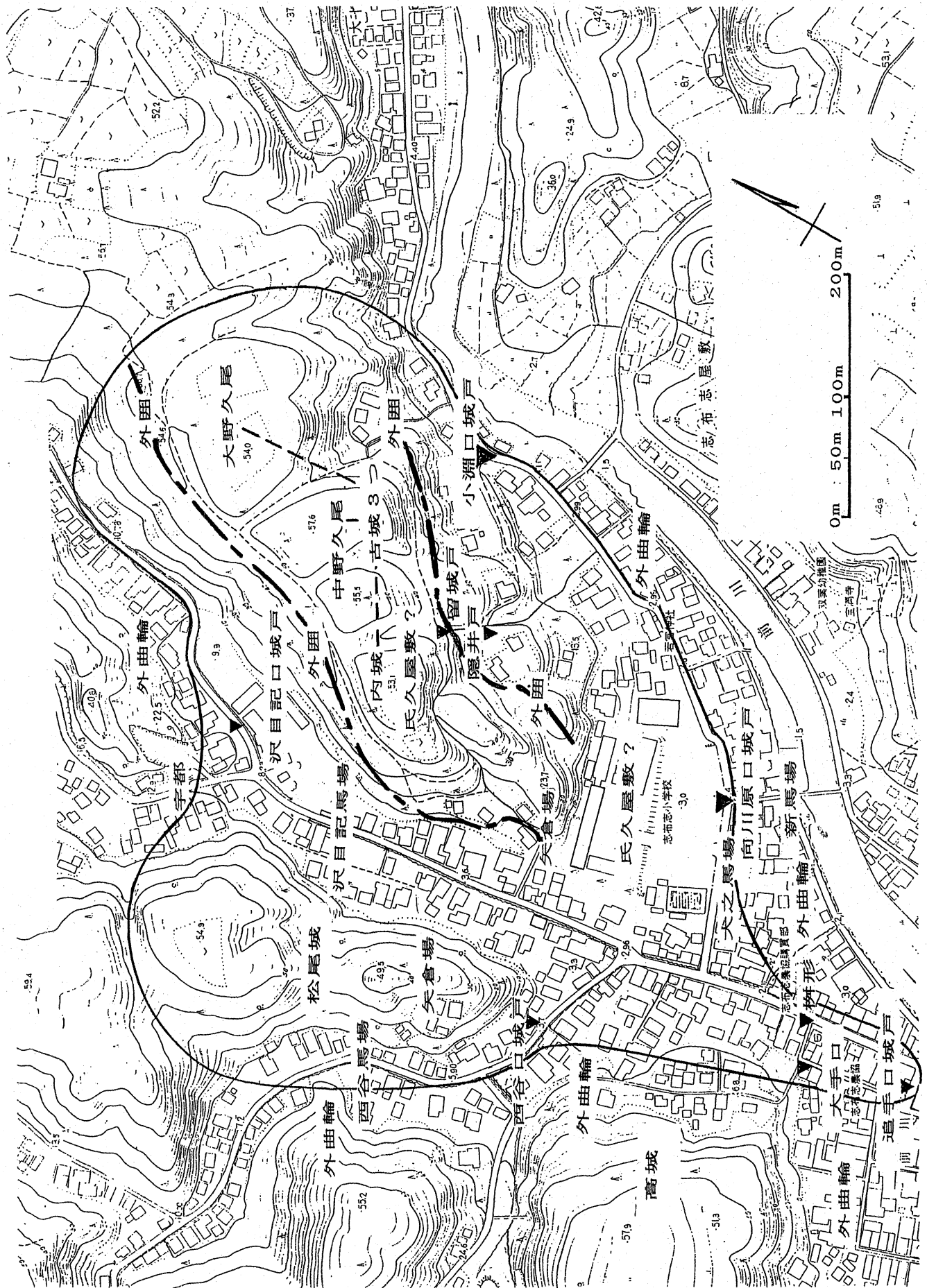
と櫓台cが山地と北西方面の監視に使用され、曲輪4、5の虎口が嚴重に護られており、合戦対策が施されていった。これが当城の第2段階である。更に城域拡大のため土居fの長さをめどに、空堀7を拵え、山地と切り離し、Ⅱ群にⅢ群を付加しようとした。この第3段階は防衛機能よりも、城域の拡張に力を入れ、大手口aと搦手口aが使用され始め、また土居cと曲輪13の間に通路が設けられたりし、遂には土居の外に曲輪を設けたり、土居や空堀を曲輪化することとなった。これは第4段階としてもよいであろう。

当城はシラスの丘陵の端を使用した県内屈指の中世山城で、丘陵先端付近の平地の館(屋敷)と併用された。(拙稿「日向国志布志内城の縄張の研究」(『研究紀要50号』))長期にわたって同一の仕様で構成されたので、縄張に整然とした面が良く残っているが長期に使用されたため、隣の城との間に緊張関係が生じたり、兵火に遭ったり、兵站基地化したり、港管理に力を尽くしたりと変化があり、山城としての縄張は4度の変貌があり複雑になっている面もみられるし、後代の家臣団居住区域の拡大等による改変の影響を受けている。それにしても、広く孤立性の強い、シラス地域に特徴的な曲輪を、空堀と土居とで有機的に結び付け中世山城として質の高いものとした縄張の跡は今も充分に残っており、志布志内城がこの縄張を活かして保存活用されることが期待されている。

日向国志布内城縄張図



第47図 内城跡縄張図(1/2,500)



第48図 『志布志記』の志布志城

写真図版



内城跡 3 T(本丸・曲輪 3 上段) 建物跡 検出



内城跡 3 T(本丸・曲輪 3 上段) 建物跡 礎石



内城跡 4 T(本丸・曲輪 3 上段) 階段状石積



内城跡 5 T(本丸・曲輪 3 上段)



内城跡 6 T(本丸・曲輪 3 下段) 遺構検出



内城跡 7 T(本丸・曲輪 2 上段) 遺構検出



内城跡 8 T(本丸・曲輪 2 下段) 遺構検出



内城跡 9 T(矢倉場・曲輪 1)



内城跡 9 T(矢倉場・曲輪 1) 断面



内城跡 10 T(矢倉場・曲輪 1)

図版 2



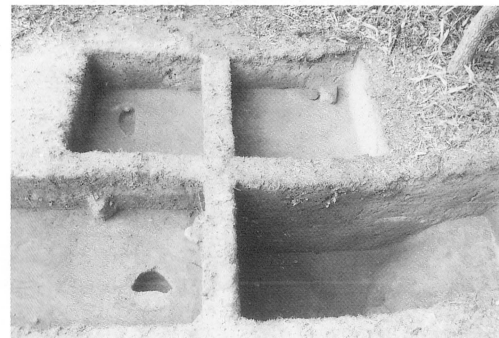
内城跡11T(矢倉場・曲輪1)



内城跡12T(矢倉場・曲輪1)



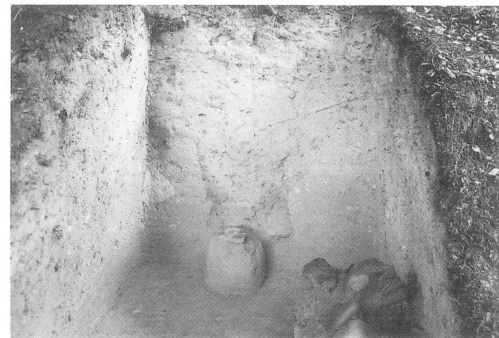
内城跡13T(矢倉場・曲輪1)



内城跡14T(矢倉場・曲輪1)



内城跡15T(矢倉場・曲輪1)



内城跡16T(矢倉場・曲輪1 櫓台 a) 断面



内城跡17T(中野久尾・曲輪5 上段)



内城跡18T(中野久尾・曲輪5 上段)



内城跡19T 虎口(中野久尾・曲輪 5 下段)



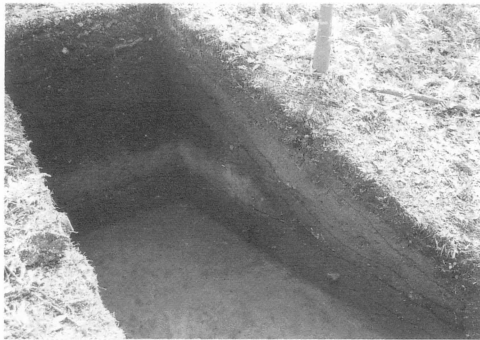
内城跡19T 虎口(中野久尾・曲輪 5 下段)断面



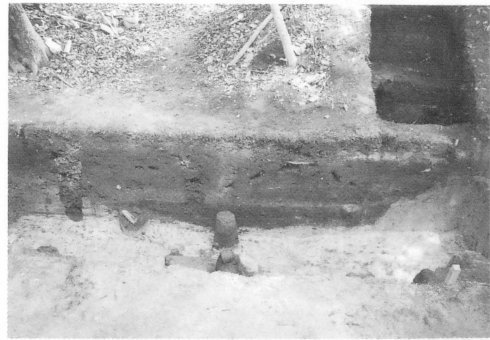
内城跡20T(中野久尾・曲輪 5 下段)土壘断面



内城跡21T (中野久尾・曲輪 6 上段)



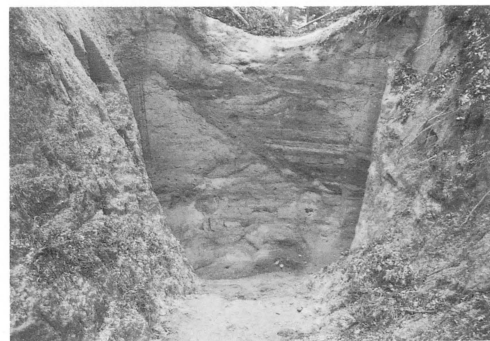
内城跡22T (大野久尾・曲輪 6 下段)土壘断面



内城跡23T (大野久尾・曲輪 6 下段)溝状部断面



内城跡24T (大野久尾・曲輪 6 下段)

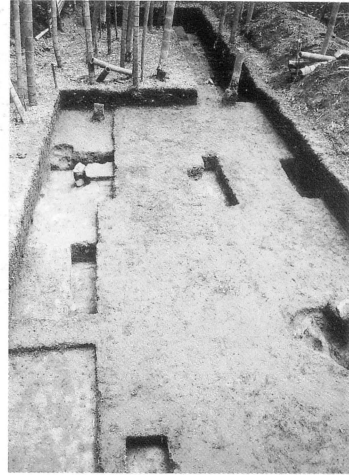


内城跡 空堀(空堀 2 : 土居 d 付近)

図版 4



松尾城跡 1 T (二の丸) 土塁断面



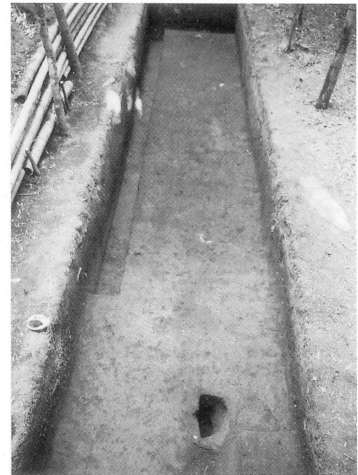
松尾城跡 2 T (三の丸上段)



松尾城跡 3 T (三の丸上段)



松尾城跡 4 T (三の丸下段)



松尾城跡 5 T (三の丸下段)



高城跡 1 T (二の丸) 空堀断面



高城跡 2 T (二の丸) 空堀断面



高城跡 2 T (二の丸) 空堀検出



高城跡 3 T (本丸) 土盛断面



高城跡 4 T(本丸) 断面



高城跡 4 T(本丸) 堀込部検出



高城跡 5 T(本丸)



新城跡 1 T 土塁断面



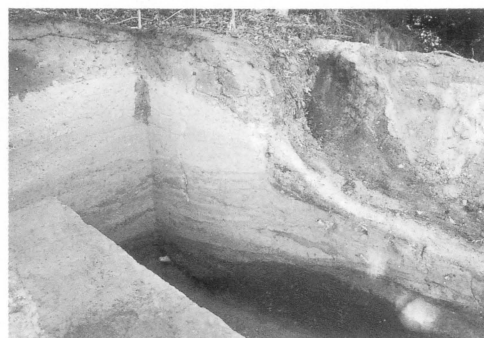
新城跡 1 T 土塁北壁断面



新城跡 2 T

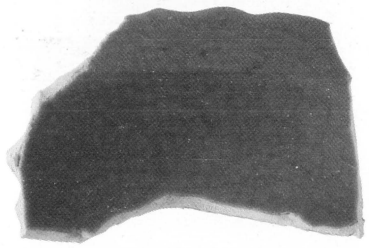


新城跡 4 T 土塁断面



新城跡 5 T 土塁断面

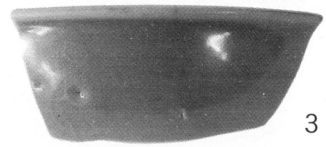
图版 6



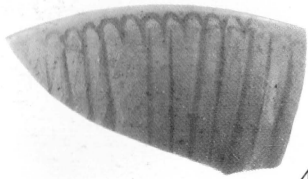
1



2



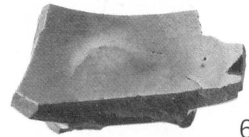
3



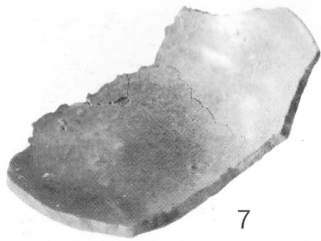
4



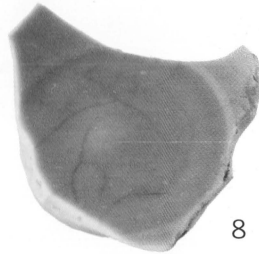
5



6



7



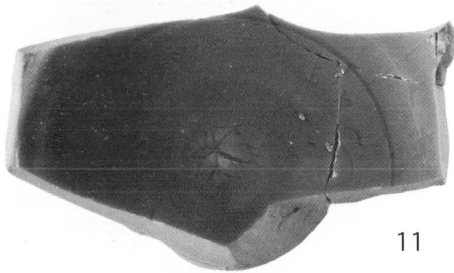
8



9



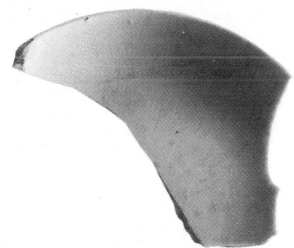
10



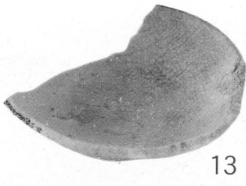
11



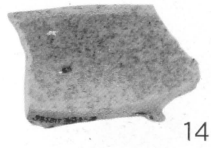
11底



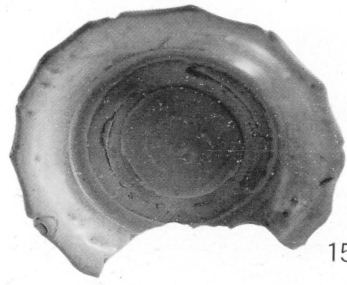
12



13



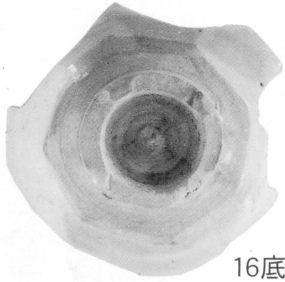
14



15



16



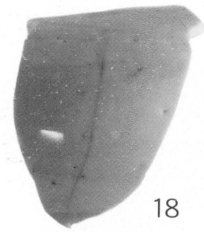
16底



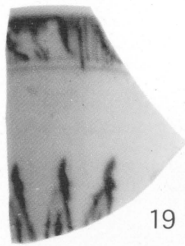
17



17内面



18



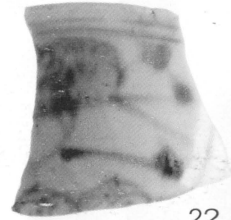
19



20



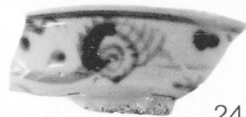
21



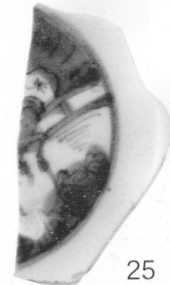
22



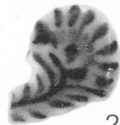
23



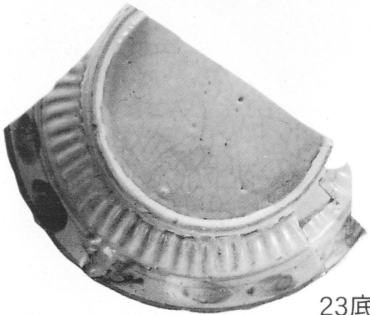
24



25



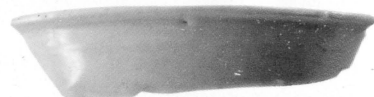
26



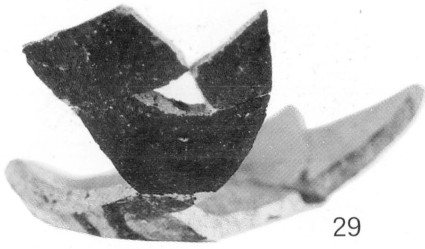
23底



28



27



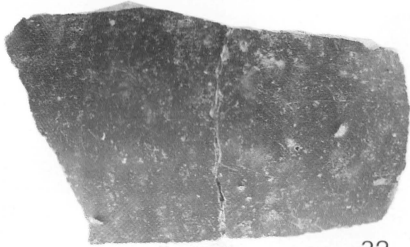
29



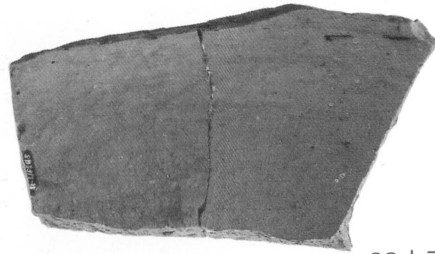
30



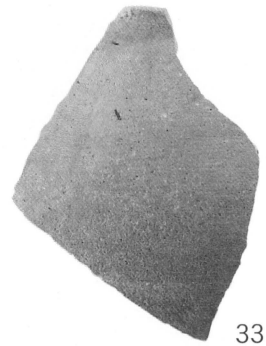
31



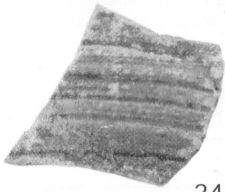
32



32内面



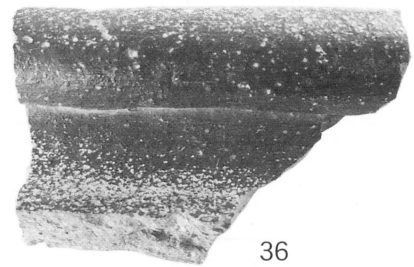
33



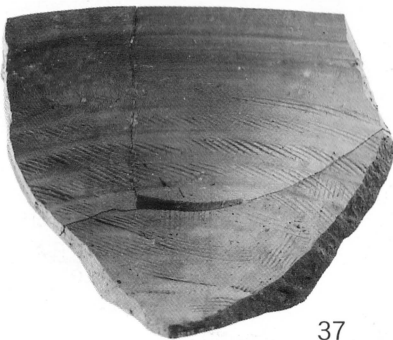
34



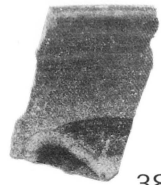
35



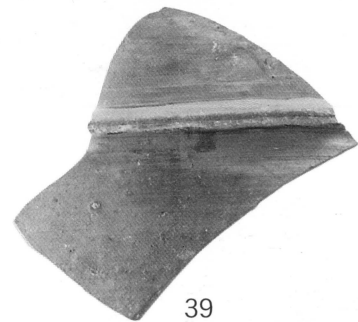
36



37



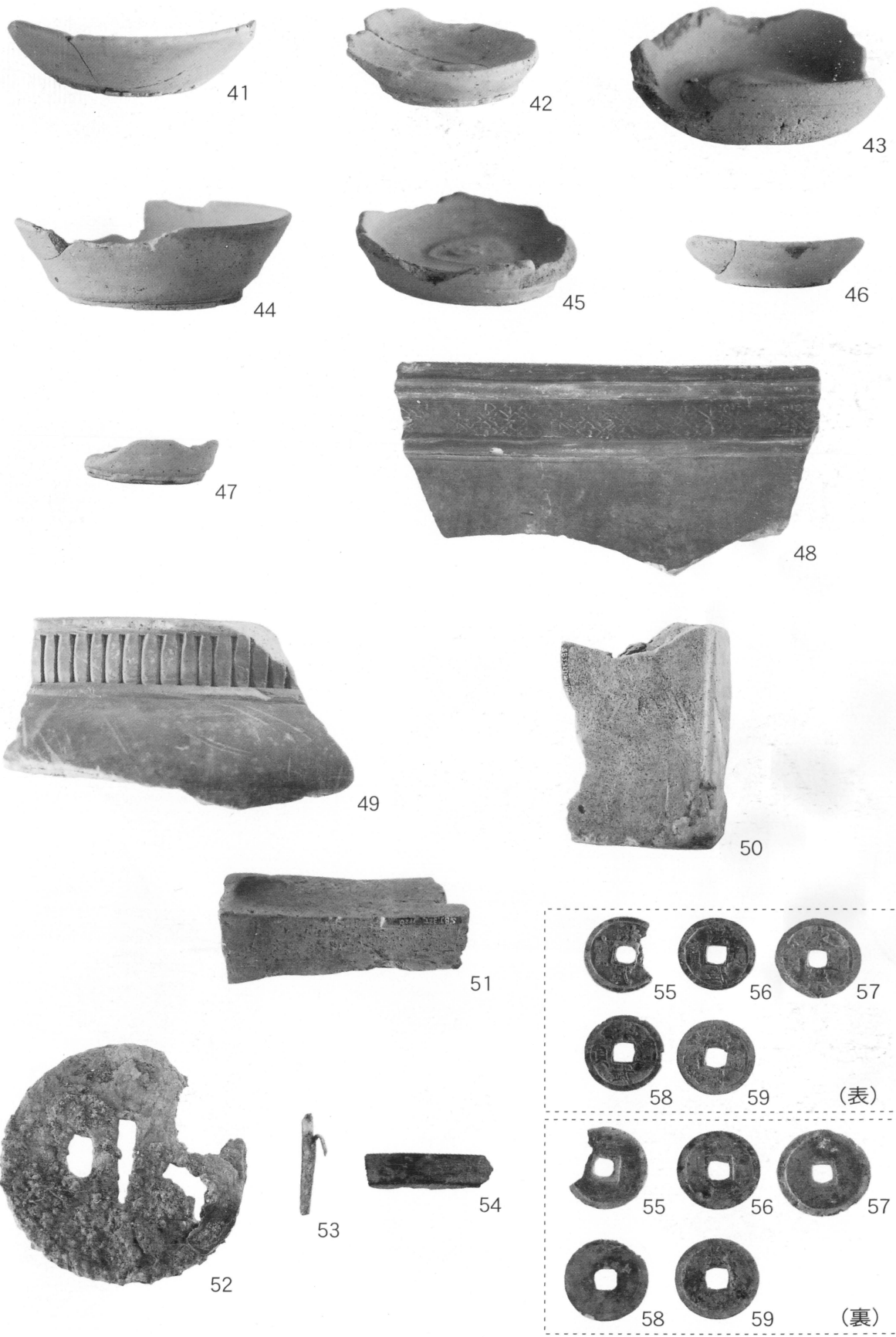
38



39

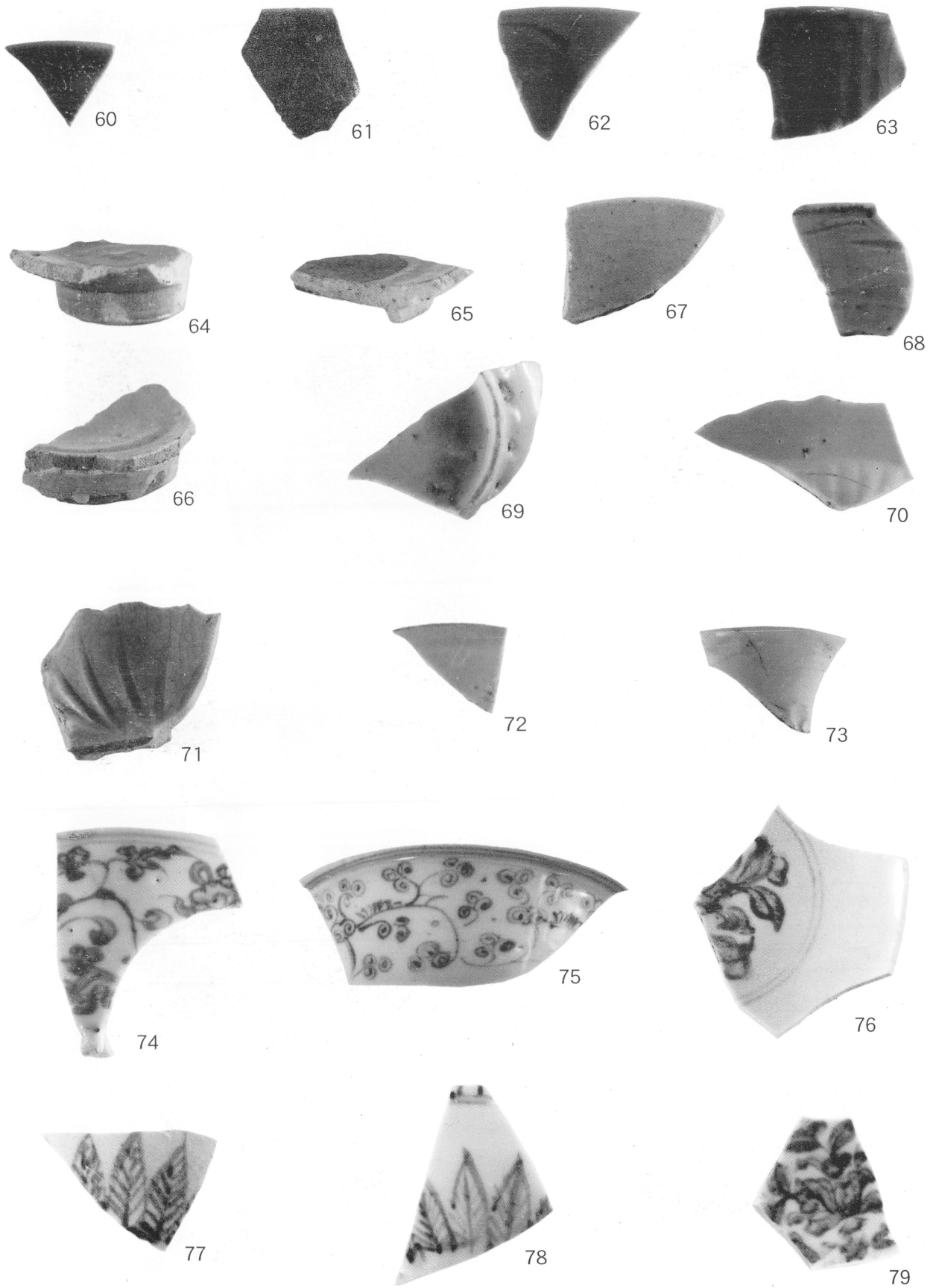


40



内城跡出土遺物(4)

图版10



松尾城跡出土遺物(1)



80



81



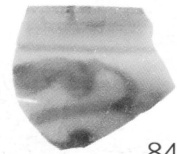
82



80底



83



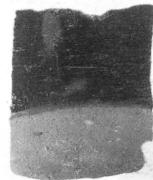
84



85



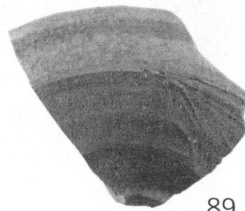
86



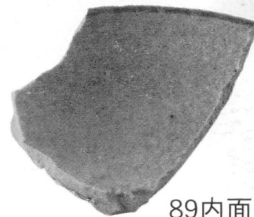
87



88



89



89内面



90



91



93

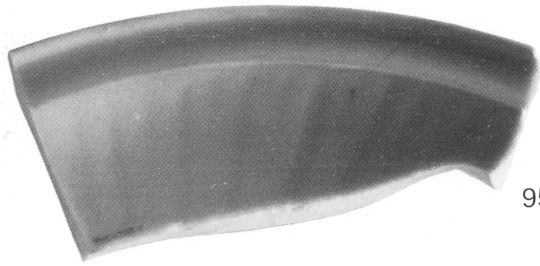


92

图版12



94



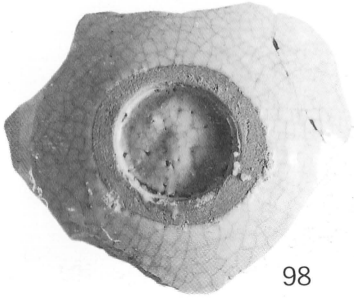
95



96



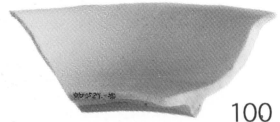
97



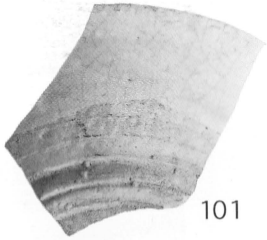
98



99



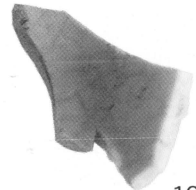
100



101



102



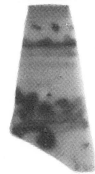
103



104



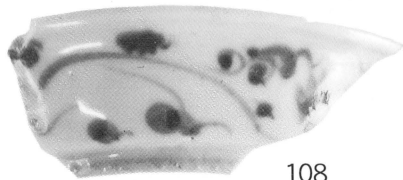
105



106



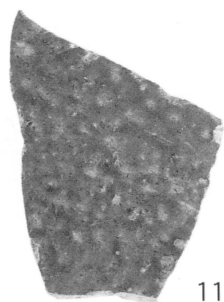
107



108



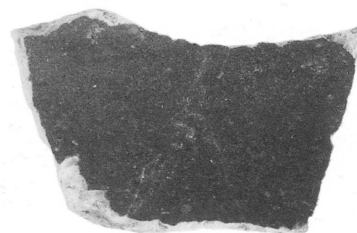
109



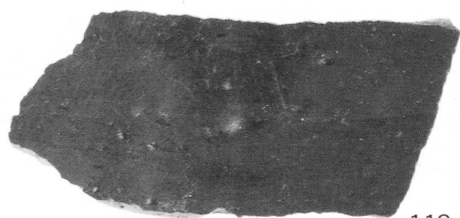
110



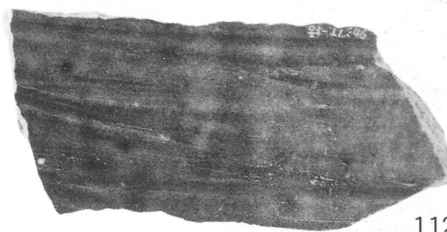
111



111内面



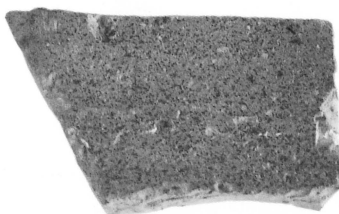
112



112内面



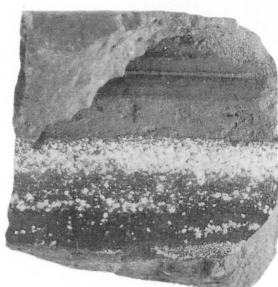
113



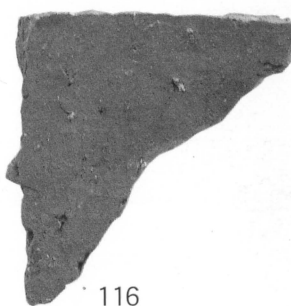
113内面



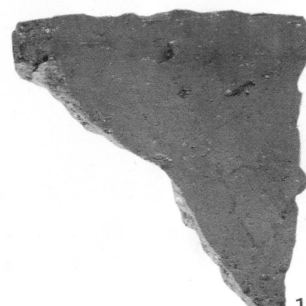
114



115



116



116内面



118

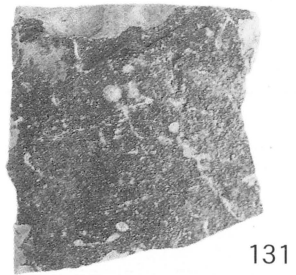
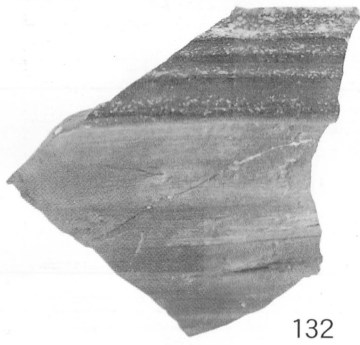
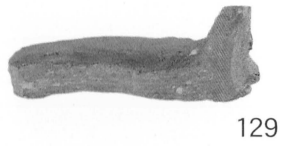
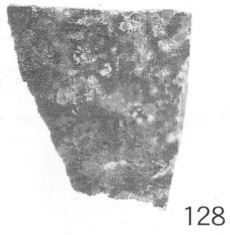
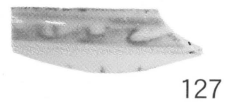
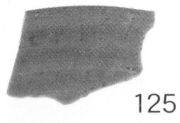
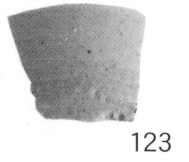
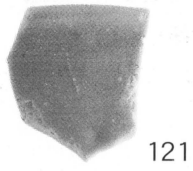
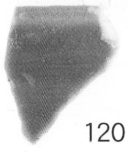


117



119

图版14



志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(34)

志 布 志 城 跡

(内城跡・松尾城跡・高城跡・新城跡)

発行日 平成17年3月

発行 志布志町教育委員会(鹿児島県曾於郡志布志町志布志2丁目1番1号)

印刷所 志布志印刷有限会社(鹿児島県曾於郡志布志町安楽1966-2)

報告書抄録

ふりがな	しぶしじょうあと(うちじょうあと・まつおじょうあと・たかじょうあと・しんじょうあと)					
書名	志布志城跡(内城跡・松尾城跡・高城跡・新城跡)					
副書名	町内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	第2巻					
シリーズ名	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	第34集					
編著者名	大窪祥晃、三木 靖					
編集機関	志布志町教育委員会					
所在地	〒899-7192 鹿児島県曾於郡志布志町志布志2丁目1番1号 0994-72-1111					
発行年月日	平成17年(2001)1月21日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村コード-遺跡番号		調査期間	調査面積	調査原因
		北緯°' "	東経°' "			
しぶしじょうあと 志布志城跡 うちじょうあと (内城跡) まつおじょうあと (松尾城跡) たかじょうあと (高城跡) しんじょうあと (新城跡)	かごしま 鹿児島県 そお 曾於郡 しぶし 志布志町 ちようあざうちじょう 帖字内城	68-173		平成15年 7月16日 ~平成16年 3月19日	475㎡	町内遺跡 発掘調査 等事業
		131° 06' 38"	31° 28' 50"			
	あざまつお 字松尾	68-174		平成16年 6月1日 ~10月25日	271㎡	
		131° 06' 27"	31° 28' 49"			
	あざたかじょう 字高城	68-175				
		131° 06' 22"	31° 28' 38"			
	あざうとうえ 字宇都上	68-206				
		131° 06' 18"	31° 28' 34"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
志布志城跡 (内城跡) (松尾城跡) (高城跡) (新城跡)	中世山城	縄文時代 古代 中世 近世	土塁・堀・虎口 柱穴 礎石建物跡 土坑 溝	縄文土器 石皿・磨石・石錘 土師器 白磁・青磁・染付 陶器・瓦器・瓦 金属製品 古銭 鉄滓		

あとがき

史跡公園整備に向けて志布志城跡の確認調査を開始したのは、平成15年の夏だった。整理作業をしながら、猛暑の中で4つの山城を行き来し、汗を流しながら曲輪から曲輪に転戦した日々を思い出した。また、冷夏といわれた平成16年は、幾度となく台風に見舞われ、調査現場の崩壊を心配する日々が続いた。調査開始から2度目の冬を迎えて、なんとか報告書を刊行することができた。御指導いただいた先生方、作業員さん方のおかげである。心からの感謝を申し上げたい。なお、私の力不足から、一部に掲載できなかった遺物が存在する。忙しい中、時間を割いて遺物指導をしてくださった方々にとって、大変失礼な結果となってしまった。これらの資料は倉庫に埋もらせることのないよう、資料紹介等の形で発表するとともに、この教訓を今後計画されている全面調査に活かしたい。

平成15・16年度 作業員(五十音順・敬称略)

発掘作業員

生重美恵子・池尻幸子・岩田スズエ・上杉みゆき・上原直樹・牛倉セツ子・大久保泉・小野ミエ子・片村光子・川俣唱子・木上美樹子・北村広子・検崎ハツ子・迫トヨミ・柴洋子・下山エル・杉尾木の実・園田テル・田代ノブ子・竹之内カズ子・竹山求・田之上鈴子・寺山京子・浜妙子・春口稔・春口ノリ子・本村安子・前園弘子・又木哲朗・松尾穂美子・見野三千子・道辻ハル子・森川チドリ・山裾忍・山村又男

整理作業員

生重美恵子・上杉みゆき・上原直樹・大久保泉・杉尾木の実